諸星 悠

イラスト・甘味みきひろ（アクアプラス）

空戦魔導士候補生の教官

9

ファンタジア文庫

空戦魔導士候補生の教官 9

A.M.03:00
Blair
Eisenach
Zzz...My master...
I will serve you all my life as your wife...

P.M.04:30
Hmm. This new product isn't bad.
Maybe I should suggest our company to sell it too.

空戦魔導士候補生の教官９

諸星 悠

富士見ファンタジア文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載したりすることを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。
本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容に基づきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

空戦魔導士候補生の教官 9

CONTENTS

P5
プロローグ

P9
第一章
暗躍する人型魔甲蟲

P50
第二章
未知との遭遇戦

P116
第三章
敗北と後悔

P197
第四章
E601小隊のチカラ

P246
第五章
それを買いたのは、彼女たちの覚悟と想い

P305
エピローグ

P316
あとがき

CONTENTS

プロローグ
第一章　暗躍する人型魔甲蟲
第二章　未知との遭遇戦
第三章　敗北と後悔
第四章　E601小隊のチカラ
第五章　それを貰いたのは、彼女たちの覚悟と想い
エピローグ

あとがき

プロローグ

空戦武踏祭一日目。早朝。

各学園浮遊都市の代表たちが、それぞれの胸に秘めた想いに燃える中、ヴィーゲルト邸のリビングルームには、《ベベル》の代表小隊が招集されていた。そこには、青水晶のように輝く瞳に、エリスと同じ金色の髪をした青年――ゼス・ヴィーゲルトの姿があった。

「ご命令を賜り、参上いたしました。ゼス様」

《ベベル》の代表小隊の中から、一人が前に出て、挨拶をした。紫水晶の如き瞳に、尖るような顎先を持ち、顔立ちは美しさと同時に、鋭利さを宿している。その少女の名は――ユミエール・シーザー。《ベベル》代表小隊の隊長だ。

ゼスは、ユミエールたちに、作戦の概要について説明する。

「――ということで、ユミエール。この《崩石》を持っていくといい。計画上、必要だからね。キミたち《ベベル》の代表小隊には、眼についた雑兵を蹴散らしてきてもらいたい。ただし、厄介な魔物は適度に痛めつけるに留めておいてくれ。あとから、リーゼリットに処分させる手筈になっているからね」

《崩石》と呼ばれた黒い結晶を受け取りながら、ユミエールが言った。

「それが、我らの未来に繋がるということですねゼス様」

「ああ。そういうことだ」

「ならば、おっしゃる通りに致しましょう。この世界にしか、もう我らの居場所はないのですから」

ばっと優雅にマントを翻し、ユミエールは仲間たちに声をかける。

「ゆくぞ、我が忠臣――グレゴール」

「はっ、姫様」

ユミエールが率いる《ベベル》代表小隊は、空戦武踏祭に出場するために、リビングルームをあとにしていく。

ユミエールたちに与えた任務は、問題ないだろう。彼女たちは、人型魔甲機であり、この世界の人間相手に遅れを取ることは、万に一つもあり得ない。

しかし、ただ勝つだけでは、ゼスの目的には遠い。
空戦武踏祭では、人類側の若い芽を早々に摘み取り、《ベベル》の代表小隊――人型魔甲鎧たちのチカラを、世界中に見せつける狙いがある。
ゼスは、傍らに控えていた妹――エリス・ヴィーゲルトに声をかけた。
「エリス、リーゼリットを呼んで来てくれるかい？」
「そのお兄様。リーゼはいま少し都合が……」
ゼスが怪訝そうに尋ねる。
「どうしたんだい？」
「《アスモデウス》を失ってしまって、気分が滅入っているんです」
「ああ。そういうことか」
昨晩の戦闘――前夜祭の戦闘で、リーゼリットはペットである《アスモデウス》たちを、殲滅されていたのだ。
その事実を勘案しながら、ゼスはエリスにリーゼリットを連れて来るように伝える。
やがて、色素が抜け切った髪と肌を持つ、まるで白い妖精のような幼女――リーゼリット・フェアチャイルドが参上した。
「リーゼ、試みに問うけど。ペットが増えれば、愉しく戦えるかい？」
「はい、それはもちろんですけど」
「そうか。それはいいことを聞いた」
それから数時間後に、ゼスから命令が下り、リーゼリットは眼を瞠った。
空戦武踏祭一日目の夜から、競技に介入して、第九人工空島にいる参加者を全て処理せよというものだ。警備責任者であるゼスの権力で、空戦武踏祭の運営員だけに乗船が赦された連絡艇を用い、リーゼリットを当たり前のように第九人工空島に送り込めるらしい。ここまではただの任務だ。しかしリーゼリットが驚いたのは、任務遂行のために、ゼスが持つ《アスモデウス》たちを貸与してくれるということだ。
「うそっ!?　ゼス様の《アスモデウス》を貸していただけるの……っ!?」
思わぬ申し出に、リーゼリットは快く任務を承諾した。
わたしの《アスモデウス》を滅ぼした、紅い髪のお姉ちゃん……エリス様から聞いたところでは、ミソラ・ホイットテールという名前の空士と再戦する機会があるかもしれない。
リピングルームを、うきうきと出るリーゼリットは思う。
ふふっ、覚悟してなさいよミソラ。あなたを絶対にわたしのペットにしてやるんだから……っ！

第一章　暗躍する人型魔甲蟲

教皇浮遊都市《ペペル》所属の第九人工空島。

そこには、通常の浮遊都市では、あり得るはずもない環境が再現されていた。本来なら人工物が納められるべき上部構造に、かつて地上に人々がいた頃に見られたであろう、自然が再現されているのだ。

外縁部は全て、鬱蒼と生い茂る森林で覆われている。それも、上空からの光はほとんど木の葉に吸収され、手つかずの密生した木々が、人の行く手を阻む、いまはなき密林だ。人工空島中央部に近づくにつれて、密林が薄くなる代わりに河川が貌を出し、それは中央部の巨大湖から続いていることが窺える。この巨大湖は、人工空島全体の十五分の一の面積を占め、平均水深四〇メートル、最大水深一〇〇メートルを超す、規格外のものだ。

中央部には巨大湖のほかにも、平原が広がっており、そこには人工施設の姿もあった。人工空島中の全制御を一手に司る中央制御棟や、強制転移を目的とした大規模な〈ソーサラーフィールド〉を発生する装置だ。また中央部の地下には人工空島中の水を濾過するために必要な大規模な浄化槽や循環用のポンプ、湖水の維持に必要な水量を管理するための巨大な貯水槽があり、多様な生態系の維持に役立っている。

そのような環境下で、空戦武踏祭の本戦は――バトルロワイアル形式で開催されていた。

空戦武踏祭一日目。午前十時過ぎ頃。

木の隙間を縫うように、緑色の魔力弾が駆け抜けていく。かつて自分がいた場所だ。下手をすれば、あの一撃で倒されて、強制転移されていたかもしれない。

この第九人工空島では、物理ダメージが精神ダメージへと転換され、限界を超えると《ペペル》本体へと転移される特殊な〈ソーサラーフィールド〉が張られている。

くっ、戦況が芳しくないな……っ!?

じめじめとした熱さに堪えながら、ビーナス像の現し身のような美貌の少女――リコ・フラメルが状況把握に努める。彼女の足元には、大型のリュックサックが五つ転がっていた。空戦武踏祭に際し、支給されたテントや食料

が入っている。

密林の中に拠点を作ろうとしていたときのことだ。拠点に相応しい場所を探していた際、敵の待ち伏せにあったらしい。姿を見せぬ狙撃手を仕留めに、前衛の三人が迎撃に向かったが、苦戦中のようだ。

『レクティさん、ブレアさん。敵の位置は摑めましたか……っ！』

さらっとした濃紺色の髪に、エメラルドブルーの瞳の少女――ユーリ・フロストルからの無線が耳をつく。ユーリは魔槍を構えながら、相手の魔槍士と対峙していた。

『あのぅ……狙撃手の位置が』

他校の代表小隊の魔剣士と刃を交えながら、金髪碧眼で小柄の少女――レクティ・アイゼナッハが嘆く。茂みが濃いため、敵の狙撃手の位置が摑めない。どこから来るかわからぬ狙撃に、動きが制限されているのだ。

『リコ。すまぬが、援護してくれぬだろうか？』

月の光を集めたかのように輝く銀色の髪をした少女――ブレア・アイゼナッハが、奥歯を噛みしめ、魔双剣を振るう。相手は二丁拳銃の使い手だ。銃先に刃をとりつけ、射撃と格闘を混ぜた見慣れぬ武術の使い手に、ブレアは舌を巻いていた。

『わかった。いますぐ援護する』

返事をしたリコの耳に、ドローンのモーター音が聞こえてきた。いまは緑が濃くて、上空からこちらを視認できないはずだが、戦闘音を聞きつけたのだろう。密林を縫い、降下してこられたら厄介だ。下手をすれば、ドローンの位置から、こちらの居場所を特定されることになる。

バトルロワイアル――多くの小隊が一度に戦うこの形式で、Ｅ６０１小隊は逃走に専念しようとしていた。空戦武闘祭のルールでは、競技期間は三日間。その間に、各小隊に一個支給されているオーブを三個集めることが勝ち抜き条件だ。

色鮮やかなオーブの大きさは、親指大。持ち主が強制転移された際は、オーブだけがその場に残るように工夫されている。オーブを奪われても、強制転移していない参加者は競技を続けることが赦されているが、オーブを奪われた小隊は戦力が低下していることが多く、三日間続けようとも、勝算は期待し難い。

長期戦を見越し、決戦を控える小隊が護りを固める一方、初日で条件を満たし、逃げきろうとする小隊は率先して攻勢に出てくる。ちょうどいま、Ｅ６０１小隊を襲ってくる小隊のように。

『ブレアがいる辺りに、複数同時射撃を撃ち込む。それと同時に撤退だ。わかったか？』

リコの声に反応し、仲間三人が肯定の返事を返す。しかし、一人分足りない。

リコは眼を細めて、援護砲撃を放つその人物を見やる。

『ミソラ、撤退するぞ。いいか？』

『……』

『ミソラ、聞こえてないのか？　撤退するぞ』

『……う、うん。撤退ね』

返ってきたのは、心ここにあらずといった返事だ。

舌打ちしそうになるのをぐっと堪え、リコは戦闘指揮に専念する。

ミソラはいま、使いものにならない。激しい後悔や自責の念に、苛まれているせいだ。

《崩刀》の使い手との交戦中、カナタ・エイジは、ミソラを庇って負傷した。ミソラにとって、カナタはただの教官ではない。彼女の人生において、もっとも大事で、尊く、不可欠とも言える存在だ。

そんな彼女の胸中は、他の誰にも計りしれるものではない。

『ブレア、いま援護射撃が入るぞ』

リコは木々の合間を縫う僅かな射線を確保し、魔銃の引き金を絞る。

魔銃戦技――複数同時射撃

リコの放った巨大な魔力弾は、途中で四発に分裂。ブレアを掠めるようにして、交戦中の相手へと向かう。二丁拳銃使いは、素早く回避。標的を失った魔力弾は全て地面へと突き刺さり、派手に爆ぜた。

『いまだっ！　退け……っ!?』

リコの言に応じて、レクティとブレアがすぐさま後退して来る。ユーリは殿を務めながら、後退して来た。

『ミソラ、援護砲撃だ。手当たり次第に、撃ちまくれ』

『う、うん……っ！』

乱射されたミソラの紅い砲撃が、追い縋ろうとする敵の勢いを削ぐ。その間に、前衛三人は素早く距離をとる。

こうしてE601小隊は、二度目の撤退に成功した。

一度目の撤退戦の際もそうだったが、ミソラが上の空で、使いものにならない。組織力を重視するE601小隊にとって、これは大幅な戦力の低下だ。

この状況で、どうすればバトルロワイアルを突破することができるか？　カナタとの模擬戦のあと、副隊長に就任したリコは思案に暮れた。

空戦武踏祭一日目。夕刻。

第九人工空島。外縁部。密林地帯。

「状況はあまりよくないですね。このままではオーブを三個集めるどころか……」

「ああ。最終日を迎える前に、わたしたちが呑まれる」

喋りながら、ユーリとリコが木々の間に細工を施す。木の根の近くに張った蔓に、石礫を入れた缶詰をくくりつける。侵入者の接近を伝える、即席の警報装置だ。ピンと張られた蔓に、誰かが触れると缶詰の中で石礫が転がり鳴る仕組みだ。

昼食のあと、空になった缶詰の活用方法について、リコが提案したのだ。

空戦武踏祭初日は散々な出来だが、脱落者が出なかったのが救いだろう。ミソラの不調は、今後の経過を確認していくしかない。あの前夜祭の戦闘で、重傷を負ったカナタと別れたのが原因だ。

クリスやリバーに帰るように促され、《ベベル》の宿泊施設に戻ったミソラたちは、瞬く間に眠りについた。《アスモデウス》戦もそうだったが、《崩力》の使い手との戦闘が堪えたのだ。あの人外のチカラを操る敵を前に、E601小隊は手も足も出ず、死を覚悟していたのだから、精神的消耗も相当なものだったのだろう。

翌日、ミソラたちは、何事もなかったかのように空戦武踏祭に出場した。昨晩の戦闘について、誰にも報告しなかった。あの《アスモデウス》も、リーゼリットと名乗る《崩力》の使い手も、拠点にしているのは《ベベル》に違いない。

本来なら、最も安全な浮遊都市である《ベベル》に、脚が向いているのだ。昨晩のことを誰かに伝えれば、その闇に巻き込んでしまうことになる。

《ベベル》の闇に潜むのは、人殺しに抵抗がない連中だ。自分たちのせいで巻き込まれる人間が、秘密裏に処理される事態は避けねばならなかった。

「リコさん、こっちは終わりましたよ」

「ああ。わたしも、もうすぐ終わる」

缶詰の蓋を使って蔓をかませ、蔓に缶詰を固定する。効果のほどは不明だが、なにもしないよりはマシだろう。

「んっ、珍しい木が生えているな」

「どうしたんですかリコさん？」

とある常緑樹を見やり、リコが答える。

「ユーカリの木だ。葉からとれる精油はアロマテラピーに用いられ、樹皮が非常に燃えやすい。とにかく燃料になる木だ。火の管理が楽になるから、樹皮を少し削りとってレクティに届けるぞ」

罠を仕掛け終え、いくらかの樹皮を手にしたリコとユーリが、キャンプへと戻った。河川沿いの、〈ソーサラーフィールド〉の圏内ぎりぎりのところに、E601小隊のテントが張られていた。外縁部に位置するため、通常より警戒範囲が狭くて済むのがメリットだ。

「ブレアさん。ミソラさんの調子はどうですか？」

「うぬ。まだ本調子ではないようだ」

ユーリが声をかけたのは、歩哨として周囲を警戒していたブレアだ。

「気丈に振る舞っているが、あの一件が尾を引いておるのだろうな」

ブレアの視線の先には、レクティの料理を手伝うミソラの姿があった。

この日。レクティに課せられた役割は、重大だった。

慣れぬ大自然の中で夕食を作りながら、さりげなくミソラの心をケアしなければならないのだ。

この場所に到着して、運営から支給された大型リュックの中にあったテントを敷設した際も、食糧の中にお菓子が含まれていたことに気づいたときも、夜間に発生した急病人の位置を正確に報せるための照明弾と、それを打ち上げる信号拳銃などの物資を確認した際も、ミソラは例の調子だった。

だが、いつまでもこのままではいけない。

夕食のスープ用に、ニンジンの皮を剝くミソラに、レクティが思い切って声をかける。

「そのぅ……ミソラさん。元気ないようですけど、大丈夫ですか？」

「えっ!?　あ、うん。大丈夫っ!?　あはは、あはは。さあ、どんどん剝くわよ」

急に声を上げて笑って誤魔化し、大急ぎでピューラーを動かすミソラ。次に案じることがあれば、ぶんぶん肩を振り回して快調をアピールするだろう、と考え、レクティは胸が苦しくなった。

ミソラは周りからよく「お馬鹿」と野次られる。そのことをレクティはいじめなのでは？　と考え、リコに相談したことがある。

そのときリコは「これはいじめではなく、挨拶のようなものだ」と教えてくれた。

朝に「おはよう」と挨拶するように、ミソラには「お馬鹿」というのが挨拶になっているという理屈である。リコ曰く――挨拶とはコミュニケーションであり、相手の調子を確かめる意味合いもある。「お馬鹿」と言われて、ミソラがきちんと反応を取れるかどうかで、本人が深刻に悩んでいるかどうか確かめている、と。怪理論極まりないが、レクティはそれを聞いて、不思議と納得してしまった。

いまのミソラに「お馬鹿」と声をかけても、しゅんとしたままだろう。しかし、ミソラが自力で立ち上がれない、やわな女だとはレクティには思えない。

カナタさんとの《ペベル》の模擬戦で、みんな大事なものを受け取ったはずです。だからこそ、ミソラさんはきっと立ち直れます。

自分にできることは、せめて悩みを聞くことだと考え、レクティが声をかける。

「そのぅ……ミソラさん、なにか悩みごとがあったら相談してくださいね」

「……」

「あのぅ……ミソラさん。カナタさんが教えてくれたこと、忘れちゃダメですよ」

「……うん、ごめん。次は失敗しないから……」

誰に言うでもなく、ミソラがつぶやく。

「あのときのような失敗は、二度と繰り返さない。二度としたくない」

ミソラの心の叫び声のようなその言葉が、耳について離れなかった。

「立ち直るには、まだ時間がかかりそうですね」

レクティに促され、河川へ水を汲みに行くミソラを見やり、ユーリがつぶやいた。

リコは達観した表情を崩さない。

「いまのミソラなら、放っておいても自力で立ち直れるだろう。ミソラも精神面では、成長している」

「ですが、ミソラさんには、すぐに立ち直ってもらわないと。わたしたちはあと二日で、オーブを三個獲得しなければなりませんから」

そんな話をしながら、リコは、ユーカリの樹皮をレクティに手渡し、効能を説明する。

そのあと、レクティがおもむろに口を開いた。

「あ、あのぅ……念のため、ミソラさんを後衛にさげたほうがいいんじゃないでしょうか？　そのぅ……いのままだと、よくないことが起きる気がします」

「うぬ。私もレクティの気持ちはよくわかる。今日の戦闘では、お互いに慣れぬ地上戦であったがゆえに、どうにか難を逃れた。だが……幸運はそう長くは続くまい」

ブレアの分析は的確だ、とリコは思う。

空士の中に、地上戦のノウハウを持つ者は殆どいない。空士の戦場は、大空であるのだから当然のことだ。

今日経験した二度の遭遇戦では、敵が戦い方を学習している節があった。

空戦武踏祭に選出された代表小隊は、各学園浮遊都市のエリートだ。時間が経つにつれ、地上戦に特化した戦術を編み出す可能性がある。そうなれば、ミソラが不調のＥ６０１小隊など、簡単に破れてしまう。

ブレアが、重々しく口を開く。

「私としては、戦術の見直しを提案したい。無論、ミソラ抜きのものだ」

「リコさん、どうしますか？」

ユーリが、反応を窺うような眼を向けてきた。

そういうことか、と察したリコが悟ったように言う。

「ふっ、女神を試すなユーリ。……残念だが、レクティとブレアの提案は却下だ」

「ぬぅ。どうしてダメなのだ？」

「ミソラのポジションを変えても、ミソラが機能しないという事実は変わらない。それに、わたしたちのチームとしての総合力は、空戦武踏祭の参加者の中でもあまり高くないはないだろう。そんな中、実質四人で相手小隊と戦うのは、分が悪すぎる」

「あ、あのぅ……でも、ミソラさんを中衛にしたままでも戦力は……」

「ああ。だが、これは三日間の勝負だ」

副隊長として、リコはこの日指揮を執っていた。しかし、作戦の意図を説明していなかったため、レクティとブレアに心配させていたらしい。

「おそらく空戦武踏祭に参加する小隊の中でも上位層は、初日で悠々と下位層を倒してノルマを達成し、あとは護りを固めるはずだ。つまり、バトルロワイアルの期間中に強敵と遭遇する確率は、二日目以降は低くなる。そうなれば、二日目以降は中間層が主な相手だ。上位層と戦闘する可能性が一番高い一日目を凌げば、勝算が生まれる。ミソラが心を整理し、本調子で中間層相手に戦える可能性だ」

「あのぅ……たしかに今回のバトルロワイアルは、三日間の勝負ですね」

「うぬ。初日で特に成果が出なかったからと言って、焦る必要はないということか」

「ふっ、そういうことだ。もう少しミソラの様子を見守る。レクティとブレアは、ミソラについてやってくれ」

努めて余裕ありげに、リコが言い放った。レクティとブレアが河川に向かって行くのを見送っていると、ユーリが声をかけてきた。

「さすがは女神兼副隊長兼参謀ですね」

からかわれているな、とリコは唇を尖らせる。先程のリコの発言が、希望的観測であることを見抜いていたのだろう。案の定、ユーリはこう指摘してきた。

「ですがリコさん、二つ見落としてますよ。一つ目は、仮に今日を含めて三日で、ミソラさんが調子を取り戻すとは限らないということです。おそらくミソラさんが本当の意味で調子を取り戻すには、カナタ先輩と再び会う必要があるでしょう」

そうだろうな、とリコは内心で頷く。だが、それは不可能だ。あの男が狂乱状態を凌いだところで、競技中に第九人工空島に貌を出せるわけがない。

カナタと会うのは、このバトルロワイアル中は絶対に不可能だ。

「もう一つはなんだ？」

「ミソラさんが致命的ですが、浮足立っているのはわたしたちも同じということです」

「やはりユーリも、そう感じていたか」

カナタとの模擬戦以来、E601小隊の士気は上がっている。カナタ不在でミソラが不調の中でも、いまだ勝利を求めているのが、その証左だ。

それほどまで、カナタとの模擬戦は、E601小隊の心に感じさせるものがあった。E601小隊はまだ強くなれる可能性がある。

しかし、その形が定まっておらず、まだ見えてこない。

バトルロワイアルの最中で、E601小隊がどんな奇跡を起こすか。その結果次第で、E601小隊の価値が決まる。それと同時に、カナタ・エイジという教官の価値も。

だが、とリコは思う。わたしたちはこの戦に臨む前、あの男との模擬戦で大事なことを学ばされた。

言葉ではなく、心で感じ、魂に刻み込まれた熱い想いがある。

「あの男が不在の中で、わたしたちが何を考えて動くか。そしてあの男を負傷させた責任を感じるミソラがどう動けるか。それこそが、このバトルロワイアルを勝ち抜く鍵だ」

＊＊＊

空戦武踏祭一日目。夕方。

第九人工空島。密林地帯。

「ミーナ……っ！」

魔銃士のレイラから通信が入り、眼下に追い込まれた魔剣士が飛び出してきた。

直後、くるくると巻かれたブロンドの髪に、奥深い紫色の瞳の少女――ミーナ・パープルトンが樹の上から飛び降りる。

『任せてちょうだい……っ！』

巨大な魔戦斧を大きく振りかざし、着地寸前にそれを振り抜いた。

不意を突く、痛烈な一撃を浴び、魔剣士は吹き飛ばされると同時に、淡い燐光に包まれ、消失していく。この第九人工空島に展開された強制転移用の〈ソーサラーフィールド〉により、《ベベル》本島へと転移されたのだ。

あとに残った紫色のオーブを手に取り、ミーナは背後を見やる。

そこには樹木に偽装して、狙撃をしていたレイラの姿があった。

『周囲に他に人影はないわ』

『わかった。……状況終了。みんな、ご苦労さま』

仲間たちに連絡を告げ、戦闘状態を解除させる。

これで二個目のオーブを確保。自分の小隊に支給されたオーブは計算に含まれないので、あと一個オーブを確保すればいい計算になる。

初日の成果としては、順調過ぎるくらいだ。

そんなときふとミーナは、ミソラさんたちは大丈夫かしら？　と疑問に思った。

第九人工空島への連絡艇は、E601小隊と同じ便だった。そこまでは、教官も同行できるはずだが、カナタ・エイジの姿が見当たらなかった。ミソラたちにも声をかけたが、要領を得ない返事が返って来るばかり。肝心のカナタ・エイジの所在について、答えは返って来なかった。

「ミーナ、どうかしたの？」
「いえ、なんでもないわ」
気を取り直し、ミーナは集合する仲間たちと今後について話し合う。
「それでどうするんだ？　今日はこのまま休むのか？」
「《ミストガン》代表の名に恥じない働きをしたはずだ」
「必要なオーブは残り一個。今日はこのままゆっくり過ごしてもいい気がするな」
「まあ、それも悪くないわね」
べつに勝ちを急ぐ必要はない、とミーナも思う。
下手に強敵と争って、敗れることになれば、元も子もないからだ。
弱者には弱者の戦術があり、傷っていると痛い目を見る。E601小隊との戦いを経験したいまなら、それがわかる。そしてA177小隊が、その弱者の戦法で、優勝候補の一角を崩すことだって、できるかもしれないことも。
このバトルロワイアルの状況を上手く利用すれば……例えば強敵同士が戦い消耗したあと、労せず漁夫の利を得ることもできるからだ。
ミソラたちと戦い、敗北という糧を得たからこそ、ミーナは新たな一手を打ちたいとも思っていた。いまを凌ぐだけで必死のE601小隊と違い、ミーナには、もっと先を見据える余裕がある。
そんなとき、遠方から巨大な爆音が響いてきた。
「ミーナ、向こうの大きな爆発は――」
「おそらくは、相当な実力者ね」
強いチカラが、行使されたのだろう。研ぎ澄まされた闘気の余波が、ミーナがいる場所からでも感じとれた。おそらくは、闘気を放った人物は誘っているのだ。ここでお前らを待っているぞ。わたしを倒したければ、かかって来るがいい、と。
空戦武踏祭でこんなことができるのは相当な自信家か、または、自らの腕に並外れた覚えがある者に違いない。
不意を突かれても、勝つ自信があるっていうことね。ミーナが頭に手をやり、考え出す。そんなとき、魔統上のレイラが不意に口を開いた。
「みんな、気配を殺して」

その声に反応し、全員は一切の音を断ち、身を低くする。
すると密林のずっと向こう側を、金色のモールなどで装飾が施された儀仗兵のような格好をした集団が、見たことのある少女に率いられ、爆心地のほうへ向かって行くのが見えた。
あれは……《ファルシオン》？
学園浮遊都市《ファルシオン》。来る者を寄せ付けぬ、刺のような雰囲気を持ち、若干天然パーマがかかった、ふわふわした桃色の髪の少女――ノエル・ル・サンスーシ・デア・ランシール・ド・ワーフが率いる小隊だ。優勝候補の一角とされ、ミーナが事前に情報収集していた小隊でもある。
短絡そうで、意外と計算高いノエルさんの性格なら、どう動く？　《キメラ・ブロッケン》の硬皮を、正面から貫きつつも、カナタの実力を見定めようとした彼女なら……おそらく爆心地へ向かうはず。しかも強者に対し、奇襲を仕掛け、確実に勝利を得ようとするはずだ。
せっかくだから、この機会利用させてもらうわ。
ミーナは口元をふっと弛めたあと、今後の方針について、仲間たちに説明した。

紅蓮の長剣が、大気を薙ぐ。
振り下ろされた一撃は、獲物の意識を一瞬で刈り取るに留まらない。余る勢いは、地を薙ぎ、大地を裏と穿った。
その軌線に位置した人物は、瞬く間に消失して行く。
これで《ノーランド》代表は、二人目の脱落者を出した。
最初の一人は、紅蓮の火球の直撃を受け、跡形もなく消失していた。戦技の余波である炎が飛び散り、密林のあちこちでいまだに燻ぶっている。
そんな場所の中心に立つのは、戦場こそが故郷とでもいうかのように、嬉々とした笑みを浮かべる一人の少女。
紅蓮の長剣を握り、白いマントに、紫色の、絹であしらわれたかのような、贅沢なドレスのような防護服を纏う彼女こそが、《ベベル》代表小隊の隊長――ユミエール・シーザーだ。
『全員でかかって来るがよいぞ雑兵。我が武の前に、塵芥にしてやろう』
ユミエールの視線の先には、《ノーランド》代表小隊の三人がいる。彼らはみな一様に、明らかな怯えと戸惑いの

表情を浮かべていた。

さもありなん。ユミエールの仲間である《ペベル》の代表小隊の隊員たちは、いまだにユミエールの後方に控え、一歩たりとて動いていないのだ。つまり戦闘開始時は、一対五。だというのに《ノーランド》代表小隊が、手も足も出なかった。

そこにあったのは、純然たる武力の差。

これまでの鍛錬で培ってきた魔剣術、動きの読み合い、潜り抜けてきた修羅場の数、絶対的な魔力、圧倒的な身体能力――戦いのあらゆる要素に、大きな壁がある。

『うおおおお……っ！』

《ノーランド》代表小隊の一人が、攻めてきた。

最初に迫った斬撃を、ユミエールは滑らかな横ステップで躱す。同時に紅蓮の長剣が一閃。迫った《ノーランド》代表の体に、一瞬赤い筋が入ったかと思った刹那、その一太刀で、相手の空士が絶叫とともに消失していく。

『ひぃ……っ！』

残る二人が、その場から逃げ去ろうとする。

だが、ユミエールが獰猛な笑みを浮かべ、紅蓮の長剣を薙ぐ。直後、切先から苛烈な火球が飛び出し、地面にばっと広がり、逃走経路を塞ぐ。

同時に、肌を焼きつくすような炎熱が、《ノーランド》代表から冷静さを奪いとった。彼らに残された、空へ逃走という選択肢を消し去ったのだ。恐慌に駆られ、ロクな判断もできずに向かい来る二人を、ユミエールは紅蓮の長剣で容易く討ちとってみせた。

『ふんっ、つまらぬ。我に歯向かうというのに、この程度か』

各学園浮遊都市の代表と言えど、所詮学生だ。ゼスの配下として、裏の戦いに手を染めていた彼女の敵ではない。

『姫様、下郎の相手なら我らでも事足りますが』

『あまりつれぬことを申すなグレゴール。我もたまには運動をせねば、腕が鈍ろう』

後方に控えていた部下の進言に、清々しく返すユミエール。ゼスに従っているとはいえ、グレゴールたちはもともとユミエールの配下だ。以前の名残で、ユミエールのことを姫様と呼び慕っている。

そんなとき、右手側の茂みから気配。襲撃者の存在に、ユミエールが好戦的な笑みを浮かべ振り向く。そこには、

桜色の唇をきゅっと引き締めたノエルの姿があった。《ペベル》代表小隊の前に姿を晒したノエルは、サーベル状の魔剣を展開。まるで決闘でも望むかのように、ユミエールの前に立ちはだかる。

『じゃあ、次はわたしが相手になってやるわ。かかってきなさいよ』

『手を出すなよ、我が騎士よ。これは我の獲物だ』

『しかし姫様。姫様にばかり下郎の相手をさせては、我らの立場が……』

『かまわぬ。我に二度同じことを言わすつもりか』

活きのいい獲物の出現に、ユミエールが愉快そうな表情を零す。

その瞬間、ばっ！　と地面が爆ぜた。ユミエールは空間を跳躍したかのように、ノエルとの距離を一瞬で詰め、紅蓮の長剣を叩きつけた。剣撃が命中する直前、ノエルの眼は大きく見開き、驚きも言われぬ表情をしていた。

先程の雑魚同様、一撃で終わりかと思いきや、そうではない。

ノエルはサーベルを横にして受け止め、ユミエールと渡り合っていた。

『ほう、面白い』

ならばこれはどうだ、とばかりに、ユミエールは紅蓮の長剣に炎熱変換した魔力を宿らせ、剣身を熱する。すると、ノエルの握るサーベルは高熱に煽られ、僅かずつ形状が歪み出すではないか。ユミエールが、このままサーベルを溶かしてやると思った刹那、ノエルのサーベルは突如として風を宿し、炎熱を冷まし始め、浸食が止んだ。

『ふんっ、我と結び合える輩がいたか』

一度間合いを取った後、ユミエールは、ようやく遊び相手を見つけた、とばかりに躍りかかる。腰を落とした姿勢で右下から逆袈裟斬りを放った後、一気に相手との間合いを詰め、返す刃でもう一撃。剣勢に弾かれるノエルを前に、相手の出方次第では、さらに刺突を放とうと左の脇構えを取る。

『く……っ！』

だが、弾かれたノエルは一向に反撃してくる仕草がない。間合いを取り、こちらの様子を窺うだけだ。興醒めだな、と呆れながら、ユミエールは視線をノエルではなく、自分の後背に位置する密林へと向ける。

『我はここにいるぞ。どうした？　臆せずに、森の中から姿を現さぬのか』

ユミエールの問いかけに、言葉はない。

ただ返事の代わりというかのように、森林から一発の魔力砲撃が返ってきた。

狙撃だ。くだらぬと思いながら、ユミエールは魔力砲撃を両断する。その直後、砲撃があった木の上から、眼つきが悪く、逆立てた黒髪をした少年――ジルグ・フェンサーがおりてきた。着崩した服装で、サーベルを抜刀している。

『ノエルが手こずっているぞ、援護砲撃をもっと撃て。近づいてくる奴らは、俺たちで迎え撃つ』

『誰が手こずってるっていうのよ』

ジルグの一声に反応し、ノエルは小柄な体躯を活かした軽快なステップで、ユミエールの周囲を跳ね回り、間合いを測る。

直後、木の上の魔砲士がユミエールに執拗に砲撃を放ってきた。

撒きあがった土煙でその身が汚れる間、ノエルは己の剣技で、正面からユミエールをねじ伏せようとはしてこない。直接斬り合うのを避け、持久策を取ったのだろう。

『戦いに対する矜持が足りぬな』

くだらぬ小細工に、ユミエールが半ば落胆する。もっと正面から獲物と斬り結びたい。圧倒的なチカラの差を、ものともせずに挑んでくる相手を、チカラで叩き落としたい。

それこそが、戦場の悦楽だというのに……

『グレゴール、貴様らは《ベベル》代表を喰おうとする愚か者どもに、我らが武を示せ』

『御意に』

副官のグレゴールが恭しく返事をし、仲間たちとともに、ジルグたちがいる密林へ突き進む。その間ノエルは、ユミエールを前に息を荒らげ、額に脂汗を浮かべていた。

これが《ベベル》代表小隊の実力……っ!?

ユミエールと剣戟を交えながら、ノエルは全身が発する危険信号に苛まれていた。

先程から仲間たちからの通信が耳をつくが、対応する暇はない。

隙を見せたら喰われるっ!?　こんなことなら勝負服を着ればよかったわ……っ!?

合理性を重視する《ファルシオン》では、制服に刻印術式を施し、簡易な防護服として利用できるようにしている。むろん、ある覚悟を決めたときに着る防護服もあるが、それは命のやり取りがない、競技で着るべきものではなかったのだ。

『ふんっ、貴様は奇妙な魔剣術を使う』

紅蓮の斬撃を放ちながら、ユミエールが嬉々として言ってきた。

日頃から仲間たちに、不機嫌そうと言われる相貌が、ますます厳しいものになる。

『く……っ！』

苛烈な炎熱を宿した斬撃に、ノエルが下唇を噛む。下手に正面から受けて立とうものなら、その炎熱を伴った剣勢にサーベルが折られる気がする。

ゆえに、ノエルは得意の滑らかな魔剣術で、ユミエールの剣勢を受け流し続けていた。

魔剣そのものに、飛行魔術を派生した術式で、風力を宿す。それは接近戦において、多彩な応用が可能だ。斬撃威力の強化や……敵の剣勢を逸らし、致命傷を避けることも。

だが、ノエルはそれで手一杯になり、仲間たちの戦闘経過を知る余裕がなかった。

『雑兵の割には、よく保ったな』

紅蓮の長剣の切っ先をこちらに向け、ユミエールがノエルを見据える。いや、それは見据えるのではなく、見下すというのが正しい。ユミエールの眼差しには、弱者に対する蔑み、嘲笑が込められていた。

「ここで脱落するのもさぞや無念であろう。この場で頭を下げるのであれば、見逃してやってもよいぞ』

勝ち誇った《ベベル》代表小隊隊長の一言が、ノエルの心に火をつけた。

『《ファル・シオン》代表が、そんな格好悪い真似できるわけないでしょうが……っ！』

都市の名を背負って立つ以上、無様な真似は許されない。手に握られし魔剣に、ノエルは飛行魔術の派生術式――風の加護を付加し、

「これで少しは悔しがりなさい……っ！』

自慢の斬撃を、ユミエールに正面から叩き込む。ユミエールは片手に握った紅蓮の長剣で、何の変哲もない斬撃を防ごうとする。

だが、そこで予想外のことが起こった。突如として、ノエルの斬撃が曲がったのだ。それは紅蓮の長剣を避けるように、鋭利な斬線を描き、ユミエールの手元へと向かった。

『ほう……』

殊更奇怪な斬撃に反応し、素早く手を引っ込めるユミエール。しかし、ノエルは素早く手元を返すと、風の加護を受けた加速を駆使して、ユミエールの額を掠めた。とたんに、嘲笑しか知らぬユミエールの貌付きが一転。いささか見直した貌をする。

『我に手傷を負わせるとは。貴様、賞美にこの場で首を斬り落としてやるぞ』

『気持ちいいわね。やれるものなら、やってみなさい』

言いながら、ノエルは二段階の変則斬撃――鷹の旋風を放つ。

読めぬ斬線から生まれる連撃が、ユミエールの注意力を削いでいくのが、見てとれた。

隙ができたら、あとは螺旋龍風破をお見舞いしてやるわ。

せめて首級はあげてやると意気込むノエルの前で、ユミエールが嬉々として笑い始めた。

『ははは、よい。じつによいぞ。これが獲物を喰らう醍醐味だ』

『この状況で笑うなんて余裕ね……っ！』

絶対にぶちのめしてやる、とノエルが魔力を高めた。

何か仕掛けてくる気配を感じ取ったのだろう。ユミエールが来るがいいとでもいうかのように、口の端をつりあげた。

直後、ノエルが動く。苔の生えた地面に、ブーツの爪先をめり込ませ、おもいっきり蹴り上げる。地面を剣がすようにして、ユミエールの顔面へ上を浴びせようとした。

鷹の旋風を警戒していたユミエールは、対応がやや遅れる。飛んできた土砂を、体全体を後ろへ反らすようにして躱した。だが、その瞬間。ノエルの姿は、ユミエールの間近へと迫っていた。

『騙がらら空きよ……っ！』

ここぞというタイミングで、ノエルが一撃放とうとする。

しかし、そんなノエルに対し、斬りかかって来る者がいた。

『うそっ!? まさか……っ!?』

『なかなかに骨がありましたが、状況が悪かったですな』

服の上からでもわかる、筋骨隆々とした青年が立ち塞がった。《ベベル》代表小隊の副隊長――ラルゴ・グレゴールだ。本来ならば彼は、ジルグたちと交戦中のはずである。

しかし、ユミエールの周囲には、グレゴールだけでなく、他の《ベベル》代表小隊の隊員たちの姿。それが意味するのは、《ファル・シオン》の仲間たちが破れたという事実のみ。

くっ!? ジルグの間抜け、陸戦での不慣れが祟ったわね……っ!?

《ファル・シオン》の学生は、粘り強さと勤勉さが売りだが、応用力に欠ける嫌いがある。空戦ならば、もっと粘れたはずだ。だが、いまその事実を悔やんでも仕方ない。

『グレゴール、くだらぬ手出しをするでない』

『はっ、失礼いたしました姫様』

眼前には、ユミエールたちの脅威が迫る。ユミエールはなおも一騎打ちを継続するつもりらしく、余裕の表情を崩さない。それが奥の手を隠した人間の貌であることを、ノエルは経験的に知っていた。

交戦すれば、負けは必至。かといって、この人数から逃れるのは至難の業だ。

絶体絶命ね、と思いながら、ノエルが勝算のない賭けに出ようとしたときだった。

『行くわよ。後背を突くわ』

突如として、巨大な魔戦斧を構えた少女が率いた集団が、御伽飛行で襲来してきた……！

『レイラ、他の仲間を援護してちょうだい……っ！』

ミーナは地面を舐めるように飛行魔術を駆使しながら、ユミエールに魔戦斧を振りかざす。仲間たちも同様に、一斉に《ベベル》代表小隊へ襲いかかる。《ベベル》と《ファルシオン》の両小隊が交戦中の間に、《ミストガン》代表は方々に展開し、襲撃に最適な位置へと移動していたのだ。

巨大な魔戦斧を、ミーナが振り下ろそうとする。するとユミエールが、紅蓮の長剣で受けようとするのが見て取れた。そのとき、ミーナの己の勝利を確信する。

『悪いわね、もらったわ……っ！』

その直後、本気の斧撃がユミエールを襲った。ミーナの魔戦斧は、通常の空士には受け止め切れず、障壁破壊と呼ばれる。

この斧撃は受け止めるのではなく、躱さなければいけないのだ。だからこそ、ミーナは勝利を確信したが、その確信は容易く裏切られることになる。なぜならば――

『う、うそ……っ!?』

ミーナの斧撃を、ユミエールは受け止めていたのだ。

むろん、平然とというわけではない。ユミエールの足は地面の中へと深くめり込んでいる。その体には莫大な魔力で身体強化が施されているのだ。

だが、それだけ。たったそれだけで、チカラの拮抗状態を作り出していた。

『悪くはない腕だ。だが、我の前ではチカラ不足』

流石は《ベベル》代表小隊の隊長ね。そう思いながら、ミーナは魔戦斧を振りかざし、第二撃を叩き込もうとする。

同時に、ミーナの周囲では、仲間たちが《ベベル》代表小隊相手に奮戦していた。連携がよくとれ、樹の幹の上に狙撃ポジションを確保したレイラが、的確に援護射撃を放っている。

ミーナの第二撃が襲う。ユミエールはなおも、地面に沈み込みながら、斧撃を受け止めた。直後、ユミエールの反撃。紅蓮の長剣が煌めき、ミーナへ襲い来る。ミーナは巨大な魔戦斧を盾にしたが、それでも剣勢に押され、がっと吹き飛んだ。

ユミエールの、この圧倒的な膂力はなに？

ノエルと交戦中のときもそうだったが、戦闘中の魔力消費が激し過ぎる。《ベベル》代表小隊の隊長に選抜されるくらいだから、魔力量も相当なものだろう。

だが、この闘い方はまるで、魔力――事象干渉力が無尽蔵にあることを前提にしたような戦い方だ。

しかし、現実にそのようなことはあるはずもない。

一旦弾き飛ばされたミーナは、次は全力の雷電衝撃をお見舞いしてやる、と魔力を高める。ミーナたちの参戦により窮地を脱したノエルも、逃げ出さずに、魔力を高めていた。

どうやらユミエールに一矢報いるつもりらしい。

『ふむ、余所の小隊との挟撃か。凡人にしてはいい手だ』

ユミエールが、戦いの高揚感に酔いしれるかのように口の端をつりあげた。

A177小隊の魔術士――ザムドと交戦中だったグレゴールが、機敏に気づく。

『姫様、あまりはめを外し過ぎますと……』

『赦せ、グレゴール。久々に、鱗りがいがある獲物なのだ。ならば、多少は本気を出したところで罰は当たらぬであろう』

多少は本気……？　こっちは常に本気で戦っているのよ。

ユミエールの言葉が耳に入ったミーナが、魔戦斧を持つ手にぐっとチカラを込める。

騎士の誇りにかけて、必ずこの一撃を通す……！

昂るミーナが動くと、ノエルも動いた。そして両者が、同時に戦技を放った刹那――

な、なにこれっ!?　まずい……っ!?　一瞬で、ミーナの周囲が獄炎に包まれた……！

獄炎。それは、地獄の業火。

ユミエールは先天的に、魔力を炎に変えられる性質がある。その性質を利用して、持てる魔力のほぼ全てを、一気に熱に変換したのだ。

人型魔甲蟲である彼女が全力を出せば、誇張なしにこの第九人工空島を燃やし尽くすことができる。この惨憺たる結果に直面した者たちにも、そこまでは想像できまい。だが、ミーナもノエルも間違いなく、脅威を覚えただろう。ユミエールが使った魔力の瞬間開放に。

『ふむ、もう少し愉しめるかと思ったのだがな』

紅蓮の長剣をゆっくりと降ろし、ユミエールが周囲を見回す。まるで彼女を中心に、大規模砲撃が直撃したかのようだった。周辺の木々が薙ぎ倒されるとともに炭化し、地面のあちこちに、魔力の炎が燻ぶっている。周辺にいたレイラたちの姿はすでに地に崩れ落ち、体が粒子と化し、《ベベル》へ転送されている最中だった。

上空から見れば、このユミエールを中心としたこの空間だけが、密林の中で唯一荒れ地になっていることだろう。《ベベル》代表の姿を映そうと、陽が落ちかかっている空に、中継用のドローンが飛んでくるのが見て取れた。

一気に魔力を消費しきったユミエールが戦闘するには、呪力か《崩力》が必要になる。だがドローンの監視下で、それを使うことは赦されていなかった。

『ふっ。こざかしいのが二人、上手く逃げおおせたか』

『姫様、《ファルシオン》と《ミストガン》代表小隊の隊長のようですな』

残りの《ミストガン》代表小隊は、ユミエールの炎撃の余波を浴びて、強制転移させられたのを、グレゴールが確認している。

グレゴールたちは、ユミエールの行動を読み、咄嗟に障壁を張ったことで無傷だった。

ユミエールは眼を細め、闇に包まれつつある密林の向こうを眺める。

『追撃なさいますか？』

『よい。あれだけの空士であれば、また相対する機会もあるであろう』

『左様ですか』

『ああ、程よい運動であった。……では、そろそろリーゼリットとの合流地点へ向かうとするか』

白いマントを翻したユミエールに続き、《ベベル》代表小隊の全員が行軍する。やがて夜空に星が輝きだした頃、ユミエールたちは合流地点へ到着した。

視界に映ったのは、五階建ての中央制御棟、強制転移を目的とした大規模な〈ソーサラーフィールド〉を発生する装置など、大会運営に必要な主要設備。

現在位置は、第九人工空島の中央部だ。

ユミエールたちは、当たり前のように中央制御棟の中へと入る。本来なら、そこには空戦武踏祭の運営委員が待機しているはずだが、人間の姿は見当たらない。いや、人間の姿はあった。警備や事務の格好をした数名が血を流し通路に倒れている。その傍らには、怪物の姿へ変貌を遂げた人造魔甲蟲《アスモデウス》の姿があった。おそらく警備や事務に扮して、潜入していたのだろう。

『予定通り制圧したようであるな』

ユミエールたちは、三階に位置する、制御室の中へと進んだ。日中であれば見晴らしのいい部屋のあちこちに、制御用の情報端末が設置されている。

『姫様、少々お待ちください』

グレゴールは、とある端末の前に立つと、ドローンの管理プログラムにアクセスし、キーボードを叩き始めた。

『人工空島内のドローンに仕込んでおいた妨害電波発生装置を起動します。これ以降は、通信結晶の周波数帯は使用不可能です。大型通信機をご利用ください』

名前の由来は、長距離行軍に際し背中に背負う姿が、学生用の背負い鞄に似ていることからである。部下の一人が、あらかじめ屋内に用意されていた大型通信機を背負った。有事の際に、ゼスから指示を乞うためのものだ。

グレゴールは、数のいい学生がドローンが通信妨害していると気づいた時のために、ドローンの設定を学生たちの撮影ではなく、上空周回のみとした。

『続いて、強制転移を司る〈ソーサラーフィールド〉発生装置を停止させ、ゼス様発案の力場を発生させます。これには、ゼス様より賜った《崩石》を使わせて頂きます。こちらはゼス様の呪詛によるもので、《崩力》の結晶とでもお考えください』

ユミエールの部下の一人が、《崩石》を持ち、地下へと向かう。じつは地下にある動力室の中に、《崩石》を埋め込み、力場を発生できる装置が仕組まれているのだ。やがてグレゴールの前にある情報端末に、ルーン文字で再起動しますかと表示され、グレゴールは決定を押す。

すると窓の向こうにある夜空から星の光が一気に滅り、霧がかかったようになる。霧はすぐさま、黄昏色の障壁

を生み出した。

「うぬ、ここまではすべて計画通りであるな」

満足げに言い放つユミエール。そんなとき、不意に背後から声がした。

「遅いよユミエール。いったい何をしてたの？」

「なに、戯れに狩りをしていただけだ」

振り向いたユミエールの視線の先には、リーゼリットの姿があった。中央制御棟には、どうやらリーゼリットも潜んでいたらしい。両脇には、《アスモデウス》の姿があった。

「もーう、仕方ないなー。ユミエールは戦いを愉しむと自制が利かなくなるんだから」

「リーゼリット、ゼス様からの指示はわかっておろうな」

「うん。脅威の排除。空戦武踏祭の参加者の中に、教皇の隠し玉が潜んでいるから、強そうな相手は全部狩ってしまっていいって」

それが、リーゼリットに課された指示だ。

そのために、ゼスは現有する《アスモデウス》を全て貸与してくれている。空戦武踏祭のあらゆる関係者に扮して、事前に中央制御棟や地下施設に潜ませておいたのだ。空戦武踏祭の警備責任者がゼスである以上、発見されて問題になることはない。

潜んでいた《アスモデウス》たちは、黄昏色の障壁が張られた気配を感じ取ったらしい。リーゼリットの指揮下に入るべく、続々と制御室に集合しつつあった。

これから始まるのは、ゼスのシナリオによる、空戦武踏祭だ。と、暗い窓の向こうに映る密林を眺めるユミエールを訝しみ、リーゼリットが声をかけてきた。

「？　どうしたのユミエール？」

「なに。少しばかり骨がありそうな奴がいて、せっかくだから我がこの手で処分したいと思っただけだ」

「ダメだよユミエール。ヘタなことをしたら、失格になるじゃないの。ユミエールには空戦武踏祭を優勝して、人類に対しその圧倒的なチカラを誇示するっていう役割があるんだからね」

そして機会があれば、教皇を暗殺する。むろん、ゼスは障あらばと、教皇の拠点捜索も同時進行させている。その責任者は、エリスらしい。

「さてと。これから先はわたしが主役なんだから。ユミエールはフィールドの隅っこで大人しくしてね」

そう言って、リーゼリットは飛行機のように手を広げ、勢いよく廊下へ飛び出していく。遅れてユミエールが廊下に出ると、そこには紅い眼を滾らせた、百体以上の《アスモデウス》たちの姿があった。

「いくわよ、みんな。今日はこれから狩りの時間。頑張って、獲物を狩り尽くそうね」

そしてこの日の晩。多くの小隊が、正体不明の敵からの襲撃を受ける。通信結晶は繋がらず、第九人工空島の外への逃走も不可という悪条件が重なり、多くの小隊が《アスモデウス》たちに狩られるという事態に陥った……！

第二章　未知との遭遇戦

空戦武踏祭二日目。早朝。
教皇浮遊都市《ペベル》。ノエシス宮殿。議事室。
「馬鹿なっ！　ありえん……っ!?」
その報せを聞いた、マルコー・アーダルベルト評議員の第一声はそれだった。
早朝に非常事態を告げる緊急無線に叩き起こされ、議事室へ。そして全ての評議員が集った直後、右眼に片眼鏡をかけ、カールした細長い髭を持つ初老の紳士――ハルトマン・エンディケウス議長より、重大な事実を報されたのだ。
空戦武踏祭を実施中の第九人工空島と通信が途絶。同時に、正体不明の黄昏色の障壁が生まれ、内部に入るのが不可能になったこと。さらにその障壁は、魔甲獣によって生み出された可能性が濃厚であること。
評議員たちの脳裏に、最悪の予想が過ぎった。アーダルベルトが声を荒らげる。
「人工空島の警備は万全を期したはずではないかっ！　であるのに正体不明の黄昏色の障壁に阻まれ、中の様子がわからなくなったとはどういうことだ……っ！」
「エンディケウス議長、貴様いったいどうやって責任を取るつもりだ……っ！」
「これは空戦武踏祭を強行した、議長の責任ですよ」
他の評議員たちも、ハルトマンを糾弾する。
それもそうだろう。空戦武踏祭の実施は、教皇の御意思を貫くという考えのもとで、ハルトマンがゴリ押しした事案なのだ。
ハルトマンの背後には教皇の意思があるらしいが、そもそも、教皇を長い間目撃していない評議員たちの中には、教皇の生存自体を疑っている者もいる始末だ。
唯一教皇への謁見を赦されるハルトマンが、教皇の威光を借りて、自らの意思を政策に反映している、と考える者も少なくない。立場上、ハルトマンは不届き者なのだ。もっとも彼もそのことは自覚しており、すぐさま弁解を口にする。

「どうやら諸君は誤解しているようだ」

評議員たちの視線を受けながら、ハルトマンが言い放つ。

「まず第一に空戦武踏祭の実施を決定したのは、わたしでなく教皇陛下だ。それに警備の責任者は、わたしではない。ゼス・ヴィーゲルト会長だ。ヴィーゲルト会長自らが警備責任者になることを申し出て、先の議会で承認されたのは諸君らも記憶に新しいことと思う。ゆえにわたしは今日この場で、ヴィーゲルト会長の不信任議案を提案する」

「詭弁だ……っ！」

「ヴィーゲルト会長を陥れようというのか……っ！」

さて、どう動く？　評議員たちの糾弾をものともせず、ハルトマンはゼスの出方を窺う。

教皇派と会長派の対立。その事情を知るのは、この場ではハルトマンとゼスしかいない。教皇であるアンネローゼに、表だって対立する意思がない以上、こうやって政策の足を引っ張っていくしかないのだ。

ゼスが何かを仕掛けてくることを想定し、警備責任者を任せたのが僥倖だった。

「たしかに。エンディケウス議長のおっしゃる通り、責任を取るのが筋かもしれません」

今度はゼスが評議員たちの視線を受けながら、言い放つ。

「ですが、それでは警備責任者としての責務を充分に果たしたとは言えないでしょう。仮にこの状況で犠牲者が出たとして、その方の魂に報いるためにも、わたしは最後まで全力を尽くすつもりです」

それが絶対的に正しい、と主張するような口調だった。「わたしもそれが筋だと思う」と肯定するアーダルベルト評議員を筆頭に、周りの評議員たちにも、同意するものがちらほら見られる。

これだけの事態を引き起こした真犯人が、いったいどの口で言うのだ……っ！　議長席に拳を叩きつけたくなる衝動をぐっと堪え、ハルトマンが食い下がる。

「魂に報いる、とは具体的にどういう意味だ？」

「草の根を掻き分けてでも、襲撃犯を見つけ出し、裁判にかけます」

一点の曇りもない表情で、ゼスが述べた。

「失礼ながら、この場にいらっしゃる諸兄の誰もが把握しているはずです。襲撃犯を処分する上で、わたし以上の適任者がいないことを。対魔甲鳥戦において、わたしは空士として確かな実績を残しております。いまこの場で、

この問題に対処するうえで、わたしの経験や知識は必ず必要になることでしょう」

たしかに警備責任者で、ゼス以上の適役はいない。そう断ったうえでゼスは、ハルトマンの嫌がるところを的確に突いてくる。

「それにです。わたしは現在、何人かの諸兄とともに、教皇陛下を介さずとも意思決定ができる仕組みを構築しようとしています。この仕組みを完成させれば、これまで以上に効率的な評議会の運営が可能となります。この政策を推し進める為にも、諸兄らにいささかお時間を頂きたいのです。その上で、再度わたしの責任を問うて頂きたい」

評議員の誰もが、教皇の不在に、大なり小なり不満を抱いている。良識派の議員は貌を顰めたが、それでも、ゼスを咎めようとはしない。

むぅ……旗色が悪いのである。

「さて。話が逸れましたね。では、エンディケウス議長。本来の議題である、空戦武踏祭の緊急対策について話し合いましょうか」

清々しい表情のゼスを、ハルトマンが仏頂面で睨みつけた。

空戦武踏祭二日目。早朝。

第九人工空島。外縁部。密林地帯。E601小隊のキャンプ。

昨晩この人工空島中央部で発生した異常は、まだミソラたちを襲ってはいなかった。だが、彼女たちは明らかに異変に気づきつつあった。

「風が鳴いてますね」

「ぬぅ。それはどういう意味ですか？」

ユーリの言を受け、ブレアが怪訝そうに尋ねてきた。

ユーリは眼を細めて、薄暗くなった上空を見上げる。

もう陽が昇っていいはずだが、辺りはまだ薄暗闇に包まれていた。というのも、なぜか第九人工空島が、黄昏色の障壁に囲まれているのだ。

ブレアは、この障壁は初めてだが、ユーリたちには心当たりがある。ミソラとレクティに朝食の用意を任せながら、リコとブレアとユーリの三人で、この日の対応を練っていた。

「感じないか？　どうにも嫌な予感がする。偵察用ドローンの動きにも明らかに変化が生じているしな」

リコに言われ、ブレアがゆっくりとまぶたを閉じた。もともとブレアは直感型の空士だ。勘や危険への嗅覚といったものが優れている。

戦闘への高揚感を消し、意識を研ぎ澄ませれば、異常の一端は感じられる。

「むっ、たしかに……肌がざわつくな」

何が起こっているかは、定かではないだろう。

だが、武人としての本能が、この場が危険であることを感じ取ったはずだ。

それは競技としての危険ではない。命に関わる危険だ。

「今朝起きたら、通信結晶が使いものにならなくなっていました。ずっと砂嵐のようなノイズが聞こえ、満足に通信ができません。わたしだけでなくリコさんの通信結晶も同じ症状ですから、故障とは考えにくいでしょう」

試しにブレアが自分の通信結晶を装着すると、砂嵐のようなノイズが聞こえてきた。

「むう、確かにノイズが聞こえます」

「ええ。おそらくは意図的に通信が妨害されているんでしょう。人工空高全域に通信妨害をかけるとなると、どうも上空を舞っているドローンが怪しい気がしますね。それと、いま第九人工空高を覆う黄昏色の障壁は、おそらく《崩力》によるものだと考えています。以前似たような経験をしたことがあるんですが、クロエ先輩の砲撃でも、この障壁は破れません」

「な、なんと……っ!?」

ユーリが丁寧に説明すると、ブレアが眼を瞠った。クロエの砲撃に耐えうる防御力を持つと聞いたのだから、当然の反応だろう。

《崩力》の障壁を破るのは、現状の戦力では極めて困難だ。

さらにユーリは、昨晩に何回か照明弾が上がるのを目撃したことを伝えた。照明弾は本来ならば夜戦を想定したものだが、バトルロワイアルでの主な用途は、夜間の急病人の位置を報せるためのものだ。

運営委員会からの事前説明では、まず通信結晶で救助を要請した後、自らの位置を救助隊に正確に報せるために、

空へと打ち上げるように伝えられていた。

しかし、一晩で何人も急病人が出るものだろうか？

そんな中、まだ本調子ではないミソラが声をかけてくる。

「ねえ、みんな。レクティがご飯できたって」

「ふっ、まあいい。まずは朝食を摂るぞ」

「そうですね。昨晩のうちに色々仕込んでおきましたから」

「うぬ。食事は大事だ」

時の経過とともに、ミソラは確実に立ち直りつつある。もともとメンタリティが強く、多くの挫折を経験しているのが彼女だ。ジャムパンとホットミルクの朝食を、さもおいしそうに食べるミソラの姿を、仲間たちは注意深く見守っていた。

「？　どうしたのよ？」

「ミソラさんが、パンを食べると、とてもおいしそうに見えるんです」

「えっ、そうなんですか？」

気恥ずかしそうにだが、ミソラが小さく笑みを零した。ユーリの咄嗟のフォローに、ブレアはいたく感心したようだった。

空戦武踏祭が始まって以来、ミソラが笑顔を零すことなどなかった。

ミソラに早く元気になってほしいと、ブレアも声をかける。

「うぬ。私もユーリ先輩と同感だ。ミソラ、そなたが食べるパンはとてもおいしそうに見える。もしよければ、私のイチゴジャムパンも一口食べるがよいぞ」

「イチゴジャム……」

ブレアの言葉を聞いたとたん、急にミソラがしょぼんとし、はあーとため息をついた。

ブレアには知る由もなかったが、カナタとミソラが初めて出会った際に、イチゴジャムを塗ったパンがトラブルを引き起こしてくれたのだ。ゆえにミソラは、イチゴジャムという単語から、カナタとの出会いを連想してしまったのだろう。

そんな事情など知る由もない仲間たちは、素早く円陣を組み、小声で話し合う。

「ちょ、ちょっとブレアさんっ!?　ミソラさんを落ち込ませてどうするんですか……っっ!?」
「ぬ、ぬぅっ!?　わ、私が悪いのですか……っ!?」
「あ、あのぅ……よくわからないですけど、ブレアさんがイチゴジャムパンって言ったあと、すごく落ち込んだように見えましたよ」
「（ふっ、とりあえず一発芸で元気づけろ）」
「う、うぬ。心得た」
円陣を離れ、ブレアがミソラのもとへと向かう。
本来なら一発芸などといったお馬鹿の披露は、ミソラの役割であるはずだが。しかし、
「この際、やむを得んか」
意を決したブレアが、おもむろに魔双剣を展開する。そして食糧の入った袋をがさがさと漁り、ウィンナーを見つけると、魔双剣の切先にちょこんと刺した。
いったい何をするんだろう？　リコたちが怪訝そうに見守る中で、ブレアは魔双剣を高々と掲げて言い放つ。
「見るがよい。ミソラ」
アイゼナッハ流魔双剣戦技――飛炎衝天撃
ブレアの魔双剣が、ほんの少しだけ白銀色の輝きを発した。同時に、魔力の炎がさっと起こり、ウィンナーをこんがり焼きあげた。
きょとんとするミソラに、ブレアが堂々と言う。
「ウィンナーパンにして食べるがよいぞ」
しかし、その直後――
「あ、あのぅ……ブ、ブレアさん。アイゼナッハの戦技をなんだと思っているんですか……っ!?」
あまりの不謹慎さに、レクティがおもいっきり咎めた。見れば、レクティだけではなく、リコとユーリも、なんだかなーという眼差しを向けていた。
「だ、だがこれは……ミソラを元気づける為にだな……」

などと、ブレアが苦しい言い訳をしていたとき、
「うん。おいしいわね」
こんがりと焼き上がったウィンナーを、ミソラが指で摘み、口にしていた。
「「ミ、ミソラさん……っ!?」」
思いもよらぬ行動に、レクティとユーリが同時に声をあげた。
ブレアはそれみたことかとでも言うかのように胸を張り、リコはふっと鼻で笑う。
「まだ本調子ではないようだが、これはこれでいいだろう」
徐々にミソラが立ち直りつつある。そのことを、隊員たちの皆で共有することができた。
「それと、このままミソラが離脱けているうちに、わたしが小隊長の地位を……」
「こらこら。小隊長を真っ先にサポートするべき立場の人が、何を言ってるんですか？」
リコも軽口を叩く余裕が出ているようだ。まだ完全ではないが、E601小隊らしさが戻りつつある。
「それで、今日はどうしますか？」
「その件だが、周辺の様子がおかしいことが気になる」
ユーリの言を受け、リコが提案する。
「午前中は二手に分かれて、偵察するというのはどうだ？　わたしとユーリは河川沿いを遡上して中央部を偵察する。ミソラとレクティとブレアは、向こうにある密林の中だ」
「う、うん。じゃあそれで……」
「あ、あのぅ……ここで戦力を分散させるのは、危険じゃないでしょうか？」
「うぬ。レクティ、私も保証する。問題あるまい」
「で、ですけど……っ!?」
食い下がるレクティに、ユーリがちらっと目配せする。大丈夫ですよ、安心してください。
「では朝食後に、偵察に向かうことにする。それが終わったら、再びこの陣地に集合だ。わたしとユーリはお昼頃には帰還するつもりだ。キミたちもそれまでには、近場の偵察を終えてくれ」
リコの言を聞き、さすがリコさんですね、とユーリは内心で頷いた。

空戦武踏祭二日目。九時過ぎ。
第九人工空島。外縁部。密林地帯。E601小隊のキャンプ。
「リコさんも優しいですね」
「？　なんのことだ？」
周囲を警戒しながら、河川沿いに遡上していくとユーリが声をかけてきた。
「ミソラさんたちが捜索する密林は、視界が悪い分、入念に警戒トラップをしかけた場所ですよね。あの場には、他の小隊がいないのは心得ているはずでは？」
「さあな」
素っ気なくリコが言うと、ユーリが「ふふっ」と微笑んだ。
「なんだか素っ気ない気遣いが、カナタ先輩に似てきましたね。ひょっとして、影響を受けているんじゃないですか？」
「～～～っ!?　ユ、ユーリ、キミは少し浮かれているんじゃないか……っ!?」
「そんなに照れないでくださいよ。リコさん」
珍しいことに、リコがユーリに揶揄い捕られる。リコは初めての副隊長なので、自分でも気づかぬ気負いがあるかもしれない。その点ユーリは、特務小隊では副隊長であり、自分の経験と重ねて、見えるものや感じるものがあるのだろう。
「そういえば、中央部に敵がいたらどうしますか？」
「そうだな。雑魚ならその場で対処。強敵なら……ミソラを連れて来るべきだったと思う」
「？　どういう意味ですか？」
「第九人工空島は中央部の地下に、巨大な貯水槽があるからな。ミソラの収束魔砲を上手く直撃させれば、地下からの水蒸気爆発で敵を一網打尽にできる」
「さ、先程の優しさはいったいどこにっ!?　そんなことをしたら、ミソラさんが下手をすれば人工空島を墜とした罪に問われちゃいますよ……っ!?」

「それなら問題ない。ミソラは《ミストガン》で一度似たようなことをやっているから、壊し方は心得ているだろう」
「そういう問題ではないと思うんですが……」
そんなとき、苔の生えた湿った地面を歩く二人の足が、不意に止まった。リコとユーリはお互いに貌を見合わせる。
「どうやらまずい予感が当たったようだな」
「ええ。隠れましょう」
密林の茂みの中に、素早く身を隠し、魔接錬金製の武装を展開する。
〈ソーサラーフィールド〉や通信設備の状況を確認するために河川沿いに遡上していたが、もうその必要はないらしい。殺気を感じて姿を隠した二人の視線の先には、河川沿いを下って来る、純色の体皮をした、人型の怪物の姿があった。
「あれは……《アスモデウス》っ!?　な、なぜあれがここに……っ!?」
「まさかこんなところで出くわすとはな……」
通信結晶が使えれば、ミソラたちへ警戒を促せたが――生憎といまは通信不可能。しかも〈ソーサラーフィールド〉が黄昏色の障壁とすり変わっていることといい、この場はすでに殺戮領域といって差し支えないだろう。
《アスモデウス》と戦闘し、敗北すれば……只では済まない。
「こちらからは仕掛けるなよユーリ。あれは単体ではなく群れで行動する」
「心得ています。どうやら状況は、わたしたちの想定より厳しかったようですね」
おそらく昨晩のうちに、多数の代表小隊が《アスモデウス》から夜襲を受けたはずだ。通信結晶が使えない環境下で、慣れぬ地上戦。パニックに陥った代表小隊の面々が、充分に反撃できたとは思えない。
すでに少なくない犠牲者が出たな、とリコは思う。空戦武踏祭の運営委員会にとっても、想定外の事態に違いない。
《アスモデウス》と戦闘経験があり、裏の事情にも通じているリコたちならともかく、何も知らぬ余所の代表小隊が、これと互角に戦えるわけがないのだ。
案の定、河川沿いを下るように他の《アスモデウス》が姿を現し出した。同時に、それらに追撃され、河川を舐

めるように滑空飛行する、若干天然パーマがかかった、桃色髪の少女の姿があった。
「あれは……《ファルシオン》の……っ!?」
《アスモデウス》に待ち伏せされ、ノエルは滞空したまま対峙。このまま交戦か、密林の中へ逃げ込むか。判断に迷う仕草をみせた。ノエルを追撃する《アスモデウス》の数は、五体。殲滅に時間がかかれば、新たな《アスモデウス》が増援に来る可能性が高い。
「リコさん、いまは空戦武踏祭の最中ですが……」
「仕方がない。凡人を助けるのは、女神の務めだからな」
最早、以心伝心の二人にこれ以上の会話は不要だ。高速再生する《アスモデウス》に対し、効果的な〈トリシューラ〉を持ったユーリが突撃。それを援護するために、リコは密林に身を隠しまま伏射の姿勢を取る。スコープの中に鈍色の怪物の頭部を収めると、容赦なく引き金を絞った……！

リコたちが《アスモデウス》と交戦する少し前。
第九人工空島。外縁部。キャンプ近くの密林。
「ブレアさん、わたしのほうは異常なしです。あのぅ……そちらはどうですか？」
「うぬ。こちらも異常なしである」
ブレアと状況を確認しながら、レクティは絶えず視界にミソラの姿を収め続けていた。
分かれて偵察したほうが効率がいい、というミソラの提案を受け、ミソラたちはばらばらに偵察していた。レクティは万が一の事態を考え、みんなで纏まって偵察することを提案したのだが、ブレアがミソラの提案を後押ししたのだ。
あうあうっ!?　ほ、本当に大丈夫でしょうか……っ!?　不安げな眼差しで、レクティはミソラの動向を窺う。もし連悪く敵と遭遇戦なんてことになったら、いまのミソラさんは……。そんなとき、肩に手がかかる。
「落ち着くがよいレクティ」
ミソラとつかず離れずの距離を保ちながら、ブレアが話しかけてくる。

「この場所は、人工空島の外縁部だ。好戦的な連中なら、中央部に相手を求め、攻めに行くことであろう」
「ですけど、なんだかそのぅ……胸騒ぎがします。いつの間にか、黄昏色の障壁に包まれてますし。この状況は、あまりよくは……」
「うぬ。いまそれを確かめに、リコたちが偵察に向かっている。それと昨晩ミソラにつきっきりだったそなたは知らぬだろうが、この密林の向こう側には、リコとユーリ先輩が、即席の警報装置をしかけておる。ゆえに、相当深く偵察に行かぬ限り、遭遇戦は避けられる公算が大きい」
「そ、そうだったんですか……っ!?」
ブレアの説明を聞き、レクティはほっと安堵する。
リコから託された密林の偵察が、ミソラの心理状態を考慮したものであることはわかっていた。だが、この場所の安全が保証されていることを知らなかったのだ。
「異常がないことを確認し終えて、ミソラが戻って来るようであるな。では、このままキャンプに戻り、ミソラを休ませるぞ」
ブレアの言葉を聞いて、レクティは本当にそうするべきだと思った。ミソラはいま、自力で立ち直りつつある。自分と向き合う時間をもっとそれれば、調子を戻すことができる。ただ同時に、頭の中に妙にひっかかるものを感じた。
なんだかテストで名前を書き忘れたような、酷く重大な見落としがある気がするのだ。
「さてと、このあたりの捜索は大体終わったわね」
異常がないことを確認したミソラが、レクティたちのもとへ合流してきた。
待ち構えていたように、ブレアが口を開く。
「そうであるな。ではミソラ、しかるべき偵察は終わったので、あとはキャンプに……」
戻るぞ、とブレアが提案しようとしたとき、レクティの見落としの正体が明らかになる。あろうことかミソラは

「じゃあ、他の場所も偵察しましょう。お昼までまだ時間があるから」
ええーっ!?　ミ、ミソラさんの為にわざわざ戦闘を避けてるんですけど……っ!?　と困惑したレクティが目を丸くし、ブレアを見やる。

「むぅ。ミソラ、あまり張り切りすぎるのはよくないぞ。そなたはあまり調子が良くないのだ。適度に休むがよいであろう」

「ううん、大丈夫」

そう言って、ミソラは普段の元気一杯で凛とした笑みとは一線を画す、どこかチカラのない笑みを浮かべて言う。

「昨日活躍できなかった分、今日こそは頑張るから……」

その儚げな笑みこそ、ミソラがまだ本調子でない証だ。ミソラもミソラで、仲間たちに迷惑をかけまいと空元気を発揮しているようだが、周りが見えていないようだ。仲間たちが、敢えてミソラの負担を減らそうとしているのに、全く気づく素振りがない。

密林の奥へと進むミソラを見やるレクティに、傍らに立つブレアが話しかけてきた。

「レクティ、私は……いや、リコとユーリ先輩も含め、私たちは重大な勘違いをしていたかもしれぬ」

「そ、そのぅ……そうかもしれません」

二人は声には出さず、心の中でこう唱える。

「……(ミ、ミソラさんっ!?　あなたって、わたしたちが思っていたより、ずっとお馬鹿だったんですね……っ!?)」

みんなの気遣いがわからぬミソラに、二人は心底呆れ返った。

「どうしたのよみんな？　リコやユーリさんも頑張ってるんだから、先に行きましょうよ」

「そういう問題ではなくてだな……」

ミソラはお馬鹿だから事情を説明しなくてはわかるまい、とブレアが種明かしをしようとしたとき、からからという音が響いた。空き缶の中で、小石が転がったような音だ。

「向こうから音がしたわ。敵が来たみたい。みんな、通信結晶をつけて」

ミソラが耳元に通信結晶を装着しようとし、ようやく異常に気づく。

「あれ、壊れてるのこれ？」

砂嵐のような音が流れ、無線通話できないのだ。

「うぬ。妨害されているらしいとユーリ先輩が申しておった」

言いながら、ブレアがふと疑問を抱く。

「なあミソラ、そなたもしやと思うが、この人工空高を覆うのが〈ソーサラーフィールド〉でなくなっていることに気づいて……」

おるか？　とブレアが尋ねようとした時だった。突如として爆音が響き、地面を揺らす衝撃が、レクティたちの足元に伝わって来る。

「ブレアさん、なんだか様子が……」

「ああ。妙であるな。索敵や偵察といった隠密行動の最中なら、このような派手な音はたてぬ。これはむしろ戦闘中……」

言いかけ、ブレアがすぐさま状況を判断する。

「ミソラ、ここはこのまま退くぞ。敵の規模がわからん以上、この場に留まるのは危険である」

「なにを言ってるのよブレア？」

怪訝顔でミソラが言った。

「あたしたちは偵察に来てるんだから、相手を確かめるに決まってるじゃないの」

ま、まずいですっ!?　ミソラさんの言っていることは正論ですけど、完全に空回りしてます……っ!?　致命的に運がないミソラを見やり、レクティが焦りに焦る。

「そ、そのぅ……ミ、ミソラさんっ!?　ミソラさんの言うことは間違ってないんですが、ち、違うんです……っ!?」

「そ、そうであるっ!?　ミソラの言うことは正しいのだが……な、なんというか……その、違うのだ……っ!?」

「なにわけわかんないことを言ってるのよ？　ほら偵察に行くわよ」

なおもブレアが抗議するが、ミソラが一蹴する。

「ぐだぐだ言ってないで、行くわよブレア。まさかアイゼナッハの人間が、ビビったって言うんじゃないでしょうね？」

「アイゼナッハの人間が、戦場で臆することなどないわっ！　……って、そうではなくてだな……っ!?」

抗議の声を無視し、ミソラは騒音のした方角へ駆け出す。周りが見えておらず、聞く耳ももたないミソラを見やり、ブレアが提案してくる。

「ええいこの際だ。レクティ、ここでミソラを取り押さえるぞ」

「そのぅ……そうするしかないようですね」

呆れたレクティがブレアと一緒に追い駆け、チカラ業に出ようとしたとき――ミソラが、不意に茂みの陰へと身

を隠した。
「みんな、隠れて。この先に誰かいるわ」
ミソラの指示を聞き、レクティとブレアが渋々身を隠した。
茂みから身を出さないように注意しながら、レクティがそっと向こうの様子を探る。
すると、鈍色の硬皮をした、人型の怪物が姿を現した。
「えっ!?　あれって……」
「ど、どうして《アスモデウス》がここに……っ!?」
「どうやら私たちの与り知らぬところで、何かが起こっておったようであるな」
ミソラとレクティの瞳が驚愕に見開かれ、ブレアが険しい表情で見定めようとする。
ミソラたちの視界に入った《アスモデウス》は二体。まるで待ち伏せするかのように、ある一点を見据えている。
そのすぐあと、猟犬に追い立てられる野兎のように、巨大な魔戦斧を持った人物が姿を現した。
「見て、ミーナさんよ……っ！」
密林の中を走って逃げ回るミーナに追い縋るようにして、さらに二体《アスモデウス》が姿を現した。この状況が、異常事態であることは誰の眼にも明らかだ。
「く……っ!?」
待ち伏せしていた二体と対峙し、ミーナの足が止まる。
挟撃されたため、状況判断に悩んだようだ。
ど、どうしたら……っ!?　もとより気弱なレクティが判断に悩む。そんなとき、凛とした声が響いた。
「状況はよくわからないけど、加勢するわよっ！　レクティ、ブレア、前衛をお願い……っ！」
迷いのない必死な眼差しを、ミソラが向けてきた。
おそらくミソラは、命の関わる咄嗟の事態に、条件反射的に反応しているだろう。彼女の心には、まだ自責の念が燻ぶっており、本調子からは程遠い。それでも――これがミソラだ、という凛とした指示に、レクティは何物にも優るチカラを得た気がした。まるで、死んだと思っていた無二の戦友が応援に駆けつけてくれたような、そんな安心感だ。
「わ、わかりました……っ!?」

本当なら交戦は厳禁だが、状況が状況だ。
それにもしかしたら、誰かのために戦うことで、ミソラさんが普段の気持ちを取り戻してくれるかもしれません。
レクティがブレアを見やる。ブレアは、チカラ強く頷いてみせた。
「ブレア・アイゼナッハ、推して参る……っ！」
「レクティ・アイゼナッハ、同じく」
前衛の二人が、魔双剣を展開しながら、勢いよく前に出る。
奇しくも、ミソラたちが戦闘を開始した時刻は、リコたちが戦闘を開始した時刻と同時刻であった。

第九人工空島。河川沿い。
くっ!?　今日もとんだ厄日ね……っ!?
鈍色の怪物から待ち伏せを受け、ノエルが不快気に相手を睨みつけた。
昨日の夕暮れに《ベベル》代表小隊に敗れて以来、状況は悪化していく一方だ。なぜなら昨日の深夜頃から、第九人工空島に、鈍色の怪物が徘徊し始めた。この敵がどこから来たのかは不明だが、その再生力は侮れない。しかも現状は、通信結晶が使えず、〈ソーサラーフィールド〉が消え去り、突破不能の黄昏色の障壁に囲まれている。《ファルシオン》の戦闘教義によれば、この状況での第一選択は撤退。第二選択が、防御しながら救援を待つだ。
しかし撤退は不可能であり、外部との通信が不可能な以上、救援も望めない。
なら……戦うしかない。ぎゅっと魔剣の柄を握り締め、ノエルはサーベルを振るう。正面に立ち塞がった鈍色の怪物たちと間合いを詰め、まずその硬皮に覆われた豪腕を、魔力斬撃で分断した。ばっ！　切断された片腕が弾け飛んでいく。だが、鈍色の怪物は何事もなかったかのように、残った腕を、刀腕へと変化させ、こちらへ斬りかかってきた。
「ち……っ！」
ノエルは飛行魔術を発動。素早く攻撃を躱すと同時に、小柄な身なりをいかした動きで敵の背後へ回り込む。鈍色の怪物が振り向いた直後、一閃。太い首を切断。尖った頭部が、鮮血とともに地に落ちた。

これでどうよ……っ！　とノエルが撃破を確信する。

だが、鈍色の怪物は倒れない。すぐさま筋繊維が首と腕の切断面から伸びてきて、失った体の部位を構築し出す。筋繊維の次は、鈍色の硬皮が表面を覆い始めた。しかもあろうことか、無事な刀腕で、鈍色の怪物が斬りかかってきた。

「しつこい……っ！」

倒れない未知の敵の斬撃を躱すノエル。だが、回避した先には待ち伏せていたもう一体の鈍色の怪物の姿があった。すでに刀腕を振りかざし、ノエルへ叩きつけようとしている。

しまった……っ!?　とノエルが障壁を張ろうとしたとき、一発の魔力弾が、ノエルを襲おうとする鈍色の怪物の頭部へ突き刺さった。

え……っ!?　ノエルが驚いたように、射撃が来た方向を見やる。すると密林の向こうから、断続的な発砲とともに、〈トリシューラ〉を構えたユーリが姿を現した。

「ユーリ・フロストル……っ!?」

「動かないでください……っ！」

魔力超振動機構を起動したユーリが容赦なく、鈍色の怪物を切り刻む。疾風突き、棒打ち、烈槍返し、乱突き――磨き上げた魔槍術を閃光の如き速さで叩き込まれ、二体いた鈍色の怪物は倒れ去る。

「ノエルさん、お怪我は……？」

「問題ないわ。でも、状況がよく……」

倒れ去って怪物の一部が、人間のそれへと戻るのが見て取れた。

「この敵は《アスモデウス》といって、人間を元に作られ、体内に黒晶というチカラの源があります。それを破壊するか、再生不可能なほどのダメージを叩き込めば倒せます」

ユーリはこの敵を知っている……っ!?　突然の事態に、ノエルはいまだに状況を掴みかねている。しかし、

「どうやら、ノエルさんを追撃していた三体が攻めてくるようですね。ここで処理します。手を貸してください」

ノエルは首を縦に振り、魔剣を握りしめ、《アスモデウス》を迎え撃つ。〈トリシューラ〉を持つユーリと、どこからともなく飛来する正確な援護射撃のお陰で、追撃してきた三体は瞬く間に殲滅できた。

戦闘終了後、茂みの陰から、ピーナス像のような美貌の少女が姿を現す。以前、連絡艇で見かけたことがある、

E601小隊の隊員だ。

「状況が状況です。この場はわたしたちと共闘するのはどうでしょう？」

「……あなたたちとは敵同士よ」

それを聞いて、一瞬ユーリが戸惑った表情を浮かべる。だが、ノエルの言葉には続きがあった。

「と言いたいところだけど、助けられたからには借りは返すわ。そこの魔統士にも、感謝を」

魔剣を霧散させ、ノエルはピーナス像のような美貌の少女に声をかける。

「ユーリとは昔短期留学してたときに知り合ったけど、あなたとは初対面ね。学園都市《ファルシオン》所属、ノエル・ル・サンスーシ・デア・ランシール・ド・ワーフよ」

「ノエル・ル・サンスーシ・デア・ランシール・ド・ワーフ、か」

自らのフルネームを素早く諳んじるのを聞き、頭いいわね、とノエルは思う。あの紅チビと違って、この子は頼りになりそうだわ、と思った刹那――ピーナス像の現し身のような少女が、さっと髪をかき上げ、自己紹介を返してきた。

「ふっ、わたしの名前はリコ・フラメル。女神の生まれ変わりだ」

め、女神……っ!?　呆気に取られるノエルに、リコが颯爽と言い放つ。

「女神なわたしに憧れるなよ」

「憧れないわよ……っ!?」

「り、リコさんっ!?　状況を弁えてください、ノエルさんがどん引きしてるじゃないですか……っ!?」

慌てて窘めるユーリの言葉も耳に入らず、ノエルは心底思う。……この子、頭大丈夫かしら？　その後、ユーリからリコの非礼を丁重に詫びられながら、ノエルはE601小隊のキャンプに向かうことになった。

第九人工空島。外縁部。キャンプ近くの密林。

「はあああ……っ！」

巨大な魔戦斧を振りかざすミーナの視線の先には、四体の鈍色の怪物たちの姿があった。ミーナの斧撃で、片手を切断された鈍色の怪物が後退する。当然、止めを刺そうとミーナが一気に距離を詰める。

しかし次の瞬間、想定外のことが起きた。なんと負傷した鈍色の怪物を庇おうと、他の個体が前に出てきたのだ。な、仲間を庇う……っ!?　思いもよらぬ挙動を前に、ミーナが戸惑う。見た目に反し、敵の知性が随分と高い。

そんな中、ミーナの背後から鈍色の怪物が二体とびかかってくる。ミーナはすぐさま魔戦斧を振りぬき、一体の胴体を両断。あまった勢いでもう一体も分断しようとする。だが、魔戦斧はもう一体の右腕に半ば食い込んだ時点で止まり、敵は痛みを堪えて、そのまま左の刀腕で、斬りかかってきたのだ。

し、死を恐れない……っ!?

鈍色の怪物の戦法に、戦慄するミーナ。それはあくまで敵を怪物としてしか捉えられず、その知性を侮ってきたつけであった。

く……っ!?　ミーナは咄嗟に魔術障壁を展開。板金鎧を模しながらも機動性を維持した防護服が堅牢な魔術障壁を生み出し、刀撃を防ぐ。この障壁は簡単に抜けたりはしない。

だが、ミーナの足が止まったその瞬間、彼女を狙っていた残りの鈍色の怪物たちも襲い掛かってくる。

いくら堅牢な魔術障壁とはいえ、袋叩きにされては忽ち破壊される。ミーナが手詰まりになった瞬間のことだった。白銀色の砲撃が、障壁を挟んで向こう側にいる鈍色の怪物を吹き飛ばしたのは――

「レクティ、ブレアっ！　ミーナさんの周囲にいる《アスモデウス》を……っ！」

よく通る凛とした声が響くと同時に、見慣れた人影が戦場に介入する。

「ブ、ブレアさん、戦技で勝負に出ましょう……っ！」

「うぬ。敵は硬い。戦技のぶつけ方に、気をつけるがよい……っ！」

レクティとブレアは姿勢を低くして、地を這う獣のようなフォームで接近し、

アイゼナッハ流魔双剣戦技――飛炎衝天撃

アイゼナッハ流魔双剣戦技――飛炎衝天撃

灼熱を纏う神速の突きを叩き込む。破壊力に優れたブレアが一体撃破。レクティが一体の胴体を貫通。胴体に大穴が空いても生き残った敵に、素早く接近したミソラが至近距離から砲撃を叩き込んだ。跡形もなく吹き飛ばされ、《アスモデウス》と呼ばれた個体が倒されていく。

その手際の良さに、ミーナは舌を巻いた。加勢する暇もない、流麗な連携攻撃だった。

状況の不利を悟ったのだろう、残る一体の《アスモデウス》が撤退していく。

不味いっ!?　こちらの情報を持ち帰られてしまう……っ!?　ミーナが慌てて追撃しようとした矢先に、ミソラが動いた。

「ミソラさん……っ！」

「任せてくださいミーナさん……っ！」

一発の弾丸のように、まっすぐとした個体飛行で、ミソラは《アスモデウス》へ迫る。接近に気づいた《アスモデウス》が振り向きざまに、刀腕を振るう。

あの勢いじゃ躱せない……っ!?　加速の付きすぎたミソラの身を案じるミーナ。だが、

変則的加速――幻想加速

《アスモデウス》が斬り裂いたのは、ミソラの幻影。本物のミソラは、緩急をつけた素早い曲がりで《アスモデウス》の後背へ回り込んでいた。

「これでどうよ……っ!?」

《アスモデウス》の背中に、ミソラは魔砲剣を突き刺すと同時に発砲。零距離砲撃を浴びた《アスモデウス》は一瞬膨張したと思った直後に弾け、爆散。下半身が消滅し、上半身が茂みの向こうまで吹き飛んだ。

その対応の速さに、ミーナが驚嘆する。

こ、これが本当にFランクと呼ばれたE601小隊なの……っ!?　《ミストガン》での学内選抜戦で負けたときは、充分な対策を練られていた。しかし、今回はどうだ？　充分な対策を練ることができない、この突発的な状況下でもE601小隊は素早く適応してみせた。熟練の小隊顔負けの、素早い状況判断力だ。

やるじゃないの、カナタ・エイジ。

いまこの場にはいない男の名が、ミーナの脳裏を過ぎる。

単にランキング戦で勝つための訓練をしていたのでは、こうは動けない。おそらく彼は常に実戦を想定し、自分たちで考えるチカラを養わせてきたはずだ。

「大丈夫ですかミーナさん？」
「え、ええ。助かったわ、ミソラさん」
《アスモデウス》を処理したミソラのもとへ歩み寄り、ミーナが礼を述べる。だが、次の瞬間。ミーナの視界には、茂みを割って姿を現した、新手の《アスモデウス》の姿があった。おそらくは先ほどの連中の仲間だろう。
「後ろだミソラ……っ!?」
気づいたブレアが叫び、ミソラが振り向くも間に合いそうにない。《アスモデウス》の刀腕が、無防備なミソラへ届こうとする刹那、ミーナが動く。
ミソラと《アスモデウス》の間に強引に体を割り込ませ、防護服の籠手で刀腕を受け止める。むろん魔術障壁も展開しようとしたが、間に合わず、展開途中に刀腕で破壊されてしまっていた。
「く……っ!?」
左手から奔る痛みを堪え、ミーナが魔戦斧を振るう。
「でも、甘い……っ!?」
そう言って、ミーナが斧撃を放つ。右腕と腰を使って放ったその斧撃は、《アスモデウス》を硬皮ごと叩き潰した。腰椎を粉砕された《アスモデウス》はその場で膝を折り、第二の斧撃で黒晶ごと頭部を粉砕される。
「ミ、ミーナさん……っ!?」
「大丈夫よ、弾いたわ」
自分の身を案じるミソラに、ミーナは落ち着いた笑みを浮かべた。
籠手は粉砕されたが、戦闘に支障はない。その証拠とでも言うかのように、ミーナはまだ痺れが残る左手を平然と動かし、無事をアピールする。すると、
「あ、あたし、また同じことを……」
「どうしたのミソラさん？」
救援に現れたときの勢いが嘘のように意気消沈し、ミソラがつぶやいた。ミーナの問いには応じず、強迫観念に捉われたかのように、青ざめた貌をしている。そんなミソラの反応も気になったが、まずは状況把握が優先だ、とミーナは素早く頭を切り替える。
「あなたたちは三人しか見当たらないようだけど、ユーリさんとリコさんは？」

「あのぅ……二人はいま中央部の偵察に向かっています」
「まずいわね。だとしたら、あの二人もこの鈍色の怪物に……」
レクティの言を受け、ミーナが表情を厳しくする。明朝から逃げ回っていたから、敵の配置はよくわかる。この鈍色の怪物は、第九人工空島の中央部を根城にしている。
そんなとき、ブレアがあらぬ発言をする。
「それに関しては、問題なかろう。リコもユーリ先輩も、引き際を弁えた手練れだ。相手が《アスモデウス》となれば、《崩力》の使い手との戦闘も考えられる。すぐにキャンプに引き返してくるはずだ」
「ブ、ブレアさん……っ!?」
レクティは貌を引き攣らせるが、ミーナはすでに気づいていた。
「あなたたちは交戦中の時も、この鈍色の怪物を《アスモデウス》と呼んでいたわね？　それに《崩力》の使い手ってなんのことかしら……？」
問い詰められ、レクティとブレアが言葉に詰まる。
《アスモデウス》はまだいい。正体は不明だが、変異種であることに違いはない。
しかし、《崩力》の使い手という単語を聞き逃すほど、ミーナは迂闊ではない。
この子たちは――E601小隊は一体何と戦っている……？
自分の知らぬところで蠢く闇の気配を感じ、ミーナの眼が険しくなる。
「ミソラさん、あなたたちの知っている情報を教えてもらえないかしら？」
言葉に詰まるミソラに、ミーナが伝える。
「もちろん、わたしに伝えられる情報でかまわないわ。情報を知ることで、身に迫る危険は、自分で振り払う」
覚悟を決めたミーナが問うと、ミソラは小さく首を縦に振った。
……こうしてミーナは、ミソラたちのキャンプへと向かうことになったのだが、ひとつ大きな見落としがあった。
それはミソラが倒したと思った《アスモデウス》が、まだ息があったことである。
上半身だけになったその《アスモデウス》は、まだ固体の呪核――黒晶が健在だった。撃破確認を怠るほどに、ミソラは本調子ではなかったのだ。
難を逃れた《アスモデウス》の上半身からは、無数の筋繊維が伸び始める。去っていくミソラたちに気づかれず、

その個体は僅かずつ下半身を再構築していた。

＊＊＊

空戦武踏祭二日目。十一時頃。
第九人工空島。密林地帯。《コウライ》キャンプ。
「どうなさいますか？」
「この場は静観を決め込む」
長い黒髪に、口元を固く結んだ少年――チャオ・シンクーが言い放った。ボタンのない麻製の衣類を纏う彼の視線の先には、密林の中を彷徨う《アスモデウス》の姿があった。
チャオは樹木の陰に身を隠しながら、部下たちに告げる。
「我らの目的はただひとつ、この本戦に出場し、《ベベル》代表を撃破することにある。それが教皇陛下の助けに繋がるのだ」
《ベベル》代表にゼスの息がかかっているように、《コウライ》代表には教皇の息がかかっている。
「おそらくこの状況で我らが《アスモデウス》を突けば、《ベベル》代表に我らが教皇陛下の手の者だと悟られよう。そうなれば、わざわざ身分を隠して空戦武踏祭に参加したメリットが活かせなくなる。我らはあくまで《コウライ》代表として、来るべき時まで、牙を持つ集団であることを隠し続けなければならないのだ」
部下に説明しながら、チャオは思う。
昨日の深夜から明朝にかけて、多くの代表小隊が《アスモデウス》から襲撃を受けたはずである。しかも空戦武踏祭初日から飛ばした学生たちは、夜襲など想定していなかったに違いない。
疲れ切って集中力を欠いたところを襲われれば、当然少なくない犠牲者が出るはず。だが密林の中には、ひとつも遺体が見つからなかった。
敵が連れ去っているのか？　だが、何のために……？　いや、考えても仕方あるまい。
チャオは部下たちに厳命する。
「現段階では敵との接触は避け、状況の推移を見守る。下手に《アスモデウス》を倒そうと思うな。あれは集団が

前提ゆえに、突くと集まる。ただし、こちらの気配に気づいた個体だけは必ず始末するぞ」

空戦武踏祭二日目。正午頃。
第九人工空島。中央部。中央制御棟周辺。
『うん、順調だよっ！　ぜんぜん問題なし……っ！』
大型通信機を草地の上に置き、リーゼリットはユミエールへ作戦経過を報告していた。妨害電波が発生している以上、周波数帯の関係で、この通信機が必要だ。
ゼスは緊急会議で連絡がつかないため、代わりにユミエールへと報告している。
『心得た。順調であれば問題なかろう。我らが大義を妨げる輩は粉砕せよ』
そう言い残し、ユミエールからの通信が途切れた。
《アスモデウス》の夜襲に対し、代表小隊はほとんど対応できなかった。通信結晶が使えぬ環境下で、集団パニックに陥り、殲滅させられたケースがほとんどだ。中には《アスモデウス》の介入を、空戦武踏祭の競技の一環だと勘違いしている代表小隊すらあった。
素早く抵抗できたのは、一日目で他の代表小隊に仲間を倒され、他所の代表小隊からの襲撃を警戒していた小隊だ。だが、寡兵では集団で襲ってくる《アスモデウス》に対抗できず、捻り潰されていた。
結果から言えば散々たる損害で、順調に任務が進んでいたリーゼリットだが、計算違いもあった。
「でもさ、向こうに行った子たちが帰ってこないんだよね」
きょとんと小首を傾げて、リーゼリットがつぶやく。
「あれ？　つまり向こう側にいる人達は、この状況に対応できてるってこと？」
本来なら三体構成のチームに、索敵のためにさらに二体を加えて五体構成にしたチーム二個が、行方不明だ。単独であれに抵抗できる空士がいるとは思えないから、組織だった抵抗であろう。
だが、ただの代表小隊レベルでは、この状況には対応できない。
心当たりがあるとすれば、《アスモデウス》を殲滅したミソラがいる小隊だ。
ちょうどその折、一体の《アスモデウス》が密林を割って、姿を現した。

リーゼリットは、すぐにその個体が行方不明になっていたチームのものだと判断する。
全ての《アスモデウス》に精神操作を施した彼女は、微々たる個体差を認識できるのだ。
「あっ！　戻ってきた……っ！」
無事に帰ってきた《アスモデウス》が、リーゼリットの前に傅き、首を垂れる。
「うんうんっ、よく帰ってきました……っ！」
忠実なペットに、リーゼリットは優しくその頭を撫でた。その後、《アスモデウス》は唸り声のような言葉で報告し始める。
「ふふっ。そっかそっか。やるじゃないの、ミソラ」
《アスモデウス》の言葉と思念を明確に感じとり、リーゼリットがつぶやいた。報告では、紅い髪の少女とあったが、ミソラだとすぐに察しがついた。魔双剣を使う二人の少女の姿も、一緒にいたという話だから間違いない。
魔戦斧の使い手の正体は不明だが、どうでもいい。
ミソラには、絶対に後悔させてやるんだから……っ！　リーゼリットの思考は、過去に《アスモデウス》を殲滅させられた怨みを晴らすことでいっぱいだった。
「場所は大体わかったわ。あなたは先行偵察に行ってくれる？　仲間を集めて、わたしもあとから追いかけるから」
リーゼリットの言葉に反応し、報告してきた《アスモデウス》が密林の中へと向かっていく。それと入れ違いに、中央制御棟から出てきた《アスモデウス》が何やら報告する。
「うん。わかったわ。なら、わたしはこれから中で新しいペットたちを増やすわ。……あなたはここに残って、わたしに報告しに戻ってくる《アスモデウス》たちに伝えておいて。これからわたしの知り合いへ挨拶に行くから、いまの任務は一旦中止。みんなこの場所で待機しておくようにって」
満面の笑みを浮かべたリーゼリットは、ミソラたちがいるであろう方角を見やり、
「待っててねミソラ。あなたは特別に、わたしが直接挨拶に行ってあげるからね」
それだけ言い残し、中央制御棟へ向かった。

宝戦武踏祭二日目。正午頃。
第九人工空島。外縁部。E601小隊のキャンプ。
「着きました、ここです」
先導していたユーリが告げると、ノエルが周囲を見渡す。
「場所のセンスは悪くないわね。攻め込まれづらくて、逃げやすい地形だわ」
ノエルからの評価に、その通りだ、とユーリも思う。
もともと防御力を重視した位置取りだ。
黄昏色の障壁にぎりぎりに位置しているため、通常より警戒範囲が狭くていい。しかも密林の向こうには河川が一本走っているため、いざというときは撤退の経路に使える。河川には遮蔽物がなく、密林と違って飛行魔術で加速しやすい。
「ふっ、女神なわたしが場所を選定したんだ。悪いわけがないだろう」
勝ち誇るリコを一瞥し、ノエルはやや不機嫌そうな表情でキャンプへと向かう。リコがムカつくというよりも、リコという存在を測り兼ねるといった表情だ。
ノエルさん、わたしも同じ経験をしましたから、お気持ちはよくわかりますよ、とユーリが同情した。
「どうやらミソラは、無事だったようだな」
「そうみたいですね」
テント前ではブレアが包丁を持ったり、ミソラが皮を剝いたり、レクティが鍋を火にかけたりしている。穏やかに炊事をこなすミソラたちを見やり、リコたちがほっと安堵する。外縁部にはまだ、《アスモデウス》の手は伸びていないらしい。
近づくユーリたちの姿に気づき、ミソラたちが貌をあげる。
そんなときテントの中から、ありえない人物が姿を現した。
「ミ、ミーナさんっ!?　なぜあなたがここに……っ!?」
驚いて声を上げるユーリ。彼女の視界に入ったのは、防護服とインナーを脱ぎ、半裸に近い状態でテントから出てきたミーナだ。首の後ろから回り込むようにかけられたタオルが乳房を隠しつつ、下半身は下着だけ身につけて

いる。

おそらくは近くの河川で、沐浴したのだろう。普段は騎士甲冑型の防護服に押しつぶされている巨乳が、ユーリの眼前で暴力的なまでに主張していた。同性から見ても、羨ましいと思うロケットおっぱいだ。

「あら、なぜってミソラさんたちに《アスモデウス》に襲われたところを、助けられたからだけど……」

「た、助けられたっ!?　《アスモデウス》に襲われたところを……っ!?」

衝撃の事実を聞き、ユーリが仰天した。

精神的に不安定だったミソラが、《アスモデウス》戦を切り抜けたという情報は朗報だが、万が一という可能性も考えられる。とにかく無事でよかった……と、彼女は安堵する。

一方でリコとノエルの視線は、ミーナの暴力的なまでの巨乳に注がれていた。

「？　どうしたの？」

「……」

リコは無言でミーナの巨乳を見やり、指先で突く。むにゅっと指が沈み込む感触があり、本物と断定。「く……っ!?」とリコは悔しそうな声を漏らす。低身長がコンプレックスのノエルは、女性らしい凹凸やくびれには縁がなく、最初から勝負にならない。

「乳デカ女」

身体的なコンプレックスの関係で、ノエルが吠えた。

その折、傍らで見守っていたミソラたちが声をかけてくる。

「あのユーリさん。なんでノエルさんがここにいるんですか？」
「そのぅ……もしかしてノエルさんも訳ありなんですか？」
「リコ、もしやそちらでも《アスモデウス》戦を……」
E601小隊の面々が、情報を共有しあう。その際ユーリは、ミソラのことを注視していたが、普段の調子を取り戻しつつあるように見えた。突如の死線で、頭のスイッチが切り替わっているのかもしれない。
その間に、ミーナは手早く着替えを済ませ、インナー姿になっていた。ちょうど着替えを終えたとき、ノエルがこちらを睨みつけているのに気づく。
「あら、どうかしたの《ファルシオン》のノエルさん？」
「《ミストガン》の火事場泥棒よね、あなた」
不機嫌そうな半眼で睨みつけながら、ノエルが言う。
「人の戦場に介入してきたうえに、《ベベル》代表小隊の食い散らかしと一緒だなんて。幸先が不安だわ」
不愉快極まる言葉だ、とミーナは思う。だからこそ――
「あら、ノエルさんは変わった言葉を使うのね？　容姿といい、言葉遣いといい、まるでチビ虎が吠えてるみたい。これからはチビ虎さんと呼んであげましょうか？」
内心では腹に据えかねながらも、ミーナはすこぶる上品な笑みを取り繕い、
「わたしたちが介入した頃には、《ファルシオン》代表はほぼ壊滅していたけど、『人の戦場』ってどういう意味かしら？　もしかしてわたしたちに、強制転移させられた敗者たちの存在に気づけというの？　残念だわ、わたしはウィザードであってエスパーではないの」
「～～～っ！　ぎ、漁夫の利狙いの、火事場泥棒が偉そうなことを言うなっ！　わたしの仲間がいれば、あなたたち《ミストガン》の補欠チームなんて三分で全滅よ……っ！」
「あら、補欠チームはA177小隊じゃなくて、E601小隊だけど。それにあなたの愉快な仲間たちはもう負けてしまって、いまは《ベベル》にいるんでしょう」
「乳デカ女のくせに減らず口を。大事な仲間がいないのは、あなたも同じでしょ」
じりじりじりっ！　ノエルとミーナの間で、眼には見えない火花が散る。
「あ、あのぅ……」

お、落ち着いてください……っ!?　と慌ててレクティが止めに入ろうとした矢先、二人の争いは終息を迎えることになる。それを齎したのは、しんみりとして蹲々たるミソラの言葉だ。
「……大事な仲間がいない」
急にどんよりとしたオーラが、E601小隊のキャンプを包み込んだ。ミーナもノエルも、蹲々たるオーラを感じ取り、急速に怒りのボルテージが下がっていく。
なぜミソラが落ち込んだかわからず、ミーナとノエルは怪訝そうな貌をした。すると、ブレアが容赦なく責め立てる。
「こらっ！　ミーナ先輩もノエル先輩も、ミソラになんてことをなさるんですか……っ!?」
「……乳デカ女だけじゃなくて、わたしも悪いの？」
「その……わたしたちが悪かったのよね？」
ミーナに尋ねられ、ブレアが「うぬ」と頷いてみせた。『大事な仲間がいない』という言葉が、ミソラにカナタの喪失を連想させたことなど、部外者の二人には知る由がない。
「ミソラに悪いことをしたら、一発芸をするのがE601小隊の規則です。さあ、お二人とも、自らが持つ最高の一発芸を……（むごごごっ）」
「すみません。いまのはナシでお願いします」
とりあえずユーリは、ミソラ不在のせいで、空回りしまくっているブレアの口を塞ぐ。それからどうすべきかと考えたとき、リコが口を開いた。
「さて、ミソラ。どうする？」
ミソラの立ち直り具合を窺るのが目的だろう、とユーリは思う。ミソラには小隊長として、この場を纏めあげ、導く役割が求められるのだが、
「えっ、えーっと……」
言葉に詰まり、返事に窮する。
まだ難しいでしょうか、とユーリが助け舟を出そうとしたとき、不意にきゅるきゅる～とお腹が鳴った。恥ずかしそうにお腹を押さえるレクティを見やり、ミソラが提案する。
「その……じゃあまずはお昼にしましょう」

なんだか、このE601小隊は、わたしの知っている小隊じゃないみたいね。
プラスチック製のシチュー皿を手に、ミーナは草地に腰を下ろすミソラを見守る。
ミーナとノエルがなにやら問題発言してから、彼女は心ここにあらずといった様子で、淡々とシチューを食べている。隣に座るレクティが横目で窺うが、気づく様子はない。ミーナの近くでシチューを食べるノエルも、ミソラを気にしているのか、ちらちらと視線を送っていた。
「ねえユーリさん、ミソラさんはどうしたの？」
「その……少しよくないことがあって」
ミソラがへこむ事情が気になるミーナ。そんなとき、ノエルが吠える。
「個人の事情なんていまはいいわ。そんなことより、早く現状について説明しなさいよ」
「確かにノエルの言う通りだな」
ノエルの言を受け、リコが口を開いた。
「ミーナ、ノエル。わたしたちが知っている情報の一部を教えてやる。その代わり、ここで聞いたことはこの場限りだ。そのあとは忘れると約束しろ」
女神が口癖の少女だが、この雰囲気は冗談を言うものではない。
本当に重大な話をされることを悟り、ミーナが言い放つ。
「わたしは騎士の家系なの。パープルトンの騎士の名と高貴なる者の義務の精神に懸けて、この場限りと誓うわ」
「あのぅ……高貴なる者の義務ってどういう意味ですか？」
「わたしもまだ詳しく説明することはできないだけど、チカラを持つ者が果たすべき責任と義務のようなものよ」
「ミーナ先輩でも説明できぬとは、難しい言葉なのであるな」
ブレアの言を受け、ミーナは小さく頷いた。
リコが問う。
「ノエルはどうだ？」
「わたしは代々都市間交易で財を成した商家の出身だから、情報の扱いは心得てるわ。もちろんサンスーシ家の名

誉に懸ける」
二人の発言を聞いた後、リコは無言でレクティとブレアを見た。
「そのぅ……お二人を信じて問題ないと思います」
「うぬ。この者らにとって家の名を出すとは、命を懸けると言っているに等しい」
魔双剣術の名門の出である二人には、ミーナたちの覚悟がわかるらしい。
わたしもそう思います、と同意するかのようにユーリが声をかける。
「リコさん」
「いいだろう。わたしも女神の名に懸けて、キミたちに真実を伝えてやろう」
仲間たちから促され、リコはいくつかの事情を伝えてくれた。
いまこの第九人工空島を襲撃している《アスモデウス》という変異種の特性。その背後には、呪力を宿した人間がいる可能性が大きいこと。呪力を宿した人間は、《崩力》の使い手であり、戦闘は熾烈を極め、正攻法ではまず勝てないこと。
カナタの戦い振りを見ていたE601小隊の一員として、リコは《崩力》の使い手を敵に回す危険性について、事細かに説明してみせた。《崩力》を駆使した戦技は、一撃一撃が必殺の破壊力を持つこと。莫大なチカラゆえに、完全に使いこなせば、付け入る隙がほとんどないこと。率直に言って、状況が絶望的であること。
「――ということだ。今回の敵にこれまでの常識は通じない」
「まさかっ!? 人間が呪力を宿すだけでなく、《崩力》なんてチカラが存在して、しかもそれを使いこなすだなんて……っ!?」
リコからの説明を聞き、ミーナが声をあげる。傍らではノエルが「俄かには信じがたいわね」とつぶやいていた。
「だが、事実だ。そしてわたしたちは、この状況を打破する必要がある。本気で敵を倒すなら、こちらも《崩力》の使い手が必要だろうな」
ノエルが不機嫌そうな半眼で尋ねる。
「どうしてそんなに《崩力》の使い手に詳しいの？ 交戦して生き残れたのなら、戦闘に関するノウハウが蓄積してるはずよね？」
《崩力》の使い手を知った詳しい経緯は……言えない。だが、《崩力》を扱う敵との交戦経験は二度ある。一度目

はろくに戦闘訓練も受けていない、満足にチカラを使いこなせない敵が相手で、チカラに取り込まれ、《アスモデウス》のような人外の姿に変貌していた。このときは、ユーリが魔槍で倒したが、この敵はせいぜい《アスモデウス》に毛が生えた程度の脅威でしかなかったから、気にしなくていい。問題は二度目だ。二度目は魔甲蟲を従えた、わたしより年下の子供が相手だった。そのときは……手痛い損害を被った」

大事なことをぼかすリコを、ノエルはじっと睨みつけている。詳しい経緯とやらを教えてもらえないことが、気に入らないのだろう。

一方でミーナは、リコたちが情報を知りえる可能性について検討していた。

《ミストガン》において、E601小隊は幾つか激戦を潜り抜けているとの噂があった。ミーナが知りうる限りで怪しいと思うのは、B227小隊との模擬戦直後に、正体不明の敵と交戦したものだ。この戦闘の詳細は機密扱いとされているが、大勢の《ミストガン》の住民が、闘技場を包む黄昏色の障壁を目撃していた。おそらくその障壁と、第九人工空島を包み込むものは同じものだろう。規模は、こちらが桁違いに大きいが。

それと、E601小隊が《崩力》を知っているということは、教官であるカナタ・エイジも知っている可能性が大きい。いや、むしろ知っていて当然と考えるべきだ。

頭の中に、むずむずとした思考を抱えながら、ミーナは思う。

《崩力》の使い手との交戦経験は、実質一度きり。これはリコたちが、《崩力》の使い手との戦闘経験が拙いことを意味する。

そこまでは納得がいく説明だ。しかし、続きには引っかかりを覚えた。それはリコが『本気で敵を倒すなら、こちらも《崩力》の使い手が必要だろうな』と言っていたことだ。

本来であれば、こちらも相手に匹敵する、同等の戦力を用意して倒すと提案するはずだ。しかし、リコの発言はまるで、これまでは《崩力》の使い手が味方にいたかのような調子だった。

見送りに来なかったカナタ・エイジ。《崩力》の使い手との戦いで、E601小隊が犠牲を被ったこと。現在も後悔に苛まれるミソラ。そして先程のリコの発言――一連の情報がミーナの脳裏に揃ったとき、彼女の脳裏を電流のようなものが奔り抜けた。

ま、まさかっ!? そ、そういうことなの……っ!?

しかし、それなら理屈が通る。

E601小隊が《崩力》の使い手を知った詳しい経緯を隠す事情が、カナタ・エイジがランキング戦に出場せず、自らの小隊の活動を忌避した事情が、すべて通る……！

「よしなさいノエルさん。いくら睨みつけても、リコさんは答えないわ」

「なに言ってるのよっ!? リコたちからは敵に対する事情を。だったら……」

言いかけ、ノエルが口を噤む。ミーナの表情と纏う雰囲気から、強烈な覚悟を感じ取ったのだろう。

とある事実に気づいたミーナは、怒っていた。それは、誰かに対する怒りではない。己の愚行を、不甲斐なさを、これまでに重大な過ちを犯してしまった自分に対する怒りだ。

「E601小隊が情報を知りえた詳しい経緯を聞いたところで、この状況は変わらないわ。そんなことより、これから打つべき手を考えましょう」

身から湧き上がる衝動を押し殺し、ミーナは話を進めようとする。怒りを堪えるミーナを見て、ノエルはいま自分がすべきをことを思い出したのだろう。ぐっと黙って、今後の対応を定めようとする。

「外からの救援が望めない以上、内部から問題を解決するしかない。《崩力》の使い手との交戦を避けながら、まずは《アスモデウス》を殲滅。その後、わたしたちが連携して《崩力》の使い手を倒すしかないだろう」

「前提としてはリコさんの言う通りですが、この場にいるメンバーだけでは正直心細いですね。敵戦力が不明な以上、こちらはできる限り戦力を集めておきたいです。できれば、他の空戦武踏祭の参加者たちと連携したいところですね」

「たしかにユーリさんの言う通りね。それなら、《ベベル》の代表小隊はどうかしら？ わたしとノエルさんは《ベベル》の代表小隊と交戦したけど、評判通り強かったわ。もう二度と戦いたくないほど。あそこなら《アスモデウス》の奇襲も撥ね退けていると思うけど」

「乳デカ女の言う通りかもしれないわ。あの連中は気に入らないけど、強さは文句なしよ。この状況を打開するには、役立ちそうね」

「そのぅ……《ベベル》の代表小隊はどうも信用できない気がします。第九人工空島に敵の侵入を赦しているのが、怪しいといいますか」

「うぬ。私も同感である。ミーナ先輩とノエル先輩に教えるわけにはいかぬが、今回は《ベベル》に関係する組織は全て危険と考えておいたほうがよかろう。下手をすれば、後ろから撃たれるやもしれん」

「ふっ、レクティとブレアの言う通りだな。誰が敵で誰が味方かわからない以上、怪しいものに関わるべきではないだろう。あの連中が《ベベル》の関係なら、人が大勢死ぬこの状況でもなんらかのメリットがあるかもしれない」

「ミーナさん、ノエルさん。申し訳ないですが……」

ユーリの言を受け、ミーナが呆れたように言う。

「わざわざ危険を招くことで、《ベベル》代表小隊が得をする可能性を考慮するなんて……あなたたちが関わっている節は相当深いのね」

言いながら、ミーナは逃走中の光景を思い出す。

「でもほかに頼りになる小隊は……。わたしはずっと逃げ回っていたからわかるんだけど、《アスモデウス》を前にほとんどの小隊が潰されたはずよ。相当腕に覚えのある小隊なら生き残っているはずだけど、《ベベル》代表小隊のほかには、《コウライ》代表小隊ぐらいしか。でも、一度も遭遇しなかったし……」

そもそも《アスモデウス》に支配されたフィールドの中で、顔見知りと合流できたこと自体、強運に恵まれているのだ。

これ以上の戦力増強は難しいと思いながら、ミーナはミソラを見やる。ずっと無言のミソラだが、小隊長として決断を下さなければならない。

仲間を連れてこのまま死地へ向かうのか。それとも、他所から救援を求めるのか。

そんなとき、決断の声がする。

「かまわないわ。ここにいる六人でやりましょう」

はっきりと言い放ったのは、ミソラではなく、ノエルだった。

「この人数なら、最小単位の小隊が二つ構成できるわ。三人一組の二個小隊なら、ゲリラ戦で《アスモデウス》と交戦するには充分よ。そのまま敵を攪乱すれば、いまは優勢の敵だって足並みが乱れるわ。そうすれば《崩力》の使い手にも、隙が生まれるかもしれない。同時進行で、妨害電波発生しているであろう上空のドローンたちの数を減らせば、敵も奇立ちを覚えるはずよ。二個小隊の内訳は、A小隊が乳デカ女とわたしとユーリ。B小隊は、自称女神とレクティとブレア。攻撃力に特化したA小隊を、B小隊がサポートするのが基本戦術で行きましょう」

臨時連合部隊としての方針が決まりかけたとき、ミソラが口を開いた。

「あの……あ、あたしが抜けてます……っ!?」

怪訝な眼差しを浴びせてくるノエルに怯みながらも、ミソラが必死にアピールする。

「あたしは魔力量と体力には自信がありますから、まだぜんぜん戦えますよ……っ!?」

「今回は、紅チビ抜きよ」

だが、厳しい現実を、ノエルはミソラへ突きつける。

「これは競技じゃなくて、実戦なの。誰か一人のミスが、チーム全体を危険に陥れる。精神的に不安定な人間を外すのは、この作戦の成功率を上げるための当然の選択よ。紅チビ抜きでも、二個小隊作れるから、戦術の幅が広がるわ」

ノエルの言葉を受けたミソラは、反論できずに黙り込んでしまう。

ミソラの扱いに関しては、リコたちも思うところがあるのだろう。ミソラに戦闘させないという方針には、異論はないようだ。精神的に不安定な隊員を外すのは、確かに合理的だろう、とミーナは思う。だがそれ以上に、その選択の正しさを疑っていた。

ミーナの胸の奥から、魂が叫ぶのだ。E601小隊の隊長なら、あのカナタ・エイジから不屈の闘志を受け継いだ人間なら、たとえ何が起ころうとも、乗り越えてみせる。そして土壇場でこそ、並々ならぬチカラを発揮する、と。だからこそ、ミーナは提案する。

「ねえ、ミソラさんも連れていくのはどうかしら？」

「はあ、あなたなにを言って――」

「火力は少しでも多いほうがいいでしょ。面倒は、わたしが責任を持ってみるわ。もしなにかあれば、わたしとミソラさんを切り捨ててもらってもかまわない」

リコたちが意外そうにこちらを見てきた。だが、ミーナに発言を撤回するつもりはない。

「ねえ、ミソラさん。どうかしら？」

声をかけると、ミソラがはっと我に返り、チカラ強く声を発する。

「い、行きますっ！　あたしも、みんなと一緒に戦わせてください……っ！」

ミソラは不安定だが、まだ闘志は消え失せていない。テンションの上がり下がりはこれからもあるだろうが、わたしが上手く導いてみせる、とミーナは自分自身に誓った。

そんなとき、不機嫌そうな半眼で、ノエルがこちらを睨みつけているのに気づく。

「ひとつだけ教えなさい。どうしてこの子に固執するの？」

ミーナの言動を測り兼ねているのだろう。ノエルさんにわからないのは当然ね、と思う。ミーナ自身、自分の発言に驚きを覚えてすらいる。それでも、

「簡単ね。わたしとミソラさんが、《ミストガン》の空士だからよ」

「同郷のよしみ？　そんな理屈で、わざわざ――」

「《ファルシオン》の空士であるあなたにはわからないわよね。でも、いまのＥ６０１小隊は、ミソラさん抜きでは機能しないわ。わたしには、それがわかるの」

カナタが託した不屈の闘志の種は、間違いなくミソラたちへ受け継がれている。そうでなければ、ミソラはあの土壇場で、自分を助けることはできなかった。

だからこそ、ミーナは思う。ミソラさんの中にある不屈の闘志の種を、きちんと芽吹かせることが、わたしの役割だ。

カナタ・エイジという教官が不在の中で、彼とＥ６０１小隊にできる恩返し。それが上手くいけば、この状況を打破できる確率が急上昇する。その確信がミーナにはあった。

そんなミーナを見て、何を思ったか、ノエルはぷいっと視線をそらし、

「まあいいわ。夕暮れを待ってゲリラ戦を仕掛ける。寡兵を活かすなら、陽が落ちてきたからのほうが効率もいい。夜は眠る暇なんてないと思うから、いまのうちに体を休めておきなさい。それとわたしたちは、昨日の夜からずっと逃げ回って疲れているから、先に休ませてもらうわ。警戒をお願い」

それだけ言い残すと、ノエルはテントの中へと向かっていった。

ふーん、言い方はきつくてとっつきづらそうだけど、ノエルさんって意外といい人ね。

「ノエルさんの言う通りね。申し訳ないけど、わたしも休ませてもらうわ」

思ったよりものわかりのいい仲間を見直しながら、ミーナもテントの中へと入る。気が緩んだのか、ぐっと疲れが襲いかかってきて、すぐに眠りへ誘われる。

……ミーナたちがちょうどテントの中で休んでいる間、リーゼリットが放った《アスモデウス》が、密林の中を進んでいた。やがてミーナを追跡していた際、仲間が引っ掛かった、警報装置の罠を発見。その場所をゆっくりと迂回した《アスモデウス》は、気配を殺して捜索活動を行う。ミソラたちの警戒をすり抜け、その個体はＥ６０１

小隊のキャンプを視界に収めた。

＊＊＊

空戦武踏祭二日目。午後三時過ぎ頃。

教皇浮遊都市《ベベル》。ノエシス宮殿。評議会会長の執務室。

打開策が何も見つからないまま、今朝から続いた緊急対策会議は、休憩時間を迎えていた。その間執務室に戻ったゼスは、机の脇に設置した大型通信機で外部と通信していた。

『――以上が、空戦武踏祭の経過報告になります』

ユミエールからの連絡を受けて、ゼスは満足そうに言う。

『なるほど。万事滞りないようだね。リーゼリットと連絡がついたら、緊急会議で連絡がつかなくてすまなかったと伝えておいてくれ』

『はっ、畏まりましたゼス様。ところで、教皇陛下の拠点探しのほうは？』

『まだエリスの報告待ちさ。あの子もそろそろ正念場かな。できれば教皇陛下の首を獲って、わたしのもとに届けてくれればいいんだがね』

穏やかにゼスが言い放った直後、ドアの向こうから、がたんっ！　と物音が聞こえてきた。どうやら鼠がいたらしい。「こちらからまたかけ直すよ」と言ったあと、ゼスが立ち上がろうとする。だがそれよりも先に、とんとんとドアがノックされる。

「入りたまえ」

「ゼス様。アーダルベルト評議員をお連れしました」

入室してきたのは、淡く輝く蒼玉のような長髪に、白いジャケットと膝丈までであるブーツを履いた少女――キルスティ・バーミリオンだ。彼女の右手には小さなバスケットが握られ、左脇には、怯えた表情をしたアーダルベルト評議員が抱え込まれていた。

見た目に反し、キルスティには成人男性を容易く拘束する腕力がある。抱え込まれたアーダルベルトが何か唸るが、キルスティが左手で口を塞いでいるため、言葉にはならない。

「誰にも見られていないだろうね」
「もちろんですゼス様」
恭しくキルスティが返事をする。
ゼスが目配せすると、キルスティが拘束を緩くした。アーダルベルトの後ろ手を摑み、話せる状態にしてやる。
ゼスが穏やかに語りかける。
「これはこれは、アーダルベルト評議員ではありませんか？　本日はどういったご用件で？」
「ヴィーゲルト会長、さきほどの話は真実か？」
絶望的な状況で、アーダルベルトは気圧されず、ゼスを糾弾する。
「はて、さきほどの話とはいったいどれを指すのでしょうか？」
「惚けるなっ！　畏れ多くも、貴様が教皇陛下の首を獲ると口にしていた件だ……っ！」
「困りましたねアーダルベルト評議員、それは勘違いですよ」
「勘違いなものか……っ！」
薄ら笑いを浮かべるゼスの前で、アーダルベルトは悔しさで歯を噛みしめた。
「いまにして思えば、貴様の言動には不自然な点が多かった。今朝からの緊急会議でも、まるで妨害が起こることを見越していたような言動があったからな。……それで、緊急対策会議で口にしていた、教皇陛下なしでも意思決定する仕組みというのはなんだ？　他の評議員にも話を聞いたが、誰もそのような話は知らないと言っていたぞ」
「さあ。それは、これからわかることですよ」
怒りに眼を血走らせるアーダルベルトに、ゼスが澄まし貌で言い放つ。
「アーダルベルト評議員。もし我々に協力してくれるというなら、あなたの地位について考えて差し上げましょう」
「断る。わたしが忠誠を尽くすのは、教皇陛下のみだ」
「では、仕方ありませんね。あなたの死は、エンディケウス議長への不信を増長する為に利用させてもらいましょう。わたしへの肯定的な立場にあった評議員の失踪と不審死。これは政局において、重要な切り札になりますから」
「愚か者め、このわたしが……」
そう言いかけた直後、アーダルベルトの首がぼきりと音を立て、百八十度曲がった。後ろ手を拘束していたはずのキルスティによる、眼にもとまらぬ早業だった。

事切れたアーダルベルトを捨て、キルスティがゼスの前で膝をつく。
「申し訳ありませんゼス様。ですが、ゼス様を侮辱するなど、この世界の人間如きに赦される行為ではありません」
「貌をあげるといい、キルスティ」
見上げたキルスティに、ゼスは相変わらず穏やかに語りかける。
「もともと処分する予定だったんだ。無駄な時間をかけずに済んで助かったよ」
「寛大なるご処置に感謝申し上げます」
ぼおっと貌を紅くするキルスティを見て、ゼスはふっと微笑みを零した。
「それでキルスティ、キミは一体何の用があってわたしのもとへ来たのかな」
「はい、ゼス様」
キルスティが立ち上がり、右手に持ったバスケットの中から、愛情を精一杯込めて作ったスコーンを取り出すと、蟻を踏み潰すかのようにアーダルベルトを殺した人物とは思えないほど、はにかんだ笑みを浮かべ手渡す。
「ゼス様、そろそろ休憩なさるお時間かと思い、おやつを持って参りました」

第三章　敗北と後悔

夢を見た。それは、当時のミーナにとって、最悪の記憶だ。

半年以上前。学園浮遊都市《ミストガン》。

闘技場。Ａ１２８小隊対Ａ１７７小隊。

そのとき、ミーナはその相手と戦えることを心待ちにしていた。いや、心待ちどころではない。その戦いこそが、名誉であるとすら感じていたのだ。

なぜならその戦いの相手は、Ｓランク昇格がかかったＡ１２８小隊で、その小隊にはあの鮮烈な男――カナタ・エイジが所属しているからだ。

《黒の剣聖》と呼ばれる彼の存在感は計り知れない。いまから二週間前、哨戒任務中に強力な魔甲蟲の群れと遭遇し、一時は未帰還扱いされたカナタが生還したときは、《ミストガン》中が沸き、その生還を祝いに祝った。

その当時のカナタは、誰もがその安否を憂うほど、《ミストガン》にとって大きな存在となっていたのだ。最早、《ミストガン》の象徴といっても過言ではないだろう。

カナタの体調の回復を待つために、ランキング戦が二週間延期されたり、延期したランキング戦を告知するために『英雄再び!!』というポスターが街中に貼り出されたりもした。

そんなカナタと戦えることを、ミーナは名誉だと考えていた。

騎士の家系であるミーナにとって、名誉は何よりも重い。

高貴なる者の義務。幼少の頃から、事あるごとに曾祖父が口にした騎士の教えだ。

その言葉の詳しい意味を、ミーナは現在でも摑みかねている。

何度か曾祖父に詳しい説明を求めたが、家名にも優る大事な精神であるという長々しい説明のあと、これは言葉で表現できるものではないと教えられた。ならば説明するな、と文句を言いたかったが、その精神性はなんとなくわかった。

自分の職責や地位に応じた義務が存在する、という考え方だろう。

数か月前まで、ミーナはカナタこそ、その精神の体現者だと考えていた。
彼は市民に愛され、戦場においては、劣勢でも粘り強く戦い、仲間たちに勇気を与え、勝利を齎し続けてきた。
その生き様は、まさしく騎士。現代に生きる騎士――空戦魔導士に他ならない。
ゆえにミーナにとって、カナタは憧れたりえたのだ。
そんな彼が、《ミストガン》最高の名誉を、Sランク昇格を求めて、挑んでくる。
立ち塞がるのは、自分と信頼する最高の仲間たち。
これほどまで胸が躍る状況は、生涯一度も経験したことがなかった。
だからこそ、カナタと刃を交えることを心待ちしていたというのに――
カナタは試合直前の、復帰を広めるためのマイクパフォーマンスで、
「事前連絡し忘れたんだけど、じつは俺……かったるいんで、今日は戦わずに帰ります」
などとありえないことを口にし、最後は《ミストガン》中の人々から扱き下ろされることになった。当時の空戦魔導士科長から咎められても、彼は恍けてみせた。
夢に出てくる当時の自分は、自分の理想足りうる男が、屑だったと慨る。高貴なる者の義務の体現者だと信じていた存在に、裏切られたのだから当然だ。
彼は、名誉から最も遠い存在となった。例の一件以来、カナタは《ミストガン》中で省られることになった。ミーナ自身その一端を担いながら、カナタに対する扱いは当然の報いだと考えていた。
だが、それは間違いだった。それも、取り返しのつかない大きな間違いだった。彼の事情を察したいまなら、それがわかる。
なぜ《ミストガン》中の人々を敵に回す真似をしたのか？　――おそらく、彼はそうせざるを得なかったのだ。
今にして思えば、あの当時の《ミストガン》は、水面下で綻びかけていた。多くの空士たちがＡ１２８小隊さえいれば大丈夫と思い込み、傲慢感が蔓延していた。
しかし、カナタに侮辱されたことがきっかけで、再び空士たちは精進し始めた。
あそこでカナタが一石投じなければ、《ミストガン》は墜ちていたかもしれない。
カナタは自分という存在を犠牲にすることで、彼の生き様を貫き通し、《ミストガン》の空士たちを育んでみせたのだ。

やはりカナタ・エイジが、彼の生き様こそが、高貴だとミーナは思う。
高貴なる者の義務。この言葉の意味を、曾祖父は言葉で伝えることができなかった。
しかし、それをカナタは体現してみせた。あのとき名誉を捨てたにもかかわらず、彼は間違いなく高貴なる者だった、とミーナは思う。高貴なる者の義務。この言葉の詳しい意味を、ミーナは十七歳になった現在でも摑みかねている。

＊＊＊

空戦武踏祭二日目。午後四時過ぎ。
第九人工空島。Ｅ６０１小隊キャンプ。
ミーナが目を覚ますと、隣にはすやすやと鼻で息をするノエルの姿があった。
眠っているときは、意外と愛嬌ある貌をしてるじゃないの。
ノエルの寝顔を愛でたあと、ミーナは寝袋から抜け出し、テントの外へ出る。そこでは、これから行うゲリラ戦に備えて、ミソラたちが武器の整備をしていた。
「待たせたわねミソラさん。調子はどう？」
「ちょ、調子ですかっ!?　その……も、問題なしです……っ!?」
ミーナが声をかけると、ミソラが上擦った声で驚いた。
魔砲剣の分解掃除をしていたミソラの手元から、留めピンが零れ落ちる。魔砲剣の引き金を取り付けるための大事なピンだ。
失くしたら動作に支障を来してしまうパーツを摘み、ミソラへと手渡しながら、
「あまりよくないみたいね」
「うぅ……」
面目ないというかのように、ミソラが貌を伏せた。
リコから敵についての情報を得たとき、ミーナはミソラの事情についても察しがついていた。だからこそ、彼女は敢えてミソラに話を振る。

「ねえ。カナタ・エイジになにがあったの？」
なにか、ではなく、なにが。その些細な違いを感じ取り、ミソラの手が止まった。
「ど、どうしてそう思うんですか……っ!?」
「バトルロワイアルが開始するときに見送りに来てなかったでしょ。カナタ・エイジの性格なら、あり得ないわ。リコさんの説明でも、触れていなかったし」
「……」
「それにリコさんの説明では、《崩刀》の使い手と交戦したとき『手痛い損害を被った』って言ってたけど、それってカナタ・エイジのことよね？」
ミーナが問いかけた矢先、傍にいる仲間たちがちらりと横目でミソラを見やる。だが、ミソラはますます不安そうに俯くだけだ。
どうやらわたしの読みは当たっているらしい、とミーナは思う。
「あなたたち全員が《崩刀》の使い手の詳しい情報を知ったのは、身近に《崩刀》の使い手がいたから、と思ったのよ。もしかしてそれも、カナタ・エイジのことだったんじゃないの？　そしてカナタ・エイジになにか起こった結果、ミソラさんが心を病んでいるんじゃないの？」
「……」
ミソラは答えようとしない。代わりに、周りで話を聞いていたレクティとブレアが言う。
「そ、そのぅ……そ、それは……」
「ぬぅ。ミーナ先輩。詳しい事情については……」
話せぬ、と言いたいのだろう。だけどねブレアさん。この問題は先送りするべきことじゃないと思うの、とミーナが口を開こうとしたとき、
「じつは前夜祭の晩に、カナタ先輩が、ミソラさんを庇って負傷したんです。素人のわたしたちから見ても重傷で、専門家の方に治療をお願いしました」
「ユーリ……っ!?」
ミソラの前で、事情を口にしたユーリを、リコが咎めるように見る。無神経だと言いたいのだろう。
だが、お蔭でミーナは納得がいった。今朝の《アスモデウス》戦で、自分がミソラを庇ったとき、ミソラが強迫

観念に捉われたかのように、青ざめた貌をした理由に。
そんな折り、ユーリが皆に語りかける。
「わたしはずっと考えていたんですけど、ミソラさんは自分が癒した結果に向き合うチカラは、きちんとあると思います」
「ユーリさんは、どうしてそう思うの？」
「以前、ミソラさんとリコさんが味方撃ちの件で喧嘩したことがあるんです。そのときはリコさんにスカウトの話が来て、E601小隊は分裂寸前だったそうです。ですが最後はミソラさんが必死にリコさんを説得したと、レクティさんとブレアさんから聞きました。ですから、向き合えるはずなんです」
一方で、ミーナはなるほどと頷いた。小隊分裂の危機――仲間を失いかける事態の中でもミソラは立ち直り、乗り越えることができたらしい。
しかし、今回は時間がかかり、いまだ立ち直りきれない。
その理由は何か、とミーナは考える。
自分が庇われたことが原因？　それとも、カナタ・エイジが瀕死の重傷を負ったこと？　――いや、《ベベル》での模擬戦を通じて、不屈の闘志の種を受け継いだミソラさんなら、それでもすぐに立ち直り、カナタ・エイジなら大丈夫だと信じられるはずだ。
では、なぜそうならないのか？
思い悩むように俯くミソラを見やり、もしかしたら、とミーナは思う。
ミソラが思い悩むその姿は、ついこの間まで自分が経験していたものに酷似している。
だからこそ、おもむろにミーナが尋ねる。
「ひょっとしてミソラさん、あなた……カナタ・エイジに心惹かれているの？」
「なっ!?　い、いきなり何の話ですかミーナさん……っ!?」
一瞬で、ミソラの貌は、耳の先まで真っ赤に染まりあがった。
ミーナの言を聞き、レクティが怪訝そうに仲間へ尋ねる。
「そのぅ……ミソラさんって、カナタさんのことがお好きなんですか？」

「ふっ、気づいていなかったのかレクティ？」
「ミソラは主にほの字であるぞ。もっとも、ミソラより私のほうが主のことを予っと想っているからな。主は私のものだ」
「ちょ、ちょっと待ってくださいっ!?　その理屈が通るなら、わたしは三年以上もカナタ先輩のことを想っていたんですよ……っ!?」
ブレアの言に反応し、恋慕の想いを募らせていたユーリが口を滑らせる。
「ですから、カ、カナタ先輩は、わ、わわわ、わたしの……」
「そのぅ……よく聞こえなかったんですが、わたしのなんなんですか……？」
純粋無垢なレクティの瞳を向けられ、ユーリの声がどんどん小さくなる。
「わ、わたしの……その、わ、わたしの……」
そんな会話が繰り広げられる一方で、貌を真っ赤にしてミソラが慌てて抗議した。
「こ、こらっ!?　あ、あんたたち何好き勝手に言っているのよっ!?　……ミ、ミーナさんも、状況が状況なんですから、じ、自粛してくださいっ!?　あたしはあいつのことなんか、べ、別になんとも思ったりしてません……っ!?」
その言動を見て、ミーナは直感する。
ああ、この反応は間違いない。ミソラ・ホイットテールは自分が最も大事にしたい人を傷つけてしまったことを心底後悔し、自責の念に駆られているのだ。
ミソラの不調の原因に、恋煩いが含まれていたとは、リコたちにも想定外だった。
自分に何ができるかわからないが、恩人にせめてもの感謝を。そんな想いから、ミーナが口を開く。
「わたしもね、カナタ・エイジに心惹かれていたの」
あっさりと口にしかけるも、当時の光景が頭を過り、ミーナは恥ずかしくなりながらも、
「し、じつは前夜祭のときに、告白したりもしたわ……っ!?」
やや引き攣った表情で、言い放った。
「「「～～～～っ!?」」」
ミソラだけでなく、リコたちも驚愕した表情を浮かべる。
わたしが告白したのが、そんなにおかしいかしら、とミーナは内心でショックを受けながら、恥ずかしそうに「返

事は……内緒よ」とだけ伝える。
カナタを想う気持ちは、自分も負けていないことが、ミソラに伝わったのだろう。興味深げにこちらを見やるミソラに気づき、ミーナは隣に座ると薄暗い上空を見た。
「あのね。《ベベル》への道中で、わたしは、なぜカナタ・エイジがああも反感を買う真似をしたか考えていたの」
その当時の状況を、ミーナは振り返る。
「事情を知らない多くの人々は、口々に彼を批判したわ。わたしもその中の一人だった。ランキング戦の開始直前のマイクパフォーマンスで、復帰宣言するはずのところを、《ミストガン》中の空主を馬鹿にし始めたのよ。簡単に要約すると、俺は戦うのが怖いから戦わないけど、お前らは本気で鍛錬して死ぬ気で戦えよ雑魚ども、みたいなことを言っていたわ。闘技場はもうブーイングの嵐だったわよ」
カナタ・エイジの裏切りについて、E601小隊の隊員の中で直接目撃したのは、ユーリだけだ。その当時の詳しい状況を、ミソラたちは知らない。
しかし、ミーナの説明を受けて、見損なう表情をしたものは誰もいなかった。それこそが、カナタへの信頼の証だろう。いい子たちね、と思いながら、ミーナが告げる。
「でも、いまなら、なぜカナタ・エイジがそうしたかわかる気がする。きっと彼は、みんなのために思って行動していたのよね」
そして……《ミストガン》の裏切り者になった。その後、《ミストガン》中で軽蔑され、批判され、糾弾されたカナタにどんな苦労があったのか、ミーナは知らない。
だが、彼は決して人々の悪口を言ったり、憎んだりすることはなかったと断言できる。なぜならば――
「全てを投げ打ってでも、人々を護ろうとするのがカナタ・エイジよ。彼は学園浮遊都市という養成機関の中で、誰よりも空士のなんたるかを理解した存在だった。だからこそ、彼は何が起こっても、誰も憎んだりはしないわ。たとえ、仲間を既って負傷しても、それは自分のミスだと思っているはずよ」
「ミーナさん……」
貌をあげたミソラが、救われたかのようにミーナを見やる。その調子よミソラさん。あなたに悲しみは似合わないわ。胸中でつぶやきながら、ミーナは優しく微笑んだ。
ちょうどそのとき、テントのジッパーが引っ張られる音がする。

「ふふっ、寝ぼすけが起きたみたいね」
「誰が寝ぼすけよ」
不機嫌そうな半眼で、ノエルがつぶやいた。
もしかしたら寝起きのせいで本当に不機嫌だったかもしれないが、それはミーナの知るところではない。なぜなら彼女が尋ねるより先に、近くの茂みから、がさがさと音がしたからだ。
「あれは……」
ミーナの視線の先には、こちらに気づかれると同時に飛行術式を発動し、間髪飛行で逃げようとする《アスモデウス》の姿があった。
「追撃します……っ！」
「待って」
ミーナがミソラの肩を押さえる。
「あの個体が逃げてから、森がやけにざわついていると思わない？」
ミソラに指摘したあと、ミーナは険しい表情で、深い緑の向こうを睨め回す。
……いる、と思った。眼には見えないが、胸のざわめきを覚え、やたらと喉が渇く。
急に静まり返った中で、ユーリが言う。
「いますね。かなりの数です」
「こちらが仕掛けるより先に、居場所が特定されたようね」
目線は密林を見据えたまま、ミーナが言った。
「あのぅ……どうしますか？」
「ぬぅ。予定が崩れたのだ。このまま撤退するべきではなかろうか？」
「たしかに撤退すべきかもしれないな」
レクティ、ブレア、リコはこのまま後退したいらしい。それを聞き、E601小隊は士気が低いわね、とミーナは思う。この状況での撤退は、愚策だ。こちらが弱気を見せたとたん、《アスモデウス》たちは勢いづき、獰猛に襲い掛かってくるだろう。
ただ逃げるだけではダメだ。敵の追撃を断つ意味でも、せめて一撃浴びせて怯ませておかないと。

そのためには、E601小隊の調子を上げておく必要がある。
ミーナがちらりとミソラを見やる。彼女は前を向いて、射殺すかのように森の向こうを睨みつけていた。
どうやら交戦する意思があるらしい。
しかし、まだ周りを気遣う余裕が生じてはいなかった。そのことが、ミーナは口惜しくてならない。
当初の計画通りミーナたちから《アスモデウス》に攻撃できれば、普段のミソラに戻れただろう。だが、充分な準備をした上で、こちらのペースで攻撃をしかけるのと、先に相手に発見され、今回のように不意打ちを受けるのでは、戦闘に対する心構えが違いすぎる。
「敵はじきに、群れで攻めてくるはずよ。みんな武器を展開して」
自らも魔戦斧を展開し、ミーナはそれを握りしめる。
このキャンプ付近で、ミーナとミソラたちで数体の《アスモデウス》を撃破している。当然敵は、ここに有力な反攻勢力がいると考え、充分に物量を注ぎ込んだことだろう
いまの士気で、敵の猛攻を撥ね返せればいいが……
「敵の出方と配置を確かめて、痛打を浴びせてから撤退しましょう。このあたりの地形は、わたしたちのほうが詳しい。地の利はわたしたちにあるわ」
戦闘に向けボルテージを高めようとするミーナに、ノエルが声をかけてくる。
「ねえ乳デカ女。こいつらって、本当に《ミストガン》代表なの？　代表小隊の癖にはやけに気迫が欠けてるけどう」
チビ虎さんは野暮って言葉を知らないのかしら？　とミーナは叱りつけようとする。だが、すぐにそれが間違いであると気づいた。なぜなら、不機嫌そうなノエルの半眼が、なにかを語りかけるようにこちらをじっと見据えているのだ。
……このチビ虎さん、意外と優しいわね。
ノエルは《ファルシオン》の小隊長だ。立場が同じ者同士、見えるものは当然似通ってくる。そのことを踏まえた上で、気迫が欠けているのをわざわざ伝えてくれたのは、ミーナに譲ってくれるということなのだろう。
なら、やってみせるわ。おいしいところを譲ってしまったって、あとになって後悔するぐらいに……
「全員、そのままで聞きなさい……っ！」
戦闘態勢を崩さぬまま、ミーナは声を張り上げた。

「いい機会だから、伝えておくけど、ミソラさんたちは《ミストガン》代表じゃない。Ｅ６０１小隊の戦績では、どう考えても代表にはなれなかったわ。だから、代表失格。空戦武踏祭の参加者には相応しくない」

「ミ、ミーナさんっ!?　いきなりどうしたんですか……っ!?」

突如として発せられた言葉に、ミソラが慌てふためいた。弱気になっていたリコたちも、ミーナに注目した。

「わからなかったの？　ミソラさんたちは、《ミストガン》代表になるべきではなかったと伝えたのよ……っ！」

「な、なれどっ！　私たちも《ミストガン》の代表と――」

「そ、そうですっ！　そのぅ……わ、わたしも必死に……」

「待ってくださいプレアさん、レクティさん。最後まで話を聞いてみましょう」

「ふっ、よく止めたユーリ。じつは……わたしも続きが気になった」

静かになるのを待ってから、ミーナが言葉を紡ぐ。

「学内選抜戦でＡ１７７小隊に勝利したＥ６０１小隊には、強い信念があった。その信念を、いま想い出しなさい。どんな想いで戦ったから、わたしたちに勝てたの？　優勢だったわたしたちを narrow に嵌めたとき、一体何を考えていたの？」

ミソラたちが、そのときの記憶をイメージする。

背水の陣からの中央突破。あのときに心に浮かべたのは……

「そのときの気持ちがあれば、この状況を突破できる。浮足立っているこの状況でも、相手がどんなに強力でも、必ず勝利することができる。だからあなたたちは、《ミストガン》代表なんかじゃなくていい。カナタ・エイジの教え子の代表でいなさい」

ウィットの利いた言葉に、リコたちがふっと微笑を零した。ミソラだけは遅れて気づき、あっ！　と気づいた貌をする。

このタイミングで、ミーナが急に調子を上げ、おどけた声を出す。

「さあ、ここで問題よ。カナタ・エイジの教え子が、この状況ですべきことは何でしょう？　絶望的な状況を嘆くこと？　どうしようもない現実を悲しむこと？　それとも、尻尾を巻いて逃げ帰ることでしょうか？　――はい、レクティ・アイゼナッハさん……っ！」

「えっ!?　あ、あのぅ……っ!?」

突如として振られたレクティが、必死に答える。

「だ、だだだ、誰かを護るために、諦めずに、必死に戦うことだと、お、思います……っ!?」

「ええ、いい答えね。そして、それこそがＥ６０１小隊であり、カナタ・エイジの背を追い続け、追い越そうとする、わたしたち空士の宿命よ……っ！」

頬わくば、わたしも彼のもとで教え子をやってみたかった。

無事に《ミストガン》に帰れたら、ひとつお願いしてみようかしらと、とミーナは本気で思う。

だが、その前にやるべきことがある。密林の向こうから、複数の気配がこちらへ向かってくるのを感じた。物量差は圧倒的。気を抜けばすぐに呑み込まれるとわかる。

しかし彼女たちの士気は、一度や二度の突撃で蹂躙されるほど、脆いものではなくなっていた……！

「しゃあまず、眼前の敵に手痛い反撃を浴びせるところから始めましょうか。Ａ小隊が正面から敵を迎え撃つから、Ｂ小隊は側面から回り込もうとする敵を排除してちょうだい」

ミーナは右足を引き、腰をひねり、巨大な魔戦斧を脇構えにする。直後、密林の向こうから《アスモデウス》たちが一斉に姿を現し、突っ込んでくる。

身構える仲間たちに、ミーナが言い放つ。

「相手には勢いがあるみたいだけど、パープルトンの騎士がいる戦場に負けはないわ……っ！」

黄昏色の障壁の中では、人類と侵入者たちの間で、死闘が繰り広げられていた。

「ミソラさん、砲撃をお願い」

「わかりました……っ!?」

ミーナの指示を聞き、ミソラが砲撃を連射する。白銀色の砲撃が、生い茂った樹木の中へ吸い込まれ、爆発していく。緑が爆ぜ、粉々になった木片が爆炎とともに、《アスモデウス》の表皮を叩く。常人であれば、身の毛もよだつような砲撃の連射だ。だが、死を恐れぬ《アスモデウス》に恐怖の色はない。

一発でも多く当てないと……っ!?　弾数を減らし、ミソラが狙いを絞りだすが、

「ミソラさんは手当たり次第に砲撃をばらまいて。敵の足を止めつつ、密集を阻止して」

「でも、わたしの狙撃術じゃ木々が邪魔で……っ！」
「かまわないわ。敵に当てなくていいから、木々を粉砕してちょうだい」
そんな砲撃に意味があるの？　ミソラは疑念を抱くが、ミーナの指示通り、ミソラは砲撃を乱射した。《アスモデウス》たちが来た方向にある密林が、扇状にどんどん禿げ上がっていく。
しかし、《アスモデウス》には当たらない。これだと前衛にかかる負担が大きい……！
心配するミソラの前で、砲撃を抜けてきた《アスモデウス》たちの第一陣三体を前に、悠然と構えるのは、ミーナ、ノエル、ユーリの上級生三人組だ。
「生半可な攻撃は通用しないわ。ノエルさんはサーベルだけど、止めはわたしかユーリに任せても大丈夫よ」
「ちゃんと対策は考えてあるから大丈夫よ乳デカ女。わたしより、自分とユーリのことを心配しなさい」
「あら、チビ虎さんが吠えた声が聞こえたけど。チカラ不足でユーリさんに助けられたのは、誰だったかしら？」
「お二人とも、戦闘中ですよ。慎んでください。……来ますっ！」
その直後、上級生三人組と《アスモデウス》が交錯。ミーナが魔戦斧を振り抜き、ノエルが魔剣で斬りあげ、ユーリが魔槍を叩きつける。
瞬く間に、三体の《アスモデウス》が分断される。ノエルが倒した《アスモデウス》は腕と足をもがれたが、まだ息があるらしい。足元に転がってきたその個体を見やり、ミーナが容赦なく魔戦斧を振りおろす。
この程度の数など、ミーナたちの敵ではないらしい。
どうやら、敵の魔力吸収特性を警戒し、最低限の攻撃で倒す方針のようだ。
ミソラは《アスモデウス》たちの動きを見る。こちらへ突撃をかけようとしていた第二陣が、向かって左に回り込んでいく。どうやら、続く《アスモデウス》の第三陣と同時に攻め込むつもりらしい。
「リコさん。レクティさん、ブレアさんと一緒に左側面から回り込もうとする敵をお願い」
「ふっ、仕方ないな。行くぞレクティ、ブレア」
リコが二人を引き連れ、迎撃に向かう。その間にも、《アスモデウス》の第三陣が迫ってきた。ミソラの砲撃をものともしない。
爆炎で浮かび上がる《アスモデウス》の影は、十五個前後。ミーナさんたち二人でこの数を相手にするのは流石にきつい、とミソラは不安を覚える。ミソラたちがミーナを救出した際は、急襲できたからこそ、容易く《アスモ

デウス》を撃破できた。
だが、敵の第三陣は違う。この《アスモデウス》たちは、ミーナたちの強さを目の当たりにし、彼女たちの技量を見極めた上で迫ってきているのだ。
充分な警戒心を持った敵に、正面から応じるのは愚策。しかしミーナは、
「今度はこちらから打って出るわ……っ！」
た、たった三人で敵に突っ込むっていうの……っ!?
敵は第二陣だけではない。砲撃の影響で禿げあがる密林の向こうには、さらなる敵の姿が見えた。ミーナが言う『打って出る』とは、それらを討滅することを意味するのだ。
「ミソラさんは砲撃を控えてちょうだい。……ノエルさん、ユーリさん、行くわよ……っ！」
ミーナの声に応え、傍らに控えていたノエルとユーリも前傾飛行で敵に迫った。
「はああああ……っ！」
眼前に迫った《アスモデウス》に、ミーナが魔戦斧を振りかざす。その《アスモデウス》は刀腕で受け止めようとするが、ミーナの魔戦斧に刀腕ごと斬り裂かれた。
すぐさまミーナは周囲を見渡し、
「ユーリさん、左」
「任せてください……っ！」
「ノエルさんは右よ」
「勝手に指図するんじゃないわよ乳デカ女……っ！」
大まかな動きだけを指示し、自分も次の獲物に襲いかかる。通信結晶がないミーナたちに、細やかな連携攻撃は不可能だ。
しかし、個人戦では、連携する十体以上の《アスモデウス》に呑みこまれてしまう。
敵の只中へ突撃するミーナたちの無事を、ミソラは心から祈る。
ミーナたちが《アスモデウス》と刃を交えている間に、他の《アスモデウス》が包囲しようと動く。このままじゃ袋叩きだ、とミソラが砲撃を放とうとしたとき、
「え……っ!?」

そんな言葉が、思わず口から漏れた。

というのも、《アスモデウス》たちに囲まれたとたん、ミーナたちの動きに、戦いの鼓動が生まれ出したのだ。《アスモデウス》に包囲された中で、ミーナたちが小さな旋風のように、敵の包囲の中をめまぐるしく動き出す。驚愕するミソラの眼前で、《アスモデウス》の刀腕に、魔戦斧を受け止められたミーナが声を張り上げる。

「ノエルさん……っ！」

「うるさい、わたしに指図しないで……っ！」

ノエルはノエルで、《アスモデウス》と交戦中だ。彼女の魔剣〈シルファリオン〉の刻撃では、《アスモデウス》の硬皮を貫くのに時間がかかる。

しかし口では反抗的なことを言いながらも、ノエルは自分が担当する《アスモデウス》の一瞬の隙を突き、太ももに魔剣を突き立てた。体勢を崩す敵。その際に一気に間合いをとって、ミーナのもとへ救援に向かおうとする。苛立っているようで、ノエルは周りをよく把握している。だが、救援へと向かうノエルを妨害するように、一体の《アスモデウス》が壁として立ちはだかった。

それで高まるのは、孤立したミーナが撃破される危険。しかし、ノエルの表情に焦りはない。なぜならば、突然――容赦のない鋭い槍撃が、その《アスモデウス》を貫いたからだ。

「ここは任せてください……っ！」

「やっぱりあなたの魔槍は有効ね」

ユーリの助太刀を計算していたノエルは、なんと混戦の中で敵を振り払い、ミーナと対峙する《アスモデウス》のもとへ辿り着いてみせた。

ノエルはすぐさま《アスモデウス》の、左脇の下――硬皮の最も薄いところのひとつを、サーベルで突き上げ、神経をずたずたに引き裂く。ノエルを追い払おうと《アスモデウス》がままならぬ左刀腕を振るうが、明らかに動きが鈍く、ノエルには届かない。そして《アスモデウス》の注意がノエルに逸れた瞬間、

「隙あり……っ！」

巨大な魔戦斧を頭上に大きく振りかざしたミーナが、跳躍しながら間合いを詰める。直後に巨大な魔戦斧が振り下され、薪でも割るかのように、《アスモデウス》が真っ二つになる。見事なジャンプ斬りだった。

「次、行くわよ……っ！」

真っ二つに裂かれた個体から露出した黒晶を叩き潰した、ミーナが言う。彼女の声に従うように、すぐさま全員が匍匐飛行。それぞれがばらばらに飛行した上で、敵の注意を分散させ、その中で注意力が疎かな――迂闊な《アスモデウス》を次々屠っていく。

なんて動きなの……っ!?　後方で見守るミソラが驚嘆する。

通信結晶抜きでの混戦だ。まして即席三人組である彼女たちは、連携戦闘の経験がないにもかかわらず、掛け声だけでお互いの意思を共有していた。

「乳デカ女、ユーリ……っ！」

ノエルが声を張り上げた直後、一体の《アスモデウス》がノエルに突っ込んでくる。ノエルは小柄な身なりを活かし、軽いフットワークで躱すと同時に、相手の眼球にサーベルを突き刺す。

片眼を失った《アスモデウス》が悲痛な咆哮をあげた直後、二体の《アスモデウス》がカバーに来る。しかしその動きを読んでいたミーナが一体を、ノエルがもう一体を足止めする。では、片眼を失った《アスモデウス》はというと、

「これで終わりです……っ！」

カバーに入った《アスモデウス》たちの間を駆け抜けたユーリが、閃光の如き魔槍術の連打を浴びせ、一瞬で葬り去った。

「お見事。じゃあ、もう一回障を作るわよ。みんな集中して」

ミーナの言に従い、ノエルとユーリが散開。《アスモデウス》の包囲下で、鋭い匍匐飛行を維持し、相手の隙を窺いだす。

なんで敵の包囲下で戦い続けてるんだろう……？

ミーナたちの能力なら《アスモデウス》の包囲を破り、もっと広くフィールドを使える。ミソラの乱砲撃で開けた地形で戦うのではなく、密林を隠蔽に使うことだってできるはずなのだ。にもかかわらず――

「頼むわよ、二人とも……っ！」

ミーナは匍匐飛行し、仲間たちも彼女に従っている。まるで望んで密林に入ることを選び、《アスモデウス》包囲下で留まっているように見えた。

このときになって、ミソラはミーナたちの連携の種に気づく。

まさかっ!?　ミーナさんたちは、敢えて包囲されながら戦っているの…っ!?

通信結晶を使えない以上、声が通じる距離で戦うしかない。その上で、全員で同じ視野を――仲間たちの状況と敵の動きを把握するため、開けた地形に居座り続け、戦術的愚考を共有しているのだ。

開戦当初に、ミソラに乱砲撃をお願いしたのは、ここまで計算してのことだったらしい。

こ、これが、代表小隊の隊長クラスの実力……っ!?

特筆すべきは、上級生三人組の戦術眼であろう。悪条件ばかりが重なるこの混戦の中で、敵味方の状況を全て把握し戦い続けるのは、ミソラたちにはできない芸当だ。

一方でリコたちは敵の第二波と遭遇し、ミソラも支援砲撃を放った。火力の違いを悟ったか、敵の第二波は素早く撤退していき、その動きに呼応するかのように、ミーナたちが戦闘中の《アスモデウス》もじわじわと後退する。

「やけにあっさりとした引き際ですね」

「その気になれば、もう少し粘れたと思うが」

ユーリの言を受け、合流して来たリコがつぶやいた。ミソラとしても、やけにいい引き際が気になる。おそらく先程戦闘した《アスモデウス》の群れは、末端にすぎないのだろう。

しかも、先が見えぬ密林の向こうに、《アスモデウス》より、もっと不吉な存在が潜んでいる気がして、胸騒ぎがしてならなかった。

「いまのうちに、わたしたちも退きましょう。テントその他物資は、惜しいけどここに放棄。最低限の食料だけ持って、敵の追撃がこないうちに姿を消すわ。ああ、信号拳銃だけはやっぱり持っていきましょう」

ノエルがミーナに尋ねる。

「信号拳銃なんて何に使うのよ？」

「あら、通信結晶が使えない環境下だと、何かの合図に使えて意外と便利なのよこれ。昨日、敵が夜襲をしかけてきた際は、照明弾で危険を知らせてくれた小隊もいたわ」

「ふんっ、単に救助を求めただけじゃないの？」

「本当はそれが正解かもしれないわ。でも、照明弾のお陰で、わたしは敵の接近を察知して、紙一重で逃げることができたの。だから、お守り代わりっていうことでいいでしょ？」

「……まあ、それひとつくらいならいいわ」

ミーナが問うと、ノエルは反対しなかった。同じ夜を過ごしたものとして、共感を覚えたのかもしれない。

「しゃあこれは、ミソラさんが持っていてね」

ミーナは信号拳銃をミソラに握らせた。

「えっ!?　あたしが持つんですか……っ!?」

「ええ。あなたが困ったときは、これを空に向かって撃ちなさい。きっといいことがあるはずだから」

ミーナなりの気遣いなのだろう。促されたミソラは、信号拳銃をしまっておくことにする。

一方で、食料を管理していたレクティとプレアは、大型リュックサックの中に詰められていた行動用の小型リュックの中に、そそくさと食料を詰め込んだ。

《アスモデウス》を撃退したのに、ミソラ以外の隊員も緊迫感を覚えているらしい。どうやら誰もが感じているようだ。この近くに、《アスモデウス》よりも怖い敵が潜む気配を。

密林の向こうを警戒するミソラの隣に、不機嫌そうな半眼のノエルが立つ。

「紅チビ。あなた、さっきのわたしたちの動きについて来れるの？」

「その……」

「大丈夫よ。ミソラさんは決して足手纏いにならないし、させないわ」

「そうです。それにミソラさんの面倒なら、わたしも……」

不穏な気配を感じ取ったミーナとユーリが近寄って来る。

「ダメよユーリ・フロストル。あなたの魔術は《アスモデウス》と相性がいいわ。だからこそ、少しでも攻撃に回ってもらう必要がある。……それにさっきの質問の意図は、《崩力》の使い手がいるかどうか不明である以上、使える手札をきちんと確認しておくのが目的よ。この意味わかるわよね？」

常に最悪の事態を想定するのが、厳格な《ファルシオン》の流儀だ。

しかし、いまのミソラはただ黙っているだけではない。

「あの、ノエルさん。確かにあたしはこの中じゃ一番弱いですけど――」

「言わせておきなさいミソラさん」

何かを伝えようとするミソラの言葉を遮り、ミーナが言い放つ。

「いちいち取り合う必要はないわよ。あなたのことは責任を持って、わたしが護ります」

「癪に障る言い方ね」
むっとノエルが睨みつけるが、ミーナは譲らない。
「生憎と我が家は、弱きを助け護る家柄なの。チビ虎さんみたいにただ吠えてるだけの生き方は選ばないのよ」
「はんっ、税金を食い潰す無駄飯ぐらいの間違いじゃないの……っ！」
「ノエルさん。あなたね、案外いい子なんだから、もう少し素直に……」
言いかけ、全員が不意にある密林の向こうを見やる。
「どうやら本命が来たみたいね」
ミーナの視線の先から、二十体ばかりの《アスモデウス》が姿を現した。
大乱戦を想定し、ミソラたちが各々の武装を握る手にチカラを込める。
だが、《アスモデウス》たちの様子がおかしい。突如として彼らは左右に分かれ、列を二つ作ると、お互いに向き合って膝をつき、それぞれ刀腕をひとつずつ天に捧げ出したのだ。まるで旧来の騎士が、王に絶対の忠誠を捧げるかのような光景だ。
そして忠誠が捧げられた者のみが通れる道を、一体の《アスモデウス》が歩いてくる。
ミソラたちはその《アスモデウス》を見て、思わず息を呑んだ。
しかし、その《アスモデウス》の外見は他の個体となんら変わらない。
では、なぜ彼女たちが息を呑んだのか？　――それは道を譲られた《アスモデウス》の肩に乗っている、一人の幼女の姿があったからに他ならない。

「ミっソラー、久しぶりーーーっ♪」
《アスモデウス》の上から無邪気な笑みとともに手を振られ、思わずつぶやく。
「リーゼリット・フェアチャイルド……っ!?」
因縁の相手との思わぬ再開に、ミソラの貌が一気に引き攣る。
「あれが敵？　なによ、子供じゃないの」
自分より小柄なリーゼリットを見やり、ノエルがつぶやいた。だが、リーゼリットはノエルのことなど眼中にないらしく、
「わあっ！　名前を覚えててくれたんだ……っ！」
《アスモデウス》から飛び降りたリーゼリットは、再度無邪気な笑みを零していた。
リーゼリットにどうやって名前を知られたのか、ミソラには定かではない。だが、そんな事情など、些細なことだった。なぜならば、
「……忘れられるわけないじゃないの」
怒りに肩をわなわなと震わせて、ミソラがつぶやいた。ミーナが機微を感じ取る。
「因縁がある相手みたいね」
「あいつに致命傷を与えた変異種を操っていた、《崩力》の使い手です……っ！」
嫌な記憶が、ミソラの脳裏を駆け巡った直後に、感情が爆発する。
「あんただけは、あんただけは絶対に赦さないわ……っ！」
激高したミソラが、咄嗟に魔砲剣を構え、引き金を絞る。この一連の動作は、彼女が生涯行ったもの中で最も早く、その砲撃は、猛々しく荒ぶる、野獣のように猛烈なものだった。持てる感情の全てを叩きつけたかのような一撃を、しかしリーゼリットは躱してみせた。たおやかな体捌きで、風に靡く草木のように。
「ふふっーんだ、そんな狙いが甘い砲撃じゃ当たらないよー」
「あんただけはっ!?　絶対にあたしが……っ!?」
「落ち着きなさいミソラさん」
激高したミソラの肩に、ミーナが手をかけた。ミソラは鬼のような形相で睨みつけ、
「止めないでくださいミーナさんっ!?　あたしはここでリーゼリット――」

「当然よ、わたしも手助けするわ。一緒にリーゼリットを倒しましょう」
「え……っ!?」
意表を突かれるミソラ。本来ならば、撤退を指示する立場のはずのミーナが、リーゼリットへ魔戦斧の切先を向ける。それは、退かぬ覚悟の表れに他ならない。
むろん、ミーナがこのように動いたのには明確な理由がある。ミソラには知ることもできないことだが、リーゼリット・フェアチャイルドという相手の存在が、ミソラの心の枷になっていると気づいたからだ。そして不安定なミソラを本当の意味で救うために、ミーナは戦略を差し置き、リーゼリットを倒すと決意したのだ。良識派のユーリが窘める。
「な、なにを考えているんですかミーナさんっ!?　相手は《崩力》の――」
「ええ。だからこそ、わたしたちの復讐戦の相手に相応しいのではなくて？」
「そのぅ……ですけど、相手には《崩力》が……っ!?」
「うぬ。ここは戦わずに撤退すべきである……っ！」
「ああ。この状況では分が悪すぎる」
反対するリコたち。しかし、
「みんな、落ち着いてちょうだい。リーゼリットは、あなたたちが逃げるべき敵じゃない。後々の禍根を残さないためにも、ここで倒すべき相手なのよ」
易々と揺るがぬミーナの言葉には、覚悟を固めた者特有の重みが込められていた。瞳の奥に静かに滾る滾んだ炎――使命感の意思を宿し、ミーナは《崩力》の使い手を前に微塵も動じているようには見えない。そんな彼女の言葉と仕草は、穏やかだが確実に周りの者たちの心に浸透していく。
「たとえどんなに強い相手でも、付け入る隙がある。まして相手はあなたより年下よ。それにいつまでも、彼女を落ち込ませておくわけにはいかないでしょう。これは、あなたたちの為でもあるのよ」
鼓舞し、ミーナが一歩前に出る。彼女という単語は、リコたちの心に強く響いた。それに膨大なチカラが相手とはいえ、ただ逃げ回っているだけでは勝ち目はない。強敵相手に勝利してこそ、E601小隊なのだ。だが、
「わたしは反対ね。敵のトップが出てきた以上、初期の計画通り撤退するべきよ」
ノエルは頑なに撤退を主張する。一瞬仲間たちの士気が纏まろうとしたが、そのタイミングで――ミソラも一歩

前に出た。
「あたしがあいつを倒します」
「その意気よ。なかなか調子が上がってきたじゃないの。リコさんたちもそれでいいわね？」
肩を並べたミーナが、ミソラにふっと微笑みかけてくる。
「非合理だからわたしはいまだに反対だけど。でも、どうせ避けられない戦いなら、この勢いで挑めば勝算があるかもしれないわね」
若干不満そうに眉を顰めながらも、ノエルはサーベルを構えた。覚悟を決めたらしい。
「さて。舐めた真似する悪い子には、雷を落としてあげないと」
そう言って、ミーナはリーゼリットに襲いかかった……！

「邪魔をしないで……っ!?」
ミーナはリーゼリノと戦いたいというのに、二体《アスモデウス》が立ちはだかる。魔戦斧で刀腕を斬り落とすが、その個体はすぐに退き、もう一体の個体が前に出てくる。
敵が密集しているだけに、付け入り難い。しかも、魔力吸収特性がミーナのチカラをじわじわと奪っていく。
邪魔よっ！　焦りと覚悟が、ミーナに魔戦斧を振るわせる。
激高したミソラが、砲撃を以って、リーゼリットへ持てる感情の全てをぶつけようとしたあのとき、ミーナは直感的に感じ取っていた。
服の前に立ち塞がるこの敵を倒さないと、ミソラは本当の意味で立ち直れないのだ、と。そして自分がそれを手伝うことが、あのカナタ・エイジのような高貴なる者の義務の体現者に近づき、彼の期待に応えるための行為だとも。
ミソラにとって大事なこの戦いは、カナタから託された教え子たちを『護り導く』という意味で、ミーナにとっても大事な戦いであった。この状況で何もせず逃げたところで、ミソラの……いや、E601小隊全体が抱える問題が、解決するとは思えない。

たくさんの《アスモデウス》を従えたリーゼリットは、悠々とミソラのもとへ近づいていった。
「ユーリさんとノエルさんは、リコさんたちと協力してちょうだい……っ！」
ミーナが叫ぶと、心得たかのようにリコたちが動く。ミーナとミソラを除く全員が、リーゼリットとミソラの接触を阻むために攻勢を仕掛ける。
「《アスモデウス》、邪魔者を排除しなさい」
リーゼリットの一声で、《アスモデウス》側も反撃。リーゼリットの護衛に少数を残し、《アスモデウス》の軍団が襲いかかる。リコたちは無理にその場に留まろうとはせず、敵の勢いを受け流すように後退し始めた。そんな光景を見やり、リーゼリットが満足そうに言う。
「ふふっ、あの戦力差じゃ逃げるしかないもんね」
《アスモデウス》の肩から、リーゼリットが飛び降りる。そんな彼女の周囲を固めるのは、四体の《アスモデウス》のみ。
これなら崩せる……！　魔戦斧を握る手にぐっとチカラを込めるミーナ。《崩力》の使い手さえ倒せば、この戦いを終わらせることができるのだ。
「ねえ、ミソラ。早速だけど、わたしの《アスモデウス》たちをお星様に変えたお礼をさせてもらうよ」
後ろ手を組んでおねだりするかのように、リーゼリットが言い放った。
「お星様って、あんたたちが仕掛けてきたから誘爆させただけじゃないの……っ！」
腹を立てたミソラが、リーゼリットに照準をつけ、砲撃を放とうとする。その動きに呼応して、ミーナも襲撃する魂胆だった。
だが、その思惑は思わぬ形で崩れることになる。
なぜならミーナより先に、リーゼリットに突進する人物がいたのだ。本来ならリコ達と一緒に交戦中であるその人物は、素早い身のこなしで《アスモデウス》たちの迎撃をすり抜け、幼い少女であるリーゼリットにも容赦なくサーベルを突き立てる。
「ちっ、思ったより硬いわね」
突如として展開された呪術障壁で攻撃を阻まれたその人物――ノエルが、ミーナたちのもとへ戻ってきた。すぐさまミーナが尋ねる。

「リコさんのほうは？」
「自称女神はいま全力で後退してるわ。ユーリが密林に紛れて上手く牽制してくれてるから堅牢防御は順調よ。もしかしたらユーリも加勢に来れるかも」
「それは朗報ね」
形勢がどんどんこちら側に傾き、ミーナの口の端がつりあがる。
あれだけいた《アスモデウス》たちを、リコたちが引きつけているのは、千載一遇の好機という他ない。
「お姉ちゃん、誰？」
素早くミソラの傍まで後退したノエルを見やり、リーゼリットが尋ねた。
「ノエル・ル・サンスーシ・デア・ランシール・ド・ワーフよ」
「小人……？　ふふっ、小人なんて馬鹿みたいな名前ね」
「誰が小人よ……っ！」
ノエルが叫び、再びリーゼリットに襲いかかるが、傍にいた《アスモデウス》が刀腕で受けて立つ。その隙にミソラが発砲。リーゼリットに向かって白銀色の砲撃が向かう。
しかしその瞬間、リーゼリットの前に両腕を交差した《アスモデウス》が立ち塞がった。
「わあーっ！　盾になってくれるのっ！　ありがとう《アスモデウス》……っ！」
「なにわけのわからないことを言ってるのよ……っ！」
リーゼリットを護らんがために身動きできない《アスモデウス》に、ミソラが砲撃を連射。膨大なエネルギーを受け止めきれず、敵の両腕が吹き飛んだ。負傷した《アスモデウス》は、リーゼリットのほうへ倒れ込む。
「大丈夫っ!?　《アスモデウス》……っ!?」
傷つき倒れた個体に駆け寄ったリーゼリットが、きっとミソラを睨みつける。
「ひっどーいっ!?　なんてことをするのよミソラ……っ!?」
戦術的センスが欠如している？　それとも、情緒が未発達なの……？　リーゼリットを見やり、ミーナたちが戸惑う。その直後、リーゼリットのチカラが急激に高まっていく。
「もう泣いて謝ったって、絶対に赦さないんだから……っ！」
「みんなっ!?　気をつけて……っ!?」

ミソラが叫んだ直後、黒い突風のようなものが一瞬で吹き荒れた。まるで触れるもの全てを滅ぼすかのような、禍々しいオーラに、ミーナたちが貌を引き攣らせる。
ことミーナに関しては、全身の毛穴という毛穴から、どっと汗が噴き出る感覚を覚えた。
このチカラと正面から渡り合えば、敗れる。いや、策を駆使しても覆せるようなものではない。自然界に肉食動物と草食動物という括りがあるように、人間界にも階級がある。リーゼリットという王の前では、ミーナたちは赦しを請うだけの奴隷になりさがってしまう。
全身の震えがやまず、怯えは消えるどころか時間とともに濃さを増し、ミーナは心がぽきりと音を立てて折れそうな気がした。これが本当に人間のチカラなの……っ!?　リーゼットのチカラは想像の域を遥かに超えている。
リコたちが怯むのも納得の敵だ。だが、この敵を倒す必要がある以上、騎士を名乗る以上、無様な振る舞いはできない。震える奥歯を強引に噛みしめ、それでも……っ!?　とミーナがどうにか一歩踏み出そうとした矢先のことだった。
一発の白銀色の砲撃が、リーゼリットへ放たれたのは。
「ミソラさん……っ!?」
ミーナが見やったのは、砲口から白煙をあげる魔砲剣を構えた、ミソラの姿だ。
砲撃自体は、リーゼリットの圧倒的《崩力》に弾かれ、無力化される。
だが、この瞬間、ミーナは伝えたかった。ミソラに、心からの感謝の念を……！
動けるっ！　あの砲撃のお陰で……っ！
リーゼリットに弾かれたその無力な砲撃は、その場に居合わせた者たちに、自由を与えていた。そんなとき、《ベベル》でカナタが伝えた言葉が、不意に思い出される。

――もし俺になんかあったら、ミソラたちのことを頼みたい

しかも、《ベベル》への出発の日。《ミストガン》で空戦魔導士科長――フロン・フラメルが、

――危なくなったら、すぐに逃げなさい。隊員の生命を第一に考えること。もし余力があれば、E601小隊の

隊員たちもお願いするわ

あれらは、まさか《崩力》を、これほどまでに圧倒的なチカラを予期していたの？

カナタとフロンに、明確な状況のイメージがあったかどうかは定かではない。だが、ミーナの直感が告げていた。如何に強大なチカラとはいえ、屈するわけにはいかない。後輩たちの前で、道を示さなくてはならない。

どんな強大な力に対しても、抗う術があることを。

「チビ虎さん、あなたひょっとしてビビってるの？」

「誰に言ってるのよ、この乳デカ女……っ！」

ミーナとノエルが、リーゼリットに向かって行こうとする。

相手は人間だが、遠慮は不要。御前飛行で一気に距離を詰めたミーナとノエルは同時に戦技を放つ。

魔戦斧戦技——雷神粉砕破

魔剣戦技——螺旋龍風破

強烈な電撃を帯びた斧撃と、縮退魔力で生み出された螺旋槍。如何に《崩力》が強力であっても、これは防ぎようがない。獲った……っ！　と、ミーナが確信した刹那、リーゼリットが右の掌をミーナたちへ向ける。

たかがエネルギー弾の一発や二発……っ！　ミーナが堅牢と名高き魔術障壁を展開し、なおもリーゼリットに突っ込む。ノエルも同様だ。

だが、次の瞬間。二人の予想はあっけなく裏切られる。

リーゼリットの掌から怒濤のように、その体幅に似合わぬ凄絶で壮絶な、漆黒のエネルギーが一気に放出される。それは、ミーナとノエルを戦技と衝突し爆発。代表小隊の隊長クラス二人が一瞬で吹き飛ばされる。

「ミーナさん、ノエルさん……っ!?」

爆風に吹き飛ばされた二人のもとへ、ミソラが駆け寄る。堅牢な甲冑型の防護服を纏うミーナは額から血を流してはいたが、息はあるらしい。ノエルは一瞬気を失っていたのか、はっと眼を開くも、体にチカラが入らず、うつぶせのまま起き上がれない様子だった。

まだ実力の数分の一も披露していないリーゼリットが、呆れたように言う。

「どうしたのお姉ちゃん、こっちが本気を出しているんだから、そっちも本気を出さないと死んじゃうよ」

一瞬希望が見えた黄昏色の障壁の中に、絶望が立ち込めた。

「あはははは。お姉ちゃんたち、本当に大したことないんだね」

あっさりとひれ伏したミーナとノエルを見やり、リーゼリットがせせら笑う。彼女の傍に控える三体の《アスモデウス》も微かに口角をつり上げた。

その瞬間、ミソラの中で何かがプチ切れる。

「あんたね、調子に乗ってんじゃないわよ……っ！」

激情に駆られたミソラが、魔砲剣の引き金を絞る。殺傷力を持つ多数の砲撃が、リーゼリットに注がれた。だが、リーゼリットの前に立ちはだかった《アスモデウス》が呪力を宿した刀腕で魔力弾を弾き飛ばす。

「よっわ～～～いっ！」

あははは と声をあげてリーゼリットは笑ったあと、据わった目でミソラを見つめ、

「ミソラ。せっかくだから面白いものを見せてあげるね」

面白いもの……っ!?　と警戒するミソラの前で、リーゼリットの右手に黒く禍々しい燐光が宿った。膨大なエネルギーを感じる。

「おいで《アスモデウス》」

一体の《アスモデウス》がリーゼリットのもとへ近寄る。彼女は手に宿る黒く禍々しい燐光を、《アスモデウス》の中へと注ぎ込んだ。すると黒い卵型のブローチのようなものが、《アスモデウス》の胸部に現れる。その直後、《アスモデウス》の骨格がめきめきと音を立て始め、体のあちこちから甲殻類のような鋭い刺が生え始め、やがて鎧え立つ鎧のような存在と成り変わる。まるで進化したかのようだ。黒い卵型のブローチは体内へ取り込まれてしまった。

「はい、完成。この子も《崩力》を宿してるから、気をつけてね。名前は《アマイモン》って呼んであげて」

またこれだっ!?　と、著しく変貌した《アスモデウス》——《アマイモン》を見やり、ミソラは歯噛みする。先日

遭遇戦をした際も、リーゼリットは変異種に膨大なチカラを注ぎ込み、進化させていた。
「なんなのよっ!? どうして《崩力》を簡単に……っ!?」
「わからないの？ わたしの呪詛で身体を支配し、強化をしたうえで、その身体で耐えうる限りの《崩力》を注ぎ込んでいるんだよ」
「呪詛……？」
「あれ、ミソラ。《崩力》は知ってるのに、呪詛は知らないの？ ……仕方ないなー。これからベットにする記念に教えてあげる。呪詛っていうのはね、人型魔甲蟲だけに赦された、全てを超越するチカラであり、万物の願望器。簡単に言うとね、心のありようを描くチカラなの」
そう言って、リーゼリットは右手に黒く禍々しい燐光を宿す。
「わたしの呪詛――反魂の錯乱は、意志のある存在を、強化支配することができるの。精神操作の一種だけど、チカラ加減次第では、いまみたい生物の限界を越えて強化することだってできるわ。無理やり強化した体内原器に《崩力》を注ぎ込むことだってできるし」
「でも、そんなことをしたらその個体の寿命を縮めるんじゃ……」
「うん、長生きはしないよ。でも、反魂の錯乱さえあれば、《アスモデウス》たちはわたしを裏うことはないし、自分の在り方に疑念を覚えることもない。それと、わたしの二つ名は《下僕使い》っていうからよろしくね」
純粋無垢に微笑むリーゼリットに、善悪の価値観はなく、ミソラたちは背筋を冷たいものが突き抜けていった。
「じゃあお前たちは、ミソラの後ろで動けなくなっているお姉ちゃん二人を回収して。あとで、わたしのベットにするから」
傍らに控える二体の《アスモデウス》に指示したあと、リーゼリットが《アマイモン》に指示を出す。
「お前は、ミソラを動けなくして。壊し過ぎちゃダメだよ」
その直後、《アマイモン》が動く。膝がぐっと沈み、地を蹴ったと思った瞬間には、ミソラの眼前に迫っていた。
速い……っ!? その桁外れの動きに驚きながらも、レアル戦の経験からある程度想像できていたミソラは横っ跳びで躱してみせる。
しかし、その隙に二体の《アスモデウス》がミーナとノエルの回収に向かっていた。
まずい……っ!? と思ったミソラが《アスモデウス》たちに発砲。だが、《アマイモン》が壁になって立ちはだか

り、砲撃を体で受け止める。反魂の錯乱で生み出された分厚い硬皮は、砲撃を浴びても傷一つかない。
「くっ!? これならどうよ……っ！」
ミーナたちを護るために、ミソラは魔砲剣の縮退型魔力シリンダーを勢いよく回転させ、引き金を絞った。

魔砲剣戦技――収束魔砲

放たれた白銀色の光の奔流が、《アマイモン》へと向かう。これなら《アマイモン》を貫いた上で、その背後にいる二体の《アスモデウス》を貫けると踏んでいた。
だが、あろうことか《アマイモン》は、両手を前に突き出しながら、《崩力》で底上げした障壁を展開。ミソラの戦技とチカラ比べをする意思を明らかにする。
その直後、ミソラの収束魔砲が直撃。派手な爆音と衝撃が生まれ、爆煙が飛び散る。
やったの……？ やがて爆煙が晴れる。するとそこには、巨腕を高速再生中の《アマイモン》の姿があった。どうやら《崩力》で底上げした障壁と、硬皮で覆われた巨腕で、ミソラの収束魔砲を相殺してみせたらしい。
「う、うそっ!? 《崩力》で底上げされてるとはいえ、あの一撃を防ぐなんて……っ!?」
ミソラが持つ、最高クラスの攻撃でも通らない。
硬皮の防御力も目を瞠るものだが、それよりも厄介なのは、《崩力》の障壁。これがある限り、正面攻撃で《アマイモン》を撃破することは恐ろしく難しい。
気を失ったミーナとノエルのもとへ、二体の《アスモデウス》が迫り、担ぎあげようとする。
どうするっ!? このままじゃミーナさんたちが……っ!? 意を決してミソラが飛び込もうとしたとき、二体の《アスモデウス》が分断され、爆発した。意外な貌をするミソラの双眸には、さっと起き上がると同時に刃を振るったミーナとノエルの姿があった。
「起き上がれるんだったら、もっと早く起き上がりなさいよ乳デカ女」
「あら、それだと奇襲できなくなるじゃないの」
そう言って、ミーナが魔戦斧をリーゼリットへ向けた。
ミーナは平然と振る舞っているが、ミソラの表情は険しい。リーゼリットから受けた攻撃のダメージは、そう簡

単に抜けるものではない。だが、忠義心に厚いミーナは、この状況で、愚人であるミソラに単独で戦わせるような選択をしなかっただけのことだ。

「先にわたしがさっきの一撃のお礼をさせてもらうわ。ノエルさんはまだ休んでなさい」

顔色が冴えない仲間を気遣ったあと、ミーナはリーゼリットを見据える。

「悪いわね。あなたのペットを二体も壊してしまって……」

「そうね。本当に迷惑だわ」

リーゼリットが不快そうに睨み返した。

ミーナさんが狙われる……っ!?　窮地を悟ったミソラが、注意を引くために砲撃の構えをした刹那――

「でも、まずはやっぱりミソラから。やりなさい《アマイモン》」

え……っ!?　ミソラは弾丸のような速度で迫る《アマイモン》に対応が遅れ、体当たりをもろに浴び、吹き飛ばされた。自分が狙われると思っていなかったのだ。

一瞬、意識が飛んだ。気づいた時には、ぼろぼろで木にもたれかかっていた。

立ちあがろうとするが、体が重い。視界がぼやけて、ふらふらする。そっと額を拭った指には血がついていた。

おぼろげな意識の中で、おもむろに銃をあげると、勝ち誇っているかのように《アマイモン》が接近して来た。

「いい子ね。そのままミソラを捕まえなさい」

いまだ意識がはっきりせず、身動きできぬミソラのもとへ、敵が一歩一歩近づいてくる。

ミソラが死を覚悟したその刹那――

「逃げなさいミソラさん……っ！」

「ミーナさん……っ!?」

魔戦斧を振りかざしたミーナが、《アマイモン》に斬りかかっていた。《アマイモン》は片腕を巨大な刀腕へと変化させ、桁違いのパワーでミーナを圧倒。ミーナは額から血を流しながらも、必死で食い下がる。

膠着とした体でどうにか立ちあがったミソラが魔銃剣を構え直そうとするが、

「なにをしてるのミソラさんっ!?　わたしが盾になってるうちに、あなたとノエルさんで早く撤退をしなさい……っ!?」

「で、でもっ!?　それじゃミーナさんが……っ!?」

「安心しなさい。わたしはこんなところで、屍を晒すような間抜けじゃないわ」

満身創痍のミーナは、気丈にも《アマイモン》に斧撃を叩き込む。

魔戦斧戦技――雷電衝斬（サンダーアクス）

雷を纏った斧撃が直撃。強力な電流を浴び、痺れて動けなくなる《アマイモン》。ここぞと言わんばかりに、ミーナは回転斬りを叩き込むが、《アマイモン》の硬皮を貫けず、派手に弾き飛ばしただけだった。

「く……っ!?」

無理をし過ぎたのか、ミーナは脇腹を押さえ、辛そうに膝を突く。

「もーう。斧のお姉ちゃん、邪魔……っ！」

そこへリーゼリットが、呪力弾を浴びせてくる。ミーナは最後の気力を振り絞って、魔術障壁を展開。円形の魔術障壁が、呪力弾に震える。

「ミ、ミーナさん……っ!?」

「今は無理でも、あなたたちならなんとかしてくれると信じてる。強敵相手だって、あなたたちなら勝ち目を見つけることができるでしょ」

心配そうなミソラを見やり、呪力弾を必死に防ぎながら、ミーナがふっと笑顔を零す。

「とりあえずこの場は、わたしに任せなさい」

……笑っている。

なぜこの状況でミーナが笑えるのか？　その意味が、ミソラにはわからなかった。

「甘いよ、斧のお姉ちゃん」

リーゼリットの言に呼応して、弾丸のように近づいた《アマイモン》がミーナを弾き飛ばした。ミーナの肢体は、散り果てた花びらのようにゆっくりと宙を舞い、儚い寿命を終えたように地へと落ちていく。

「ミーナさん……っ!?」

必死に叫ぶミソラ。そのとき、制御飛行で迫ってきたノエルが、ミソラの首根っこを捕まえる。

「……逃げるわよ紅チビ」

「でも、ミーナさんが……っ!?」
「つべこべいわず、黙って従いなさい……っ！」
下手をしたら戻ってしまいかねないミソラを抱え、ノエルはリーゼリットたちと距離を取る。闇雲に密林の中を突き進むと、リコたちが引き受けていたはずの《アスモデウス》たちの一部と遭遇してしまった。
「くっ!?　この状態じゃ戦闘が……っ!?」
ミソラもノエルも、万全の状態からは程遠い。相手を振り切る自身はないし、戦闘して足を止めたら、袋叩きにされるおそれがあった。ちょうどそのとき、茂みから人影が飛びし、閃光のような魔術で、瞬く間に二体の《アスモデウス》を葬る。
「ユーリ……っ!?」
その人物を見やり、ノエルが驚いた声をあげた。
「ミーナさんは？」
尋ねられ、ノエルがチカラなく首を横に振る。
「……そうですか。まずはこの場を切り抜けましょう。ついてきてくださいミソラさん、ノエルさん……っ！」
ユーリに先導され、ミソラとノエルは陽が落ちつつある密林の中を駆け抜ける。もとより黄昏色の障壁のせいで薄暗くなっていた空間が、闇に溶けていく気がした。薄暗闇に紛れて密林を駆け抜け、河川を遡上し、リコたちと合流を図る。
……ミソラたちが去って行った方向を見やり、リーゼリットがつぶやく。
「ふふっ、ミソラ。あなた、逃げ足だけは一人前ね」
傍らに控える《アマイモン》が低い唸り声のようなものを発した。
その意味を理解したリーゼリットが返事する。
「追撃しなくていいわ。これから中央制御棟に戻って、人工空島中に放送を流すの。『明日の正午までに全員揃って、この人工空島の中央制御棟に来て、わたしの《アスモデウス》たちと戦いなさい。じゃないと、斧のお姉ちゃんがどうなっても知らないよ』って。そうしたら、明日はミソラたちもペットにできるわ」
《アマイモン》はその肩に、気絶したミーナを担いでいた。

＊＊＊

空戦武踏祭二日目。夜。
教皇浮遊都市《ベベル》。ヴィーゲルト邸。ゼスの私室。
「――なるほど。そこまで抵抗する学生がいるなんてね。それで、その学生たちの処分はどうするんだい？」
『はい、ゼス様。人質を取って誘い出し、殲滅するつもりです』
「いい対応だ。幸運を祈るよ」
リーゼリットからの状況報告を受けたあと、ゼスは受話器を置いた。大型通信機はヴィーゲルト邸にも備え付けてあり、連絡には事欠かない。
さて。もう一つの案件のほうはどうかな？　長机を前に、ゼスは彼女からの報告を待つ。
そんなとき、ドアがとんとんとノックされ、キルスティが入室してくる。
「ご多忙ですね、ゼス様」
キルスティが労いの言葉をかけながら、コーヒーをゼスの机の上へと置く。
「キルスティか。アーダルベルト評議員の件はどうなった？」
「ゼス様が会議なさっている最中に、エンディケウス議長の執務室に遺体を置いておきました。今頃は言い訳を考えるのに必死でしょう」
「そうか。エンディケウス議長も大変なことだね」
「その件ですが。必要があれば、エンディケウス議長を処理することもできますよ？」
「いいや、それはよそう。エンディケウス議長が行方不明になると、教皇を必要以上に警戒させることに繋がるからね」
「畏まりましたゼス様。教皇繋がりでもう一件。エリス様と行っている拠点探しの件ですが――」
ゼスが待望していた件だ。キルスティから報告を聞き、ゼスは結果次第ではエリスに厳しい処分を下すように説明した。

＊＊＊

第九人工空島。密林。

……また、あたしのせいだ。あたしのせいで、大事な人が傷ついていく。

そこには重く、沈鬱で、澱んだ空気が漂っていた。中でもミソラは俯いたまま、再び塞ぎこんでしまった。焚火に照らし出されたその貌は、酷く憔悴している。

ミソラにとって、せめてもの救いは、火のある晩であることか。

暖かな光は、沈み込んだ心をぎりぎりで支えてくれる。

キャンプ生活する装備諸々は失ってしまったミソラたちだが、リコが教えたユーカリの木を、レクティが発見。プレアの飛炎衝天撃で着火し、火を起こしていた。

ミソラたちの手元に残ったのは、僅かな食料と一艇の信号拳銃のみとなっていた。戦闘の経過については、沈黙するミソラに代わり、ノエルが仲間たちに報告していた。

傍らに控えるリコたちは、ミソラにかける言葉が見つからず、押し黙っていた。

「そのぅ……食事の用意ができました」

インスタントスープと乾パンを、レクティが配っていく。

「はい、ミソラさん。どうぞ」

「……ありがとう、レクティ」

ぎこちない笑みを浮かべ、ミソラが夕食を受け取る。戦いで疲れ切った体に、温かいスープがじわっと広がり、体が満たされていく。

しかし、この場にミーナ・パープルトンがいない。

リーゼリットたちの前に取り残されたあの状況で、ミーナは笑っていた。

あの状況で、なぜ笑えたのか？　ミソラの思考が、そこに捉われる。

手早く食事を終えたノエルが、おもむろに口を開く。

「明日の件だけど……」

先ほど人工空島中のスピーカーから流れた件だろう。人質にしたミーナの命と引き換えに、ミソラたちに第九人工空島中央部に貌を出すように要求していた。

「あなたたちもわかってると思うけど、リーゼリットと《アマイモン》を相手に、戦闘するのは無謀だわ。先程の戦闘の際は、向こうから攻撃されたとはいえ、わたしたちは戦闘に対する充分な用意ができていた。それでも、《崩力》の使い手相手に歯が立たなかった。乳デカ女を奪還するためにこちらが赴いたら、相手の思う壺よ。全滅するわ」

ノエルの言を否定する者はいない。戦力の差は圧倒的で、覆しようがない。

「ミーナ・パープルトンは騎士よ。自分のせいで、わたしたち全員が犠牲になるのは望まないわ」

「そのぅ……それってもしかして……」

「ミーナ先輩を見捨てるということか……っ!?」

「そうですノエルさんっ!?　さすがに、それは……っ!?」

「ユーリ・フロストル。あなただって気づいているでしょう。いまのままじゃ勝ち目がないことを」

「それは……」

「リコ・フラメル、あなたはわかってるみたいね」

「……」

黙して語らぬリコを一瞥したあと、ノエルが全員に伝える。

「幸いにして、第九人工空島の密林は広いわ。当初の予定通り、ゲリラ戦を駆使して《アスモデウス》の数を削っていければ、まだ勝算はある。あのリーゼリットっていう悪ガキだって、食事は摂るし、睡眠も必要よ。持久戦に持ち込めば、隙ができる。そこを突けば、わたしたちを犠牲にしたくなかった乳デカ女の想いを無駄にせずに済むわ」

その説明を聞き、レクティたちがぐっと口を閉ざす。

ミーナの想い……身を挺してまで、ミソラたちを護ってくれた彼女の気持ちを、軽んじる真似はできないと思ったのだろう。だが、そのとき、

「……違う」

再び塞ぎこみかけていたミソラの口が動いた。

あの状況で、ミーナさんが笑ったのは、わたしたちが犠牲にならなかったのを喜んでいたからじゃない。リーゼリットを倒すことを――希望を繋いだことを誇っていたんだ。

「何が違っているのよ紅チビ」
ノエルがミソラを咎める。
「あなたにもう少し注意力があれば、乳デカ女も無事だったかもしれないのよ」
「……」
そう言われてしまえば、ミソラに返す言葉はない。この状況を招いてしまった原因が、自分にあるのは明らかだ。
でも、それじゃダメだ、とミソラは思う。
ミーナさんは、あたしたちを庇って、リーゼリットの犠牲になった。カナタと同じだ。あたしのために、身を挺した。そのことを、心から悔いる気持ちはある。だけど、いつまでも、負の思考の連鎖に捉われていては……ミーナさんを救い出すことができない。
いつまでも悔いてるだけじゃダメなんだっ！　自分が動かなきゃ誰も護れない。誰かを護るためには、自分が動かなくちゃならない。なぜならあたしは――空戦魔導士なんだから……っ！
「あ、あのぅ……そういう言い方って……」
レクティが庇おうとした矢先、しかし、ミソラはおもむろに立ち上がると火の近くを離れ、心配する仲間たちに背を向けて、暗い雪林の方へ歩き出す。
「ミ、ミソラさん……っ!?」
不安と気遣いが感じられるレクティの声。おそらく自分が泣きだすのではないか？　と心配しているのだろう。きっとリコたちも不安そうに、あたしのことを見守っているはずだ。みんなが、あたしに心配の眼差しを向けているはずだ。
だが、ミソラはかまわず、
「あああああああ……っ!!」
と、叫び声をあげた。
レクティたちが呆気に取られ、リコからじっと見つめられるにも構わず、心にたまった負の感情を、声とともに一気に吐き出す。
「あああああああ……っ!!」
息の続く限り、身体の奥底にある悔恨を、カナタを救えなかった後悔や、ミーナに盾になってもらった無念も何

もかも絞り出すように、彼女は絶叫し続けた。
「あああああああ……っ!!」
やがて次第に声も絶え絶えになり、ミソラは肩を上下させ息を吸いだす。
「ハァハァーハァーハァー……」
突然のミソラの奇行に、呆然とする仲間たちの中で、一人だけ動ける者がいた。
「落ち着けミソラ」
気づいたときには、ミソラの傍らにリコが立ち、ミソラの肩に手をかけていた。
「ごめん、とまらなくて。……でも、すっきりした」
さっぱりした様子でミソラが謝ると、リコが意外そうに眼を見開いた。
キャンプへ戻り、心配そうにこちらを見やるレクティたちを見渡し、ミソラが言い放つ。
「じゃあ、明日はリーゼリットの要求に応じた振りをして、ミーナさんを助けに行きましょう」
「「「……」」」
急な態度の変わりようと唐突なもの言いに、仲間たち全員がフリーズした。自分でも無茶苦茶を言っているな、と思いながらも、ミソラに発言を撤回するつもりはない。
「紅チビ、あなたね、わたしの言ったことを聞いていなかったの？」
案の定、ノエルがミソラを注意して来た。
「状況はもう、わたしたちのチカラで対処できるものじゃないわ。《崩力》の使い手――リーゼリットのチカラは、戦術とかで対処できるレベルじゃないの。あのチカラを相手に戦うのは、こちらも充分に数を揃えるか、相手を弱らせるかしかないのよ。そんな敵と、これ以上交戦するのは命の無駄遣いだわ。あなたの仲間だって、そう思っているはずよ」
たしかに命の無駄遣いになるかもしれない。
しかも、あたしはこの状況を覆す方法を知らない。言い繕いようもなく、無能な小隊長だ。ミーナさんのように仲間を励ますこともできなければ、ノエルさんのようにいまいる仲間の無事を確保するための冷徹な決断力もない。
でも、
「みんな、聞いてちょうだい」

ミソラには、仲間がいる。これまで死線をともに潜り抜けてきた、仲間がいるのだ。

たとえ世界の全てが敵になろうとも、この仲間たちだけは自分を信じてくれる。そんな気持ちで、ミソラは伝える。

「まず最初に、いままで迷惑かけてごめんっ！　あいつのことで、取り乱してた……。本当にごめんなさいっ！　こんなあたし、小隊長失格だと思う」

「ミ、ミソラさん……」

心配そうにレクティがつぶやいた。ミソラの口から出る謝罪の言葉に、不安な想いを抱く一方で、何か懐かしいものに出会った貌をしている。さばさばして、エネルギッシュで、心気充実した、よく知るミソラが蘇って来るのを感じ取っているのかもしれない。

そして、その予兆は現実のものとなる。

ミソラがしっかりと仲間たちを見据え、

「でもっ！　ミーナさんは絶対に取り戻したいっ！　小隊長失格なら、取り戻してから失格になるっ！　だからみんな、お願いっ！　リーゼリットたちを倒す方法を、あたしと一緒に考えてちょうだい……っ！」

「紅チビ。あなたね――」

ミーナが咎めようとする声を遮り、なおもミソラが訴えかける。

「リーゼリットたちは、たしかに強い。それも、すごく強い。あたしたちは手も足も出なかった」

リーゼリットに挑む前の、ミーナの発言が不意に脳裏で再生される。

――たとえどんなに強い相手でも、付け入る隙がある。まして相手は、あなたよりも年下よ

「でも、想い出してみて。いままで戦った中で、あたしたちが手も足もちゃんと出せた戦いがあった？　《ミストガン》での選抜戦だって九連敗したのよ。ランキング戦に至っては、いまだに十四連敗中で、小隊創設以来、一勝もしたことがないわ」

だが、

――今は無理でも、あなたたちならなんとかしてくれると信じてる。強敵相手だって、あなたたちなら勝ち目を見つけることができるでしょ

――とりあえずこの場は、わたしに任せなさい

希望は託されている。ミーナの想いは、ミソラの心に届いている。

「でも、いざっていうときはちゃんと勝てた。《崩力》を使う医療医学科の学生相手だってユーリさんと協力して倒したし、三位一体の変異種や前夜祭直後に遭遇した《アスモデウス》だって、ちゃんと倒してきた。なら、リーゼリットのような呪詛を使う《崩力》の使い手も勝算があるはずよ。だからこそ、負ける理由じゃなくて、勝つ方法を考えましょうよ」

ミーナは、必死にミソラに伝えようとしていた。

――誰かを護るために、諦めずに、必死に戦うことだと、お、思います……っ!?

――それこそがE601小隊であり、カナタ・エイジの背を追い続け、追い越そうとする、わたしたち空士の宿命よ……っ！

だからこそ、ミソラは小隊長として振る舞う。空戦武踏祭の出場者の中で、最も愚図で無能でお馬鹿な小隊長として、できることをする。

仲間たちを、びしっ！　と指さし、ミソラが言う。

「リコ、あんた頭はいいんだから、作戦の一つや二つ考えなさい」

「な……っ!?」

「レクティ。怖いと思うけど、次も戦ってもらうからよろしく」

「あ、あのぅ……ミ、ミソラさん……っ!?」

「ユーリさん。打開案があれば何でも言ってください。全部リコに考えさせます」

「え、ええ。それはわかりましたけど……」

「ブレア。とりあえずあんたは、乾パンでも食べときなさい。腹が減ったら戦えないわ」

「う、うむ。か、かたじけない……」

「ノエルさん。ぴーぴー文句ばっか言ってないで、勝つための方法を考えてください。ていうか、年上なんだから頭を使いなさいこのチビ虎……っ！」

「な、なによ……っ!?」

急な変化に戸惑う仲間たちを見渡し、ミソラがふてぶてしく言い放つ。

「で、誰かなんか打開案ないの？」

┌┐┌┐……（ええーーっ!?　なんか急にやさぐれすぎじゃ……）└┘└┘

リコたちが呆気に取られる中で、ノエルが吼える。

「紅チビ、さっきまでずっとへこんでいたくせに、いまさらどういうつもりよ」

「うっさい、反省してるって言ってるでしょ……！」

ミソラが吼え返した。しかも、あろうことか逆切れだ。彼女が反省していると言った言葉を聞いた者は、この場にはいない。

それでも、仲間たちは誰一人茶々を入れようとはしなかった。

「あのね、あたしはいままですごくしょうもないことで悩んでいたのよ。あいつが死んだんじゃないかとか、あたしがもっと周りに気を配っていればあいつが怪我をするのを防げたんじゃないかとか、あたしのせいで……あたしのせいで……」

言いながら、瞳に涙が浮かんできた。我慢しようとしても、あいつへの想いとともに涙が浮かんでくる。だが、ここで泣き崩れるような女々しい女に、空士は務まらない。ましてこの劣勢を覆す小隊長など、務まろうはずもない。

「でも、いくら考えても答えなんか出なかったわ。しかもいまはそんなくだらないことを考えてる状況じゃなくて、ミーナさんを助ける必要があるわけ。だからとっとと助けて、ばしっとリーゼリットを倒して、胸を張って《ベベル》に戻る。こんなところで無様に負けたら、あいつに合わせる貌がないでしょ……！」

仲間たちを前に、ミソラが言い放つ。

「だから、うだうだ悩むのはもう終わりにしたからっ！　みんな、あたしにチカラを貸してちょうだいっ！　あたしは小隊長をクビになってもいいから、どうしてもミーナさんを助けたいのっ！　お願い……っ！」

これまでの経緯を謝罪し、仲間たちに協力を募る。

お馬鹿なミソラにできることなど、この程度のことしかないのだ。

「ミソラ」

「なによ？」
「向こうを見てくれ」
臭っ先に口を開いたリコは、ミソラに暗闇に包まれた虚空を見るように言った。そしてミソラがリコから視線を離した直後、バシンっ！　と頬がひっぱたかれる。
え……っ!?　と呆気に取られたミソラが視線を戻す。そこには不快気に貌を歪めたリコの姿があった。
「ふっ、いい気味だ」
「リ、リコさん……っ！」
驚くユーリの声が耳に入る様子もなく、リコが言い放つ。
「いまさら何様のつもりだキミはっ！　このバトルロワイアルの最中、わたしが何度同じ趣旨の説明をしたと考えている……っ!?」
「そ、それは……」
がしっとミソラの肩を掴み、リコが激しく揺さぶってきた。
「ついでにさっき何度も声を上げたときは、発狂したと思ったぞ。いよいよE601小隊も終わりだとな」
「本当にごめん」
謝罪する以外ないミソラは、そのままリコの眼をしっかりと見据えた。するとリコがぷいっと視線を逸らし、素っ気なく口にする。
「今回だけは特別に赦してやる。キミを支えられなかったわたしにも、副隊長として非がないとは言いきれないからな。だが、またこんな失態をやらかしたら、そのときは即座にわたしが隊長になってやる。……それと、こんな半端なことで譲られる隊長の座などいらない。わたしの実力なら、いつでもその地位を取れるからな」
リコはレクティ達を見やると、
「みんなも思うところがあるだろう。もし赦せるのなら、不満の分だけぼこぼこにしていいぞ」
「ほ、本当にそのようなことをしてよいのか……っ!?」
「ああ。副隊長として許可する。好きにしろ」
確認したブレアに、リコが鷹揚と言い放った。
「そ、そのぅ……」

「で、では……」
「うぬ……」
レクティ、ユーリ、ブレアの三人は、ミソラのもとへと近づき、
「ミソラさん。カナタ先輩が負傷した責任を、勝手に自分のせいだけにしないでください。上級生ですから口にしませんでしたが、特務のわたしだって責任を感じてたんです……っ！」
と言って、ユーリがさっとピンタし、
「そのぅ……ミソラさん。わたし何度も励ましたのに、絶対話を聞いてませんでしたよね。空返事ばかりで相手にしてくれないなんて、ひ、酷いです……っ！」
と言って、レクティがちょこんとピンタし、
「ミソラ。そなたは、私がせっかく気を遣って、安全圏で偵察活動をしようとしたのに、人の好意を無下にしおって……っ！」
と言って、ブレアがずこんっ！　とミソラの頬を殴り飛ばす。その一撃をきっかけに、レクティたちのたがが外れたのか、ミソラへの不満が大爆発した。
「というか、カ、カナタ先輩が気になっているようですが、カナタ先輩はわたしのものですっ！　わ、わわわ、わたしなんて入学してから三年以上もカナタ先輩のことを思い続けてきたんですからね……っ!?」
「あのぅ……ミソラさんが急に声を張り上げたとき、もういつものミソラさんは戻ってこないのかと思って本当に心配したんですからね……っ！」
「ミソラの分際で、『とりあえずあんたは、乾パンでも食べときなさい』とは何様だっ！　私だけ扱いがぞんざいすぎであろう。味気ない乾パンなどこうしてくれるわ……っ！」
衝動に身を任せ、ユーリたちがミソラをぼこぼこにする。
数分後、そこにはユーリとレクティのピンタで両頬を赤く腫らし、ブレアから蹴たぐられた上に、口に溢れんばかりの乾パンを詰め込まれたミソラの姿があった。
「……流石にこれはやりすぎなんじゃないか？」
呆れたようにリコがつぶやいたが、他の仲間たちは、やけにすっきりしたという表情を浮かべている。気を取り直して、ミソラが問う。

「その……気は済んだ？」
「まあな。それにしてもまさか、ミソラにものを教わることになるとは……」
ミソラがいなければミーナを見捨てていたかもしれない、とリコが一瞬悔やむ表情をみせた。リコは仲間たちを見渡し、
「あの男と酷い別れ方をしたせいで、気後れしていたのは、ミソラだけじゃなくて、わたしたち全員だったのかもしれないな。……女神なわたしも、多少あの男の件が気になっていた」
「そのぅ……じつはわたしも」
「先輩なので言い辛いんですが、わたしもです」
「うぬ。私も同じだ。主がいないから、どこか心細くある」
だからこそ、士気こそ高いものの、いざ危機に陥ると必要以上に弱腰になっていた。そして、そのことを見抜いたミーナは、自分の赤裸々な恋話をしたり、カナタの過去の話をして、ミソラたちの士気を高め、導こうとしてくれていたのだ。
いまのミソラになら、そのことがわかる。
「あの男の教え子としては相応しくない行動だったな」
反省しながら、リコが語りかける。
「さあみんな、思い出せ。あの男はこの状況で諦めるような男だったか？　命を懸けてくれた仲間を見捨てるような男だったか？　ここでむざむざと退いて、敗北に甘んじる弱者だったか？　ミソラ。キミにとって、カナタ・エイジという存在はなんだ？」
「わたしにとって、あいつは……」
ミソラが想いの丈を綴る。
「……あいつは、尊敬できる人だと思う。どんなときも諦めなくて、最後まで自分の勝利を諦めなくて。それに、すごく格好いい」
「惚れているのか？」
「そ、そんなのわかんないわよ……っ!?」
カナタのことを考えると、胸の中が色んな想いではちきれそうになる。考えれば考えるだけ頭が一杯になって、

愛おしく、狂おしい気持ちに駆られてしまう。
こんな気持ちを表現する言葉は、ミソラの中には見当たらなかった。
「その……好きとか嫌いとかはまだよくわかんないけど」
それでも必死に自分の想いを伝えようとし、ミソラは急にしおらしくなると、
「でも、いまはあいつに胸を張って会えるようなあたしでいたいって思ったのよ。……あいつはいつも一生懸命だし、こんな状況でへこたれるわけないし。なっ!?　なにその貌は……っ!?」
ミソラが見やると、リコが不敵な笑みを浮かべて疑視していた。
「ふっ、なに。やはりミソラはお馬鹿だと改めて認識しただけだ」
「むきーーーっ！　あんたなんかに副隊長を頼んだのは間違いだったわ……っ！」
そう断ったあと、ミソラが恍けてみせる。
「でも、あたしが隊長してるくらいだからしょうがないっか」
直後に、どっと笑いが起こった。E601小隊の全員があははは と笑いながら、ミソラへ笑みを零している。
だからこそ、
「さてと。じゃあ、明日はミーナさんを助けに行くわよ」
ミソラの発言に首を横に振る者はいなかった。そんな中で、
「無理ね。助けに行けるわけないじゃない」
ノエルは頑なに反対し続ける。
「ミーナは人質なのよ。当然相手はこっちが奪還しに来ることを前提に罠を張ってるわ。しかも相手の力量と規模は、こっちより数段上よ。そんな強敵相手に、わざわざ姿を晒すなんてありえないわ」
「だから、このまま見捨てるっていうの……っ!?」
「見捨てる。《ファルシオン》の空士はそうやって強くなるわ」
苦肉の策と知りながらも、ノエルは譲らない。
「紅チビ。あなたがいい人だっていうのはよくわかるわ。でも、戦いの場で求められてるのは人間性じゃなくて、冷静な決断力なの。いまのわたしたちにこの状況を覆すチカラはないわ。人質の安全なんて度外視して、あの子供の不意を突いて倒すしかないの。敵の誘いに乗って、正面切って人質を助けに行くなんて愚の骨頂よ」

自分たちの為を思って言っているのだ、とミソラは思った。
議論が平行線を辿りかけたとき、おもむろにリコが口を開く。
「たしかにな。ノエルの言う通りだ」
「聞いたでしょ。あなたの小隊の副隊長のほうが冷静に状況を把握してるわ。ここは様子を見ながら、寝首を掻くしか……」
「リコ、どうしてもノエルさんの言う通りにするしかないの……っ!?」
「ああ。少なくともリーゼリットの土俵で戦うのは誤りだ」
しゅんとするミソラ。だが、リコの言葉にはまだ続きがあった。
「人質を助け、リーゼリットを倒すには相手の裏を掻く必要がある。それにはこの場の全員が協力するしかない」
「そ、それって……っ!?」
ふっと鼻で笑い、腕を組んだリコが颯爽と言い放つ。
「んっ、言わなかったか？　わたしには勝つ作戦がある」
バクリだっ!?　とミソラたちが一斉につっこんだ。

＊＊＊

空戦武闘祭二日目。夜。
第九人工空島。中央制御棟。指令室。
「ふふっ、ミーナ。気分はどう？」
「最悪ね。馴れ馴れしく名前で呼ばないでくれるかしら」
嬉々としたリーゼリットの視線を浴び、ミーナが不愉快そうに答えた。
気づいた時には戦闘でぼろぼろになった防護服を脱がされ、黒いドレスを着せられ、拘束されていた。よく自分の体型に合わせたものを用意できたものね、と問うと、呪力でいま作ったという返事があった。
事象干渉力としての質は、魔力より呪力のほうが上らしい。
ミーナは紐状の呪力で手を縛られた上で、天井から吊るされ、ろくに休むこともできない。

せめてもの幸いは、リーゼリットが戦闘後に治療を施してくれたことだろう。体にあった目立った傷は、あらかた処置を終えている。
「もーう。馴れ馴れしくなんてないよ。だって、ミーナはこれからわたしのペットになるんだから。それと、せっかく着替えさせてあげてたのに、むすっとしないの。ほら、笑って」
リーゼリットからお願いされたが、ミーナはにこりともせず俯く。このような悪ガキの言うことを聞くのは、騎士としての誇りが赦さなかった。
リーゼリットは、ミーナのお腹を、指でそっとなぞりあげてきた。
「いまね、ミーナの為の処刑台を《アスモデウス》たちに作らせてるの。明日ミソラたちを迎えるために、ちゃんと用意しないとね」
「……」
「ほらほら、なんか喋ってよミーナ。殺さずに捕まえたのに、遊びがいがないじゃないの」
「……いますぐ武装解除して、投降しなさい。こんなことを続けていても、すぐに《ベベル》本体の部隊に捕縛されるわ」
「ええー、《ベベル》本体にロクな部隊なんか残ってないよ。それに、その辺の人たちよりわたしのほうが強いのに、どうして投降しなくちゃいけないの？」
あまり我儘を言うと、本当に赦さないわよ……！　ミーナがきっと鋭い視線で、リーゼリットを睨みつけた。しかし、リーゼリットはふふっと笑い声を零したあと、
「残念。反抗的な態度を取る人には、罰を与えなければなりません」
そう言って、突如として、右手に黒い燐光を宿し始める。
「な、なにを……っ!?」
「決まってるじゃないの。ミソラたちを歓迎してあげる準備だよ。いまからね、ミーナの中に、スイッチを作るの」
「スイッチ……？」
「そう。わたしのペットになるスイッチ」
リーゼリットは、悪意のない微笑を浮かべた。
「本当はね、精神操作って言って、《アスモデウス》たちにみたいに呪力で刷り込みをするのが一番なんだけど、そ

れだと時間がかかるの。今日は用事が多いから、呪詛で処置してあげる。わたしがスイッチをつけたことは、ミーナ自身が気づけないようにしてあげるから、ミソラたちもきっとひっかかると思うよ」

リーゼリットは黒い燐光を注ぎ込んできた。

その直後、ミーナは自らの心が、黒い闇で塗り潰される感覚と同時に、脳髄を引き裂かれるような激痛が奔った。

ミソラさん、間違ってもリーゼリットの誘いに乗ってはダメよ……！　次の瞬間。夜の指令室に、ミーナの絶叫が響き渡った。

第四章　E601小隊のチカラ

空戦武踏祭三日目。午前九時頃。

第九人工空島。中央部。

そこには、周囲を固める八十体近くの《アスモデウス》と、木製の十字架に磔にされ、処刑台の上で黒いドレスを着させられたミーナと死刑執行役の《アマイモン》に、処刑台の下で妖艶な笑みを浮かべるリーゼリットの姿があった。

「よく来たわね、ミソラ」

「約束は守ったわ。ミーナさんを解放しなさい、リーゼリット」

「わたしの《アスモデウス》たちと戦うのが先よ。あなたたちには、前夜祭の晩に酔いことされたからその復讐をしてあげる」

密林から姿を現したミソラと仲間たちを見やり、リーゼリットが尋ねる。

「そんなことより、二人足りないわね。黒い髪のお姉ちゃんと、小人のお姉ちゃんはどこ？」

「その二人は……」

「リコさんはあなたとの交渉に反対して、密林の中にとどまっています。ノエルさんも同じです」

ミソラの言を遮り、ユーリが牽制するように言った。

「そう。まあ、いいわ。隠れて不意を打とうとしても、近くに《アスモデウス》たちを伏せてあるから。……じゃあ、残りはミソラたちを囲みなさい」

リーゼリットの指示に従い、《アスモデウス》たちが散開し出す。中央部の平地と密林との境界線上にもおり、ミソラたちを完全に逃さぬ構えであることを窺わせた。

磔にされたミーナが叫ぶ。

「逃げなさいミソラさん……っ!?」

ミーナさん、とミソラが胸中でつぶやいた。ミーナのお蔭で、自分がいま戦っていられることに心から感謝し、ミソラが粘り強く要求する。

「ミーナさんを解放するのが先よ。約束は守ったじゃないの」
「ええー。嫌だよ。ミーナはもうわたしの所有物なんだし」
「ふざけないでリーゼリットっ！　あなたのやっていることは犯罪よ……っ！」
「だからなに？　この世界で、いったい誰がわたしを罰することができるの？」
リーゼリットの言葉に、悪意はない。だが、善行であるという確信もまたない。
その言葉を聞き、やっぱりそうだ、とミソラは思う。リーゼリットはまだ善悪の区別がつかないほど、子供なのだ。
「じゃあミソラたちは、このまま武器を展開して《アスモデウス》たちと戦ってね。もし逃げようとしたら、ミーナに酷いことをするから」
リーゼリットの意思を汲んだかのように、傍らに控える《アマイモン》がミーナの喉元に、巨大な刀腕を向ける。
「わたしはいいから逃げて……っ!?」
「大丈夫ですミーナさん」
リーゼリットを睨みつけ、ミソラが言う。
「リーゼリット、あんたは戦う前から勝った気でいるんでしょうね」
「そうだよ。ミソラたちの実力じゃ、わたしのペットたちにすら敵わないもん」
「ペット、ね。リーゼリット、あんたは仲間と一緒に戦ったことある？」
「もちろん。《アスモデウス》たちがわたしの仲間だよ」
「ペットが仲間、ね」
仲間のことをペットと呼ぶ。仲間という言葉の重みを知らぬ敵を前に、ミソラは体の中から沸々と闘志が湧き上がるのを感じた。幾つかの死線をともに潜り抜けてきた、本物の仲間を持つ自分たちが負けていい相手ではない。
いや、絶対に負けてはならない。
魔砲剣を展開し、ミソラは切先をリーゼリットへ向ける。彼女の仲間たちも次々と戦闘態勢をとる。
「でも、その仲間たちじゃ、あたしたちには勝てないわ。降伏しなさい、リーゼリット」
「《アスモデウス》たちじゃ勝てないって？　ミソラ、あなたこの状況が見えて言っているの？　降伏するのはあなたよ」

「最後の警告よ。降伏しなさいリーゼリット」
両者が一歩も譲らず睨み合い、やがて――
「……わかったわ」
気圧されたようにリーゼリットは俯いたあと、嘲笑とともに貌をあげた。
「なんて言うわけないじゃないの。やりなさい《アスモデウス》……っ！」
方々から押し寄せる《アスモデウス》に対し、ミソラたちはすぐさま飛行魔術を発動した……！

＊＊＊

同時刻。第九人工空島。中央部付近の河川。
侵入者を警戒する《アスモデウス》が一瞬、河川を凝視する。物音が聞こえたような気がしたが、特に異常は見当たらない。その《アスモデウス》は密林からの敵の侵入を警戒するために、巡回を再開した。
《アスモデウス》の姿が遠ざかったあと、不意に河川から、水に濡れた黒髪の少女が貌を覗かせ、周囲の安全を確認。そのすぐあと、もう一人の仲間が河川の中から姿を現した。
「まさか河川に潜って、敵の警戒網を突破するなんて……っ!?」
「ふっ、この程度で驚かれては困る」
予想外の戦略に戸惑いながら、ノエルが息継ぎのための呼吸を整える。
中央部外縁を固める《アスモデウス》たちの注意は、ミソラたちと中央部を囲う密林へと向いている。リコはそれを計算した上で、河川の中を飛行魔術で泳ぎ抜け、中央部に位置する巨大湖へと侵入を試みているのだ。
だが、水の中を進むのは、想定よりも多くの時間がかかっていた。
「それにしても、この作戦の欠点はわたしが水に濡れることだな。敵の警戒を抜けて、絶好の狙撃ポジションを得るためとはいえ……」
「ほら、ぐずぐず言ってないで移動するわよ自称女神。もう戦闘が始まってるわ」
優秀かもしれないが、一癖も二癖もある仲間を、ノエルが急かす。リコが望む狙撃ポジションは、この先にある巨大湖の向こう岸。そこに移動しなければ、ミソラたちをサポートできない。

「どうしたの？　なにか問題が……」

一向に水中へ潜ろうとしないリコを見やり、ノエルが焦ったように尋ねた。

ここでリコの身に何かあれば、孤立無援で奮闘するミソラたちを支援できなくなってしまうから当然だ。責任感のある人間なら、誰もが焦りを覚えるこの状況で、しかしリコはしょうもないことを言う。

「むぅ、河底を泳いでいたからな。水草が髪に絡まった」

たしかにリコの髪には、櫛が刺さったように緑色の水草が絡まっている。だが、そんなことなどに、いまは構っている暇はない。

「こんなときになに言っているの、もう戦闘が始まってる。ふざけてないで急ぐわよ」

「水草がついていたら、わたしは狙撃に集中できない。取ってくれ」

「それくらい自分で取ればいいでしょ……っ！」

「女神なわたしは汚いものには触りたくないんだ。取るのは、サポート役であるキミの担当だろう」

「誰がサポート役よっっっ！」

こんな上から目線の子に自分たちの命運を託すなんて、紅チビたちは大丈夫かしら？　リコが重責を担うことを憂い、ノエルは不安になりながらも、大急ぎで髪に絡まった水草を取り始めた。

＊＊＊

第九人工空島。中央制御棟上空。

「通信結節が使えないから、距離を取りすぎると、敵中に孤立するわ。二人一組を崩さずに動いて。前衛がレクティとブレア、中衛があたしとユーリさん。足を止めずに戦闘して、敵陣を掻き乱してちょうだい……っ！」

ミソラたちを追随して上昇してくるリーゼリットたちを見やり、ミソラが素早く指示を下す。地上には、《アマイモン》とミーナに加え、まだ十数体の《アスモデウス》が控えている。おそらくリーゼリットは、地上からも攻撃する意図があるのだ。

「レクティ、ブレア。二人で敵の薄いところを突き崩して。相手の出方を確かめるわ」

「は、はいっ！　任せてください……っ！」

「うぬ。この戦だけは負けるわけには行かぬな」

「ユーリさん。あたしは天地方向から接近する《アスモデウス》に砲撃しますから、ユーリさんは――」

「心得ています。基本は、ミソラさんの護衛。あとは状況を見て、自由に動かさせてもらいます」

ミソラが全員に指示を与えた直後、地上にいる《アマイモン》が、突如として巨大な咆哮をあげる。その咆哮が鳴り響くや否や、宙を舞う《アスモデウス》たちが腕を刀腕へと変化させ、全方位から接近して来た。

「ミ、ミソラさん、ユーリさんっ!?　つ、ついてきてくださいね……っ!?」

「うぬ。敵の数が多いからな、最初から飛ばしていくぞ」

ミソラたちを四方八方から攻めたてようとする《アスモデウス》たちに対し、レクティとブレアの二人前衛が斬り込む。彼女たちは、《アスモデウス》の斬撃を軽やかに躱しながら、容赦なく敵の刀腕を、頸部を切断していく。刃を交える度、魔力を奪われ、こちらが消耗する。ゆえに二人は躱しながらの反撃に重点を置いていた。前夜祭の晩では、ミソラの魔力を使った誘爆の連鎖で《アスモデウス》たちを殲滅したが、同じ手が通じる相手とは思えない。

「伸びきった関節は、硬度の上からでも斬り落とせます」

「反応速度は優れていても、戦闘技術は粗削りである」

連戦を経て、すでに《アスモデウス》の弱点を把握していた。素体が《ベベル》の市民である《アスモデウス》は、アイゼナッハ流のような洗練された戦闘技術がない。

敵の急所を把握し、落ち着いて対処すれば、斬れない敵ではないのだ。

「終わりです……っ！」

戦闘力を失った《アスモデウス》の後退を赦さず、後続のユーリが槍撃で仕留める。三体一組でチームを組む《アスモデウス》たちの連携も、この三人なら充分に対処できる。さらに、間合いを取って正十二面体の形で包囲しようとする《アスモデウス》たちには、

「あの黒い電流は使わせないわ……っ！」

ミソラが容赦なく砲撃を浴びせた。

これならいける……っ！　勢いよく敵を蹂躙するミソラの砲撃の勢いが増す。《アスモデウス》の包囲が完成する前に突撃した結果、敵の連携が明らかに乱れた。

「このまま《アスモデウス》の数を減らすわっ！　みんな、この調子でお願い……っ！」
一体、また一体。《アスモデウス》たちに陣形を立て直す間を与えず、ミソラたちが少しずつ敵を撃墜していく。
地上にいるリーゼリットを一瞥し、ミソラが眼で語る。
ミーナさんを人質にするようなあんたに、負けるわけにはいかない……っ！

第九人工空島。中央制御棟付近。
上空で戦闘するミソラたちを見やり、リーゼリットがつぶやく。
「ふーん。さすがに前夜祭の晩みたいにはいかないか」
顎に手をやりながら、リーゼリットは思う。《アスモデウス》のチカラが分析されているわね。いまのままだと、こっちがじり貧かも。
「思い通りにかなくて残念ね、いい気味だわ」
リーゼリットが声のしたほうを見ると、礫にされたミーナの姿があった。
「本当にそう思う？　ミソラたちがわたしたちのことを知ったっていうことは、わたしたちもミソラたちのことを知ったっていうことなんだよ」
「なにを考えているの？」
「ミソラたちはどうせ負けるから、最後ぐらい思い出を作らせてあげようと思って。ミソラたちがここに来た時点で、わたしの勝ちは決まったようなものだし」
何か考え始めたミーナから視線を移し、リーゼリットは地上に残った《アスモデウス》の一体を呼ぶ。
「お前はこっちで、《アマイモン》の代わりにミーナを見張っていなさい。……ミーナ、あなたはわたしの強さを見届けるといいわ」
そう言って、リーゼリットは静かに《崩力》を発動する。その手から黒い燐光が零れていることに気づき、ミーナが思わずつぶやく。
「ま、まさか……っ!?」
「ふふっ、せっかくミソラたちが誘いに乗ってくれたんだもん。歓迎パーティーを用意してるに決まってるじゃな

いの」
《アマイモン》を連れ立って、リーゼリットが空へと上がる。急降下して来た《アスモデウス》に躁しざまに砲撃を浴びせたミソラと眼が合った。
「ミソラ、面白いものをみせてあげる」
小悪魔的な笑みを零し、リーゼリットは、両手に宿した黒い燐光の塊を、飛行魔術の変成技で、一気に、霧のように拡散させる。
「さあ感じなさい、《アスモデウス》たち……っ！」
霧散した黒い呪詛――反魂の錯乱は苦戦する《アスモデウス》たちに浸透し、チカラと化す。《アスモデウス》たちは硬皮に僅かな突起が生まれ、巨大化しながらより筋肉質になる。《アマイモン》には及ばないものの、凄みが増した。
「じゃあ、これからは《ベヘモス》たちの指揮は、わたしが執るわ。《アマイモン》、みんなに指示してちょうだい。まずは――」
続くリーゼリットの言を聞き、傍らに控える《アマイモン》が巨大な咆哮をあげる。
その直後、戦いの流れが変わった……！

第九人工空島。中央制御棟上空。
「呪詛で全体を強化するなんて……っ!?」
リーゼリットの打ってきた手に、ミソラが苦悩する。
「て、敵の動きがまた一段と速く……っ!?」
「これは……」筋縄では行かぬな」
前衛のレクティとブレアが、《アスモデウス》の強化体――《ベヘモス》相手に苦戦し出す。リーゼリットの傍らに控える《アマイモン》ほどではないにせよ、呪詛で全体が強化されたのは厄介だ。
従来までの三体一組の《アスモデウス》が相手なら、レクティとブレアが攻撃後、すぐさまユーリが止めの一撃という流れを作れた。

しかし、《ベヘモス》たちは、レクティとブレアの突破力を跳ね返してみせる。しかも、レクティとブレアがそれぞれ《ベヘモス》たちと互角に戦っている間に、残った一体が前衛二人を潰しにかかる始末だ。

「ブ、ブレアさんっ!?　ここは一度……っ!?」

「うぬ。全方で後退して、敵との当たり方を仕切り直すぞ」

《ベヘモス》たちを容易く突破できない、と判断したレクティとブレアが退く。すると忽ち《アマイモン》の咆哮が響き渡り、一気に《ベヘモス》たちが距離を詰めてきた。ユーリが警告を発する。

「ミソラさん。レクティさんとブレアさんが……っ!?」

強固な敵集団に、四方八方から追られ、ミソラが焦燥に駆られる。

くっ!?　リーゼリットが空に上がってきた直後から、Ｅ６０１小隊の機動力が削がれ始めたっ!?　このままじゃまずい……っ!?

少しでも戦いの流れを変える為、ミソラは《ベヘモス》の包囲の向こうにいるリーゼリットに狙いを定め、発砲した。

だが、リーゼリットは白銀色の砲撃に気づきながらも微動だにせず、チカラの差を見せつけるように《崩力》の障壁で防ぐ。言葉の届かぬ距離で、リーゼリットの虫けらでも見下すような視線が、ミソラへ向けられた。

リーゼリットの唇が動く。

――早く降参したら。どうせわたしの勝ちは動かないんだし

ミソラは唇を読めないが、リーゼリットがなんと言ったかは不思議と伝わった。《崩力》を前にして、ミソラたちのチカラが微々たるものであることは承知している。だが、

「甘く見ないでっ！　一時的に優勢になっただけじゃないの……っ！」

ミソラは前方へ数発発砲。レクティとブレアの後退を援護し、さらに――

「ユーリさん、お願いします……っ！」

「ええ。いままで中衛で休ませてもらっていた分、頑張らせて頂きます……っ！」

ミソラは温存していたユーリを、前衛に投入。〈トリシューラ〉で《ベヘモス》を素早く処分させる。

「はあああ……っ！」

ユーリの槍撃の連打が、迫り来る敵を次々と斬り裂いていく。堅牢な硬皮をものともせず、刺突し、薙ぎ払い、黒煙を粉砕する。強化された敵をものともしない。

「このまま敵の数を減らします……っ！」

来ないならこちらから行く、とばかりにユーリは怯んだ敵へ接近。満を持して槍撃を繰り出すと、あらぬ事態に見舞われることになる。

「は、離れない……っ!?」

ユーリの槍撃で深々と貫かれた《ベヘモス》が、魔槍の柄を摑んだまま離さないのだ。胴体を貫通されているにもかかわらず、柄だけを必死に摑み固める。

続く槍撃の放てぬユーリのもとへ、《ベヘモス》たちが迫った。

「ユーリさん……っ！」

危険を察したミソラが接近しながら、砲撃。二発の命中弾を浴びせ、〈トリシューラ〉に纏わりつく《ベヘモス》を排除。しかし、ユーリの槍撃へ対応できたことで、敵が完全に勢いづいた。

三体一組の《ベヘモス》たちに包囲され、ミソラたちの動きが止まる。このままじゃ、この敵は倒せない……っ!?　強引に戦況を覆そうと、切迫した表情でミソラが魔砲剣を腰だめに構える。戦技の一撃で、正面にいる敵だけでも殲滅できれば……

「収束魔砲も、わたしとこの子で弾いてみせるから、怖くないよ」

ミソラの砲撃気配を察知したリーゼリットと《アマイモン》が立ち塞がる。

「く……っ!?」

これじゃ敵の数を減らせない、とミソラが収束魔砲の発動を中止した。

「どうするミソラ？　そろそろ諦める？」

「黙りなさいリーゼリット……っ！」

リーゼリットが空に上がってきてから、敵の動きが変わった。指揮官であるリーゼリットの指示を受け、状況対処方が格段に上がったこの状況を覆すには、リーゼリットの予想を超え、《ベヘモス》たちの意表を突く必要がある。

レクティとブレアの連携攻撃も、ユーリさんの槍撃も、あたしの収束魔砲も通じない相手をどうやって倒す？

果たして倒せるのか？　――いや、倒す手はある。

「みんな、聞いてちょうだい。このままだと、あたしたちが墜ちる。相手の動きを牽制しながら、徐々に高度を落として、地面すれすれを低空飛行。極力敵から攻めづらくして、攻勢転移の機を窺うわ。ユーリさんを基点に、レクティとブレアで左右を固めて。後ろにあたしがつく。本来の前衛三人組だけど、正面の敵だけを相手にすることを忘れないで」

ミソラの指示に、仲間たちがすぐさま従う。

「地上方向にいる子たちはミソラたちに場所を譲って、逃がさないように周囲を固めてちょうだい。他の子は、ミソラたちの動きに合わせてゆっくりと降下。半包囲を維持するのよ」

リーゼリットもすぐさま対応してきた。《ベヘモス》たちの動きには、隙がない。《ベヘモス》たちは獲物を弱らせ、隙を窺うハイエナのように、ミソラたちの周辺を飛び交っている。

いまあたしたちは完全に詰まされている。この状況をあたしたちのチカラで覆すのは絶対に不可能に見える。だからこそ――あの手が使える。

「みんな、そろそろ合図を出すわ。援護をお願い」

脅威への警戒を仲間たちに任せ、ミソラは懐に手を伸ばし、一挺の信号拳銃を取り出す。お守りとして、ミーナから預かったものだ。

「ふふっ、そんな玩具で何をするの？　終わりが見えたわねミソラ」

明らかに疲弊するミソラたちを見やり、リーゼリットが無邪気に微笑んだ。

同時刻。巨大湖。

「あなたが文句を言うせいで、遅れたじゃないの……っ！」

「仕方ないだろう。水草が髪に絡まったんだ」

砂利が敷かれた浅瀬へ辿り着き、リコは身を屈めたまま息を潜める。彼女たち視界には、空中と地上に展開する、無数の《ベヘモス》たちの姿があった。空中を舞う敵の隙間からは、制空権を握られ、徐々に地表へと降下していくミソラたちの姿も垣間見えた。

「紅チビたちは劣勢のようね」

「ああ。もうすぐ物量に呑みこまれるな」

そう言ってリコは屈んだ姿勢のまま魔銃を展開し、膝撃ちの構えを取った。照準は、ミソラたちの頭上を抑える敵のさらに上、虚空だ。これから放つ戦技の特性上、直接照準では、痛打を与えるのに有効な距離が取れないのだ。

「そろそろ合図を出す頃合いだろう。ミソラたちの動きにつられ、敵も高度を下げている」

「そうね。制空飛行するミソラたちを撃つために、敵も地上すれすれに展開し始めた。これなら敵の上空援護は最小限になるから、こちらの攻撃も迎撃され辛いわ。しかも、敵はまだわたしたちの侵入に気づいてない」

ノエルの言を聞きながら、リコは眼を瞑った。三位一体の変異種との戦闘後、あの技能の発動確率はぐっと上がっている。

しかも、今回は敵に補捉されておらず、集中力を高めるには充分すぎる環境だ。

ちょうどそのとき、リーゼリットと対峙するミソラが信号拳銃の引き金を絞った。発射された照明弾は、上空へ高々と舞い上がると、オレンジ色の眩い閃光を発しながら、緩やかに降下し始める。

「紅チビから照明弾が上がったわ。攻撃開始の合図よ」

目を閉じ集中力を高めるリコへ、ノエルの厳しい声が聞こえる。

「自称女神、準備はいい？」

「ふっ、問題ない」

そう言って、ぱっと眼を見開いたリコの瞳は、仙人のように澄んだ眼差しをしていた。時間と空間の概念すら支配下に置き、森羅万象を見据えられる瞳――〝神憑き〟だ。

ノエルが問いかけてくる。

「視えてるの？」

「ああ。敵の配置も、上空を舞うドローンたちの軌道も、地下構造体もな」

リコはありとあらゆる角度から、ミソラがいる空間を見渡す感覚を覚えていた。リコの視界には、本来なら直視できぬ因果の理が、膨大な情報が濁流のように押し寄せ、時が止まり、そして高高度から俯瞰した敵の配置が映り、幾つかの側面から覗いた敵の配置が映った。上空を舞うドローンたちの動きと、複合構造の地表プレートの下にある、貯水槽の構造が露わになり、途方もない情報の処理に、脳は悲鳴を上げる。

しかし、覚悟を固めたリコは揺るがず、狙撃の儀式を継続する。

視えるはずのない敵の姿を視て、必要な弾道をイメージする。

そこに偶然は存在しない。全てを統べるその神の瞳は、時間の前後と空間の向こう側すら掌握している。先程まで何もなかったはずの虚空には、無数の光の軌跡が映る。それら一つ一つが、標的を穿つための魔力弾の道筋だ。

捉えた……っ！

あらゆる魔力弾が、敵を捉える姿を見てから、リコが引き金を絞る。

魔統戦技――多弾頭弾幕滅雨

リコの魔統から撃ち上がった一発の巨大な魔力弾は、人工空島中央部を見下ろせる位置へと到達。上空で四回分裂し、合計二五六発の青白い弾雨となって、ミソラたちがいる空間へと降り注ごうとする。結果を見届けるより先に、リコが静かに言い放つ。

「行け、反撃開始だ」

「了解……っ！」

その直後、ノエルが戦場に突っ込んだ。

第九人工空島。中央制御棟付近。

「攻撃？　湖面から……？」

突如として撃ち上がった巨大な魔力弾を見やり、リーゼリットが怪訝そうにつぶやく。

「密林との境界に配置していた《アスモデウス》たちの警戒網をすり抜けたの？」

「いまよみんなっ！　散開……っ！」

突然の支援射撃に呼応し、ミソラたちが散り散りになった。

小隊編成を解し、個々人で《ベヘモス》の包囲を掻い潜ろうとする。

その直後、上空にある魔力弾がばっと弾け、青白い弾雨となり降り注いだ。

呪術障壁を展開しながら、リーゼリットはミソラたちを嘲笑う。

「あの攻撃は命中精度が低いわ。《ベヘモス》たちは構わずミソラを追尾して」

前夜祭の晩に、リーゼリットは多弾頭弾幕滅雨を目撃しており、その弾雨の脅威度も心得ている。あの戦技は命中精度が低い。それに、仮に命中したところで、《ベヘモス》たちの致命傷にはなりがたい。

弾着直前に、リーゼリットは余裕の表情で呪術障壁を張りながら、

「残念でした。その戦技は一度見たけど、わたしたちの脅威には――」

ならない、と言いかけ、驚愕に言葉を失った。

なぜなら青白い弾雨が、正確に、寸分の狂いなく、全てが独自の弾道を描きながら、匍匐飛行する《ベヘモス》たちの動きを読み切ったかのように降り注いだのだ。ミソラたちを無防備に追撃する《ベヘモス》の頭部、体内にある見えないはずの黒晶、脆弱な関節部など、全ての要所を。針の穴を通すような精度で、正確に。

さらに不幸なことは、中央制御棟上空を舞っていたドローンたちも一斉に破壊されてしまったことである。これで通信妨害がなくなった。

「う、うそ……っ!?」

狙撃の神を敵に回したかのような惨状に、リーゼリットが眼を瞠っていた。

《ベヘモス》たちの対応は、リーゼリットが高を括ったことで、対応が後手に回り、回避が間に合わず腕で防御する個体や、青白い魔力弾数発に頭部を直撃され、撃破される個体が続出。あれだけいた《ベヘモス》たちが、三、四十体以上も粉砕されてしまった。一瞬の判断ミスで、半数近くが撃破されてしまった計算だ。

湖面からじゃ《ベヘモス》たちの配置を把握できないはずなのに。衒瞰もせずに、どうやってこんな神がかった狙撃を……っ!?

何の前触れもなく湖面に現れた魔弾の射手――リコ・フラメルを、リーゼリットが畏敬の念を持って睨みつけた。

第九人工空島。中央制御棟付近。

『ふっ、どうだミソラ。完璧だろう？』

『ええ、最高よリコ……っ！』

通信が回復したことを認識しつつ、ミソラはミーナがいる処刑台めがけて、単独で飛行した。眼前に立ち塞がった《ベヘモス》には、容赦なく発砲。一撃で撃破。リコの多弾頭弾幕滅雨のダメージが残っていたのだろう。

ここまでは予定通り……っ！

リーゼリットたちに空戦を挑み、圧倒されたのは想定内だ。結果として、ミソラたちは自然な形で地上へ追い詰められ、追撃するリーゼリット側の戦力を地上付近へ誘導。リコの戦技の効果範囲内に敵を収められた。

仮に《ベヘモス》たちの姿が、もっと高高度――空中にあれば、激しい立体機動を駆使され、〝神憑き〟といえど、こうまで命中弾を繰り出すことは困難だったに違いない。

そしてこれからが――勝負どころだ。

『行くわよ……っ！』

混乱する《ベヘモス》たちの包囲をすり抜けようとするミソラ。しかしそこへ、激高したリーゼリットと《アマイモン》が舞い降りてきた。

「やってくれたわねミソラっ！　でも――」

リーゼリットの言動を、ミソラが冷静に分析する。

分裂したなら、誰を狙う？　あたしか？　――いや、あたしたち全員だ。

「絶対に逃がさないわっ！　全員近くにいる標的を必ず捕まえるのよ……っ！」

リコの奇襲に構わず、強固な肉体を持つ《ベヘモス》たちが動く。高速再生が間に合わず、肉体が欠損しているにもかかわらず、ミソラを追撃する。

「みんな、捕まっちゃダメよ……っ！』

混戦の最中、姿が見えぬ仲間たちを鼓舞し、ミソラは幻想加速を駆使。《ベヘモス》たちとリーゼリットの隙間を抜け、ミーナのいる処刑台へ急ぐ。しかし、

「逃がさないって言ったでしょ……っ！」

リーゼリットが紐状にした呪力を、ミソラへ放つ。それは、逃げようとするミソラの足首に絡みついた。

くっ!?　もう少しで、ミーナさんのところに……っ!?

ミーナを前にして、救えぬもどかしさに、ミソラが下唇を噛みしめる。その焦燥を突き、

「いまよ、やりなさい……っ！」

リーゼリットは、《アマイモン》に攻撃を命じた。

巨大な刀腕を振りかざす、巨体が迫る。ミソラが砲撃を放つが、強靭な硬皮の前に容易く弾かれた。攻撃が通じない……っ!?　ミソラの華奢な体が、巨大な刀腕で一刀両断されようとしたとき――

『させるかっていうの……っ！』

魔剣戦技――螺旋龍風破

必殺の一撃を浴びせ、《アマイモン》を吹き飛ばした。巨大な刀腕が左手の付け根から一瞬で弾け、《アマイモン》自身も地面へめり込むように吹っ飛ぶ。

『ノエルさん……っ!?』

『紅チビ、ここは貸しにしておいてやるわ』

不機嫌そうな細眼で、ノエルはリーゼリットを見やり、

『この子供には借りがあったところだし』

『邪魔だよ小人のお姉ちゃん。他所へ行って』

『それはいいことを聞いたわ。わたしの愉しみは、あなたたちに嫌がらせすることなの』

そう言って、ノエルは魔剣を握りしめ、交戦を開始。リーゼリットと地面から起き上がった《アマイモン》を相手に、大立ち回りをかます。

その間にミソラは、ミーナのもとへ急ぐ。処刑台が視界に入った。

「ミソラさん。わたしのことはいいから、すぐに逃げなさいっ！　《アスモデウス》たちの動きが乱れているうちに早く……っ！」

ミーナの肉声が聞こえた。処刑台の周囲にいる敵は、思ったより随分少ない。分散した仲間たちが、敵の注意を引きつけてくれているお陰だ。眼前に二体の《ベヘモス》が立ち塞がる。邪魔よ……っ！　ミソラが砲撃を三射。手前にいた敵に二発、奥にいた敵に一発命中。撃破。ミソラの接近を探知し、処刑役の《ベヘモス》はミーナへ刀腕を振り下ろそうとする。だが、

『させないっ！　リコ……っ！』

『心得ている』

遠方から青白い魔力弾が飛来し、処刑役の《ベヘモス》の背に炸裂する。その間に、ミソラが至近距離へと迫り、発砲。胴体を穿たれた《ベヘモス》は、刀腕を振りかざした姿勢のまま、仰向けに倒れた。

『ミーナさん、大丈夫ですか？』

ようやく……ここまで辿り着けた。ミソラは案じるように声をかけ、素早く魔砲剣を振り、ミーナの拘束を切断する。

『逃げますミーナさん……っ！』

「ミソラさん、こんな無茶をして……」

口ではそういいながらも、ミーナの表情からは、頼もしいミソラへの感謝が滲み出ていた。拘束のせいで体力が尽きかけていたミーナに、ミソラが肩を貸す。

会話の利便性を考え、通信結晶も耳につけさせた。

『みんな、一点突破で逃げるわ。集合してちょうだい……っ！』

散開して敵の注意を引きつけていたレクティたちが集まり出す。

同時に、レクティたちを追尾していた敵もミソラのもとへ集まり出した。

「そう簡単に逃がさないわ。包囲の輪を縮めて、一気に襲いかかりなさい……っ！」

リーゼリットの指示を受け、《ベヘモス》たちがじわじわと距離を詰めてくる。確実に仕留められる間合いに入ったら、一斉に間合いを詰めることだろう。

敵の圧力に負け、ミソラたちは背中合わせの距離まで押し込まれた。

ミーナが差し迫った声で告げる。

『ミソラさん、リーゼリットが来るわ……っ！』

『大丈夫です、策があります。……リコ、場所は……っ!?』

『キミから見てちょうど十二時、距離七、八メートルところだ』

土壌に覆われただけの地面を、ミソラは確認し、小声で囁く。

『わかった。……みんな、例のやつで行くわよ』

そんな中、《ベヘモス》たちの包囲を割り、リーゼリットと《アマイモン》が姿を現した。

「さて。とうとう手詰まりだけど、まだ続けるの？」

『どうかしらね』

不機嫌そうな半眼で答えたのは、ノエルだ。

「へえー、小人のお姉ちゃんはもっと合理主義だと思ってたわ。《ファルシオン》は戦況判断についてはシビアっていう話だったけど」

『ええ、シビアよ。でも、戦うの』

ノエルの答えを聞き、リーゼリットが一瞬きょとんとしたあと、小馬鹿にするように笑い声を出した。しかし、

『わからぬようであるな、リーゼリットとやら』

『わ、わたしたちは勝てない戦いはしない主義なんです』

『ええ。それがＥ６０１小隊です』

「だから？」

意味がわからないといった様子のリーゼリットに、ミソラが言い放つ。

『あんたたちじゃ、あたしたちに勝てないってことよ……っ！』

「どう足掻いてもこれで終わりよ。かかりなさい……っ！」

《ベヘモス》たちが群りかかる。地上と空中からの半包囲を一気に縮められ、ミソラたちに逃げ場はないように見えた。だが、ミソラたちの貌に恐怖はない。

『みんな、行くわよ……っ！』

圧力に押されるようにして密集していたミソラたちは、僅かに浮遊するミソラとユーリを中心にして、レクティ、ブレア、ノエル、ミーナの四人が体を押し込むように寄せ、全員で一発の砲弾のような形になる。そして全員同時に飛行魔術を発動。ユーリは〈トリシューラ〉の推力も使い、密集したままで、勢いよく直上へ逃れようとする。

仲間たちと飛行魔術の推力を合わせ、一気に加速する陣形。

――緊急加速陣だ。

「そんな小細工ばかりしてっ！　追い駆けなさい《ベヘ――》」

『遅いわ……っ！』

リーゼリットの言を遮り、急上昇中のミソラが魔力充填済みの白銀色の魔砲剣を構え、引き金を絞る。

魔砲剣戦技――収束魔砲

白銀色の光の奔流が、《ベヘモス》たちに向けて放たれ……否。その光の奔流は、リーゼリットの手前にある大地を貫き、地下へと貫通した。《アスモデウス》たちにさえ当たらぬ的外れの攻撃を、リーゼリットが嘲笑う。

「どこを狙ってるのよっ!?　狙いがまるで……」

言いかけ、地面が揺れていることに気づき、リーゼリットの貌が不吉に歪む。

「な、なにこの地鳴りはっ!?　ま、まさかっ!?　み、みんな、離れなさい……っ!?」

リーゼリットは即座に《崩力》で強化した呪術障壁を展開した。

その直後、地面を構成していたプレートの内側から鈍くくぐもった轟音がし、一瞬でひしゃげ上がったと思った刹那、地下からものすごい勢いの、巨大で、強烈な、白い爆発が噴出する。その白い爆発は音速を超える衝撃波を伴って、瞬く間に地上付近にいた全ての敵を切り刻みながら、呑み込んだ。

第九人工空島。中央制御棟上空。

「よしっ！　計算通り……っ！」

一瞬で白く濃密な煙霧に包まれた地上を見やり、ミソラが小さくガッツポーズをする。収束魔砲の直撃による、熱エネルギーの局所的な解放によって生み出された上昇気流とキノコ雲が、ミソラたちのいる空まで届いていた。

状況の飲めぬミーナはこう問いかける。

「い、一体何をしたのっ!?　これだけの規模の爆発を引き起こすなんて……っ!?」

「水蒸気爆発を引き起こしたんです」

きょとんとするノエルに、ミソラが説明する。

「リコが〝神懸き〟でこの人工空島の河川の水を管理、循環する地下貯水槽を透視して、そこにあたしが収束魔砲を叩き込みました」

膨大なエネルギーは、水を一瞬で蒸発させて、千倍以上の体積に膨れ上がらせる。それらは高圧で噴射する水蒸

気となって、地上のプレートごと《ベヘモス》たちを吹き飛ばしたのだ。

一歩間違えれば、人工空島に致命傷を及ぼしかねない行為に、ミーナは一瞬呆気に取られたあと、上擦った声で、

「ず、ずいぶんとスケールが大きい作戦ねっ!?　こ、これは誰の策かしらっ!?　ノエルさんの策……っ!?」

すると、近くで不機嫌そうな半眼をしたノエルが反論する。

「心外ね乳デカ女。勤勉な《ファルシオン》の学生は、自然破壊を前提とする策は用いないわ。そもそも、わたしはこんな危険な発想をする女じゃない……っ！」

「えっ!?　ノエルさんじゃないのっ!?　じゃ、じゃあ誰がこんな剛胆たりな策を……」

「ふっ、決まっているだろう。次期空戦魔導士科長と名高きわたしだ」

ミソラたちの上昇と連動し、空へ上がっていたリコが胸を張った。

「えっ!?　リ、リコさんが考えたの……っ!?」

素っ頓狂な声を上げるミーナ。もう何が何だかよくわからないのだろう。リコは女神を自称するあたり、あれな子だと思われていたようだが、予想よりももっと深刻な子と認識を改められたらしい。

だが、そんなリコの策が、反撃の狼煙になっている。リコを副隊長にしてよかった、とミソラは心底思う。まるで頭の作りが違うのだ。その発想も、スケールも、着眼点も、常人は考えもしないだろう。

「こらこらリコさん。本気で言ってるのはわかりますが、自重してください」

良識派のユーリが諫めるが、水蒸気爆発を咎める様子はない。

「あのぅ……ミーナさん。ご無事でなによりです。お蔭で、ミソラさんも元気になりました」

「うぬ。ミーナ先輩も機会があれば、ミソラにビンタをどうぞ」

レクティとブレアが救出されたばかりのミーナを気遣う。

「ちょ、ちょっとブレアっ!?　あんたなんてこと言うのよ……っ!?」

慌てふためいたミソラがツッコむと、ミーナは思わず『ふふっ』と微笑を零した。

「本当にありがとう。さっきの戦い、素晴らしかったわ。Ｅ６０１小隊らしい、見事な戦い振りだった」

「ミーナさん」

疲労されたミソラが、感極まった貌をする。

「助かったわミソラさん。本当にありがとう」

『どうってことはありません。あたしもミーナさんのお陰で、大事なことを思い出せました』
「そう。本当によかったわ』
疲れているミソラの肩をミーナが不意にぱっぱっと叩き、怪訝顔をするミソラに教える。
『わたしの故郷じゃ悪いものが憑かれた子にはこうやって肩を叩く。すると、もう悪いものに憑かれないっていうおまじないがあるの。いまのミソラさんは、憑きものが落ちてさっぱりした貌をしているから、きっと何があっても大丈夫ね』
『はい、あたしもそう思います』
騙りでも、自惚れでもなく、ミソラはそう思っていた。この仲間たちといれば、どんな障害でも乗り越えられる、と。
だからこそ、これから起きる惨劇など微塵も予想していなかった……
『では、この黄昏色の障壁を発生させる装置を破壊に向かうぞ。中央制御棟の施設内に、それらしき黒箱を見つけた。これから処分に……』
と言いかけた直後、地上から何かが急上昇してきた。
『リーゼリット……っ!?』
「やってくれたわね、ミソラのくせに……っ！」
忌々しげに唇を歪めたリーゼリットと《アマイモン》の姿があった。
水蒸気爆発を耐え抜いた強力な敵相手に、ミソラたちは素早く身構える。
「でも、初撃でわたしを倒せなかった以上、あなたたちの負けよ。わたしが警戒してしまっている以上、もう不意打ちは通じないもの。それに、あなたたちはミーナを助けに来た時点で、わたしの術中に嵌っているわ」
『そんなことを言っても、わたしはもう救出されたわよ。ミソラさんたちの策に嵌ったのは、あなたでしょう』
『そうよ。リーゼリット。もう無駄な抵抗はやめて、投降しなさい……っ！』
魔戦斧を構えたミーナと、魔砲剣を握るミソラが事実を突きつける。
しかし、リーゼリットは意外そうに眼を細めた。
『なにを勘違いしているのミソラ？　投降するのは、あなたたちのほうよ』
『リーゼリット、ここにきて悪あがきしても……』

『悪あがき？　ねえ、ひょっとして本当に《ベヘモス》たちを全滅させただけで、わたしの呪詛――反魂の錯乱を破ったつもりでいるの？』
『でも、あんたにはもう操る魔甲蟲が、その一体しかいないじゃないの……っ！』
「ううん。違うよ」
身構えるミソラたちに、リーゼリットが無邪気に指摘する。
『反魂の錯乱で操れるのは、魔甲蟲じゃなくて、意志のある存在だよ』
『意志のある存在……？』
そうミソラがつぶやくのを聞き、リコが思わず声をあげる。
『まさかっ!?　いや、だが、そんなことが……っ!?』
「ふーん。黒い髪のお姉ちゃんは、気づいたみたいだね」
リーゼリットが問う。
「ねえミソラ、この第九人工空高で、空戦武踏祭の参加者たちの遺体を見たことはある？　あのね、わたしは《ベヘモス》たちに誰一人殺させてはいないんだよ」
『それってっ!?　ま、まさか……っ!?』
「残念でした！　今回のわたしのペットは、《ベヘモス》だけじゃありません」
その直後、《アマイモン》が壁大な唸り声をあげた。
呪詛を起動させるトリガーとなるそれは、中央制御棟に捕らわれ、呪詛で思考を奪われていた代表小隊の学生たちのもとへ響く。
地上にある中央制御棟の中から、百人以上の空士が素早く飛び出し、空へと上がってくる。虚ろな眼をし、手足や胴体など体の一部に黒い卵型のブローチを宿した空戦武踏祭の参加者たちが、瞬く間に上空からミソラたちを包囲する。
『空戦武踏祭の代表小隊が操られるなんて……っ!?』
『せっかく好転したと思ってたのに、ツイてないわね』
ユーリが驚愕し、ノエルが嘆く。
《ベヘモス》戦の影響で蓄積された疲労が色濃く現れ、チームの士気を削いでるのだ。

ここから百人以上の空士を相手に、しかも全員を殺すことなく無力化するのは、不可能という他ない。
『諦めないでっ！　リーゼリットさえ倒せば、他はどうにでもなるわ……っ！』
勢いはまだこちらにある。仲間と一緒に戦いさえすれば、倒せない敵はない。
『ふっ、そうだな。ここで倒すぞ。ミソラ』
『そうですね。リーゼリットさんさえ倒せば、他はどうにか対処できると愚います』
リコとユーリが頷き、
『ミ、ミソラさん。わたしたちは、どんな逆境でも勝利してきました』
『うぬ。ゆえに、ここでも負けるわけがあるまい』
レクティとブレアが八双の構えを取り、
『仕方ないわね。もう少しだけ付き合ってやるわ』
『ふふっ、チビ虎さんは意外と面倒見がいいのね』
『うるさいっ！　乳デカ女……っ！』
ミーナとノエルも、不敵な笑みを浮かべる。
諦めなければ、道が開ける。あたしたちは、どんな逆境からでも、死線を乗り越えてきた。今度の敵も強大だ。激戦を経て、あたしたちは疲弊しきっている。状況は控えめに見ても、好転する兆しはない。でも、あたしたちは必ず勝つ！　なぜなら、カナタ・エイジの教え子たちが一丸となって挑むのだから……っ！
『行くわよ……っ！』
と、ミソラが声をかけた瞬間。
「ミソラ、甘いよ」
リーゼリットの指先がぱちんと鳴る。その刹那、不意に悲鳴があり、鮮血が空を舞った。
『きゃっっっ!?』
ミソラが咄嗟に振り向くと、そこには不意打ちを浴び地面に急降下するノエルと、虚ろな眼で巨大な魔戦斧を構えるミーナの姿があった。彼女が纏う黒いドレスは、死の女王を連想させた。
『ミ、ミーナさん……っ!?』
「ミーナ、こちらへ」

『はい、リーゼリット様』
ミーナは悠々と飛び、リーゼリットの傍らへ立つと、ミソラたちへ魔戦斧を向けた。
『う、うそ……っ!?』
「嘘なんかじゃないよ。ミーナ・バープルトンはとっくにわたしの支配下にあるの。だから、ミソラたちがミーナを連れて逃げたのは無駄な頑張りだったんだよ」
ふふっと微笑んだあと、リーゼリットが告げる。
「ミーナには昨日捕まった時に、お腹にわたしの呪詛をつけておいたんだ。もちろんミーナには呪詛が見えないし、わたしが呪詛をつけた記憶は残らないように細工しておいたけど。だから、ミーナはいつでもミソラたちを裏切れたの」
『リーゼリットっ！　あんた、なんてこと酷いことを……っ!?』
怒鳴るミソラを無視し、リーゼリットがしたり顔で説明する。
「もちろん、《ベヘモス》と違って、人間は肉体が脆弱だから、《崩力》は与えていないわ。強引に《崩力》を与えると、チカラを上手く扱いこなせなくて、体がすぐに壊れちゃうから」
ベットたちを二度滅ぼされたリーゼリットが憎しみとともに言い放つ。
「でも、これでミーナはわたしのペットになった。形勢逆転よミソラ。あなたたちは、ここでゲームオーバー。ほとんどチカラ尽きた今、これだけの数を相手にできる？　……さあ、始めなさい……っ！」
その直後、リーゼリットの思念を感じ取った空士たちが手に持つ武器を展開し、ミソラたちへ襲いかかってきた……！

＊＊＊

第九人工空島周辺空域。高度三〇〇〇。

「あれが第九人工空島よ」

「ふーん。障壁を張って、誰も入れなくしてるのか」

上着のポケットから貌を出す、ハンカチを纏った掌サイズの少女――エミリー・ウィットベルンの声を聞き、長身痩躯で黒髪の少年――カナタ・エイジは眼を細めた。

第九人工空島は、黄昏色の障壁に覆われ、侵入は困難のようだ。

付近には、各学園浮遊都市所属らしき空士の姿もちらほら見られた。

カナタは学生たちの輪に加わらず、より上空から、黄昏色の障壁を見据える。

「あれを破るのは難しそうだな」

「その辺の空士には、でしょ」

「ま、いまの俺ならできるよ。でも……」

「いまさら隠す必要なんてないでしょ。出たとこ勝負でいいんじゃないのん？」

この状況では、カナタが尋常でないチカラを持ったことを、世界レベルでアピールすることに繋がりかねない。

しかし、耳にした通信結晶からは、なぜかE601小隊の、戦闘中らしき通信が聞こえてくるではないか。

仮にここで表立って介入したならば、ゼスやアンネローゼの息のかかった連中が、カナタが第九人工空島でひと騒動起こしたあと、待ち構えていることだろう。

さて、どうしたものか。

そんなとき、カナタの気配に気づき、地上方向から飛行してくる者の姿があった。

「誰だよあんた？」

『ベベル』評議会議長、ハルトマン・エンディケウスである」

そう言って、初老の紳士が、カールした細長い髭を撫でた。

エンディケウスってリバーの親父か？　息子の顔面を手加減なしで殴打したカナタは、面倒くさそうな奴に会っちまったなー、と頭の後ろを掻く。

そんな中で、エミリーが開口一番に失言する。

「久しぶりね、髭」

浮遊都市連合評議会議長を、いきなり『髭』呼ばわりだ。無礼千万なのだが、カナタは注意をしなかった。

「うーむ、奇怪な容姿をしておるな、エミリー・ウィットベルン」

エミリーと貌見知りらしく、ハルトマンがエミリーを凝視した。

「あら、この姿の美しさが理解できないなんてやっぱり髭ね。……っていうかあなた、いま第九人工空島の件で、緊急対策会議的なものに参加しなくていいわけ？」

「この髭の美しさが理解できぬとは、ふしだらな女め。……緊急対策会議の件だが、昨晩からあらぬ嫌疑をかけられ、現在自宅謹慎ということになっているのである」

掌サイズのエミリーと、口論するハルトマンを見やり、戦意がないことを悟ったカナタも、正直に口にする。

「何もない空が自宅なんて、おっさん、偉い人のくせにホームレス願望あんの？　あとさ、本当にすごい髭じゃんか」

「……ぬう」

その言葉を聞き、ハルトマンが絶句した。『髭』呼ばわりの次は、『おっさん』ときたのだから仕方ない。この場に、リバーがいれば生真面目に注意しただろうが、生憎と彼はいまアンネローゼから絶賛お説教タイムだろう。

「ふふっ、カナタちゃん。議長閣下が固まっちゃったわよん」

エミリーにからかわれ、ハルトマンがこほんと咳払いした。

「じつは教皇陛下から、貴様たちが暴走していると連絡が入った」

暴走、か。謀反とかじゃない分だけマシだな。

「できることなら、貴様たちを確保して、今一度話し合いの場を持ちたいとのことだが」

「悪いけど、いま急いでるんだ。あとでいい？」

ここで足止めを食らうつもりはない。カナタは魔砲剣を展開し、左手に握った。切先を向けないのは、人類に敵対する意思はないという表れ。だが、同時に魔砲剣を展開したのは、邪魔をするなら排除するというニュアンスを含む。

「カナタ・エイジ。向かう先が戦場とわかりながら、なぜ身を投じる？　自分だけは墜ちないとでも過信しているのか？」

「まさか。墜ちないことはエースの絶対条件だけど、俺はそこまで過信してないよ」

飄々とカナタが語る。

「でもさ、あの場には俺が大事にする教え子たちがいる。あいつらもさ、まだ未熟だけど、そう簡単に墜ちるような奴じゃねーよ。だからこそ、頑張るあいつらに、俺は教官としてやらなきゃならないことがある」

「先程救援要請があったが、どうもあの場には《崩力》の使い手がいるようだ。空士とはいえ、まだ候補生である者たちが生き残るのは困難だろう。まして貴様の教え子は、お情けで空戦武踏祭に出場できたのだ。もうとっくに墜とされているだろう」

「ま、たしかにお情けで出場できて浮かれてる連中なら、厳しいだろうな」

本当に厳しいと思いながら、カナタはこう言い放つ。

「でもミソラたちは、空戦武踏祭に出場した小隊の中じゃ、自分たちが一番弱いってわかってる。だから、そう簡単には墜ちねーよ」

「まだ生き残っているというのか？」

気でも狂ったか、というかのようにハルトマンが凝視してくるが、カナタは当たり前のように言う。

「あいつらに指導した俺が言うんだから、間違いないよ」

「たかが一人の指導程度で、あの状況を生き残れるとは思えぬな」

「たしかに、ふつーはそう思うだろうね。でもさ、ミソラたちは、代表小隊の面子の中でも、不測の事態への対処なら、誰にも負けたりはしないよ。普段から困難な課題に直面させて、自分たちで考えて工夫させてきたからね。それにさ――」

そう言って、カナタは耳元の通信結晶を叩いた。

「じつはあいつらが戦闘中っぽい通信は、いまも俺の耳に届いてるんだよね」

「……っ!?」

「第九人工空島にいる代表小隊の中で、自分たちが弱者であることを知り尽くした連中がどれだけいると思う？負け続けの中で、強者に立ち向かう術を心得ている奴がどのくらいる？　あいつらは弱いからこそ、窮地には慣れっこで、粘り強く戦いぬくことを知ってる。でも、いま直面している窮地を乗り越えるには、まだ足りない。相手の手の内を見抜ける、俺の助言が必要だ。第九人工空島はいま、脱落したはずの参加者たちが操られて、大変なことになっているんだ。……だからさ、ここであんたに捕まるわけにはいかないな」

そう言って、カナタは不敵な笑みを向け、魔砲剣を中段に構える。これ以上話すつもりはないとの意思表示だ。

「ならば……」

短い沈黙のあと、ハルトマンが言う。

「ならば行くがよい、若僧」

カナタが意外そうに眉をあげる。

「んっ？　いいのか？」

「ああ。かまわんのである」

どこか腑に落ちない貌のカナタに、ハルトマンが事情を説明する。

「ふむ、理由は二つある。一つ目は、貴様の実力なら、あの黄昏色の障壁を突破できる可能性があることである。じつのところ、第九人工空島の件は我々も手を焼いており、協力をお願いしたい」

それは筋が通っているな、カナタが頷く。

「もう一つは？」

「わたしの実力では、貴様には敵うまい。ならばいっそのこと、愚息のように無駄に戦って怪我をせず、恩を高く売りつけたほうが得というものなのである」

「嬢、あんた意外とヘタレだったのね……っ!?」

エミリーが呆れたように言うが、カナタは、正直でいい奴だな、と思った。

「それと、ただの学生が、この異常事態に対処できるとは思えん。この場に集まった面々は、貴様たちの介入と同時に退避させるぞ。事前説明もなく、この状況に介入したところで、敵勢力には敵うまい。《崩力》の障壁も突破できぬレベルだからな。それに教皇陛下からは、貴様の存在を公表していいと許可を得ていないのである」

「ああ、それでいいよ。……サンキュな議長。んじゃ、行かせてもらうよ」

「うむ。わたしにできることはないが、気をつけるがよいぞ」

些細な気遣いから、ハルトマンの器量が窺える。

勝てる戦いと勝てない戦いの区別がつく、命の使いどころを心得た人物なのだろう。

「若僧よ、励むがよい。貴様のことは、わたしがクールに《ベベル》中に伝えておいてやろう」

冗談めかして言い、ハルトマンが髭を撫でる。

「他人任せにしては、意外と腕がすくわれん」

そう言って、エミリーが上着のポケットに銃を引っ込めた直後、カナタは《絶力》を発動。第九人工空島へと急降下し、手にした漆黒の魔砲剣で、黄昏色の障壁を斬り裂いた……！

第五章　それを貫いたのは、彼女たちの覚悟と想い

第九人工空島は、空戦の真っ只中にあった。

中央部に位置する中央制御棟の上空では、反魂の錯乱で操られた空士たちが、疲れ切ったミソラたちを追い詰める。

『全員急降下っ！　地上まで辿り着いた後は、前衛飛行で密林の中に逃げる。ミソラ、キミは発砲禁止だ……っ！』

『わかってるわよっ！　下手したら、人殺しじゃないの……っ！』

半ばやけになりながら、ミソラが返事をした。ミソラの狙撃術だと、牽制のつもりが、直撃弾になりかねないのだ。かといって、抵抗せずに逃げられる相手ではない。

ミーナが執拗にミソラへ追い縋り、斧撃を放ってきた。

『くっ、ミーナさん……っ!?』

知覚を越える速度の一撃が放たれ、後退中だったミソラからどっと脂汗が噴き出た。

反魂の錯乱で強化されたことで、ミーナの強さが異常な次元に高まっている。

リコがミーナを排除すべき脅威と認識し、急所を外した魔力弾を三発放つ。

しかしその直後、ミーナが突如としてその身に青白い放電現象を起こす。静電気で軽く髪を逆立てながら、ミーナは弾道を見切ったかのように二発を躱し、最後の一発を巨大な魔戦斧を盾代わりにして防御。その後、魔戦斧を構え直すミーナの貌からは、一切の感情が欠落していた。

『わたしの狙撃を躱すとは……。気をつけろミソラ、ミーナは完全に支配されている……っ！』

『わかったわ……っ！』

リコからの警告を受け、ミソラが必死にミーナを振り払おうと逃げ回る。そんな中、降下してくる空士たちを迎え撃つのは、前衛二人組だ。

『リコさん。わたしの実力なら、操られている人間の一人や二人なら、峰打ちで……っ！』

包囲突破のために、ユーリが甲高い剣戟の響きを奏でた。

『わかっている。だが、一人二人無力化したところで、この人数が相手では……』

『レクティ、ブレアっ！　降下しながら、ノエルさんを助けることはできる……っ!?』
「む、難しいです……っ!?』
「ああ。無理だ。こやつらは手強い……っ!?』
地上のノエルから、通信が細々と入る。
「……わたしのことは、いいから……逃げ、なさい……』
『仲間を見捨てるなんて……っ!?』
『リコさん、操られた空士の胸に黒いブローチのようなものが見えました。もしかしたらあれが……』
「助かるユーリ。だが、この物量差では……』
リコが言葉を濁す。この劣勢が覆し難いことは、誰の眼にも明らかだ。相手は、百人以上の操られた空士。対するミソラたちは、連戦の疲労が激しく、体力魔力ともに心許ない。
前夜祭の晩も含めれば、連戦四日目に突入しているのだから当然だ。
『リコ、このままじゃ……っ!?』
「……』
ミソラの言に、リコは何も返事をしなかった。
「どうするミソラ、そろそろ降参する？」
「これが返事よ……っ！」
ミソラがリーゼリットに向け発砲するが、ミーナが立ち塞がり砲撃を叩き斬る。
《アスモデウス》よりも強力な戦力の出現に、ミソラたちは抵抗する術がなく、地上へ追い込まれる。こちらを見下ろすように飛ぶ操られた空士を相手に、手も足も出ない。
完全な手詰まりにされ、リコは非情な決断を下す。
「……仕方ない。ミソラ、このままではこちらが全滅する。全員で、ばらばらに密林の中に逃げる許可をくれ』
「それってどういう――』
『運がよければ、誰かひとりぐらいは生き残れるということだ』
「……っ!?』
ミソラが絶句した。

『仕方ありませんね。状況が状況です』
『そのぅ……誰かひとりが無事なら、まだなんとかなると思います』
『ミソラ、そなたが一番魔力量に余裕がある』
『まあ、それが妥当ね。紅チビに譲るのは癪だけど』
『ここは女神なわたしに任せて、先に行け。あとから必ず追いつく』
疲れ切った仲間たちは、盾になるつもりらしい。
『ちょ、ちょっとっ!?　な、なに言ってるのよっ!?　みんなで逃げるんじゃないの……っ!?』
言いかけ、上空から急降下してきた空士が、リコの狙撃を鋭く躱し、そのままリコの頭を掴みながら地面へ叩きつけた。
『リコさん……っ!?』
気づいたユーリが、助けに入ろうとする。しかし、彼女は追ってきた空士たちに、羽交い絞めにされてしまう。
『リコ、ユーリさん……っ!?』
遅れて追いついたミソラが叫んだ。助けを求めようと、ミソラはレクティとブレアを見やる。だがそこに広がっていたのは、空士二人ずつに組み伏せられる幼馴染コンビの姿だ。
『レクティ、ブレア……っ!?』
たった一人になったミソラを、空士たちが囲い込む。すぐに包囲の一角が割れ、ミーナと《アマイモン》を引き連れたリーゼリットが姿を現した。
『さあ、いますぐわたしのベットにしてあげるわ』
嘲笑と侮蔑を込めた言葉を浴びせられる。しかし、敵中に孤立したミソラの心に怯えはなく、純粋な怒りを覚えていた。最後まで、徹底的に抵抗してやる。醜く命乞いなどするものか。鋼のように折れぬ心で、ミソラが相手を見据える。
『あいつなら無様に逃げたりしない。だから、あんたはあたしが必ず墜とす……っ！』
覚悟を固めた彼女の表情は、リーゼリットを不快にする。
「いいわ。あなたは操り人形にしたあと、一番こき使ってあげる」

刺し違える覚悟で、ミソラは引き金にかけた指にチカラを込めようとする。せいぜい蚊ほどの一撃に、ミソラが空士の誇りと命を込めようとしたとき、不意に、よく聞き慣れた男の声がした。

『へっ、よくわかってんじゃねーかミソラ』

その直後、上空を覆う黄昏色の障壁から一条の光が差した。遅れて黄昏色の障壁が吹き飛び、青空が貌を出す。まるで闇を照らす導きの光のように舞い降りたその人物は、着地と同時に漆黒の魔砲剣を振るい、周囲に飛ぶ閃刃を撥き散らし、リコたちを拘束する敵を飛び退かせた。

『……っ!?』

突如舞い降りたその人物を見て、ミソラが眼を大きく開け、瞳を震わせる。彼女の視線の先には、不敵な笑みを浮かべたカナタ・エイジの姿があった。

『でも、正面から立ちはだかるんじゃなくて、不意を突かねーと、その子供には届かねーよ』

『カ、カナタさん……っ!?』

『あ、主よ……っ!?』

『カナタ先輩……っ！』

『カナタ・エイジなの……っ!?』

『ふっ……』

『あ、あんた……っ!?』

そう口にするので、ミソラたちは精一杯だった。

当然だ。下手をしたら、今生の別れとなっていた人物に出会ったのだから。彼の後ろ姿に眼を奪われ、一瞬呼吸すら忘れたミソラが声をかける。

『ふ、無事だったの……っ!?』

『まーな。でも、積もる話はあとだ』

『ふーん。黒髪のお兄ちゃん、生きてたんだ』

つぶやくように言ったあと、リーゼリットの眼つきが険しくなり、カナタを睨みつける。

『それで、そのチカラは一体なに？』

『さあな。企業秘密だよ』

カナタがそう答えたとき、彼の上着のポケットから、エミリーが姿を現した。
「ふふっ、リーゼちゃん。久しぶりねん」
「エミリー・ウィットベルンっ!?　その姿は……っ!?」
正体不明の小人の出現を見やり、リーゼリットが狼を歪める。
羽は生えてないけど、妖精かしら？　とミソラは間抜けにも疑念を抱く。
『ま、ミソラたちも言いたいことは色々あるだろうけどさ』
言いながら、カナタは魔砲剣を霧散させ、
『まずはこの状況を切り抜けてからにしようぜ……っ！』
それだけ告げて地を蹴り、爆発したかのような加速を以って、上空に舞う百人以上の空士たちへ挑みかかった……！

黒髪のお兄ちゃんが生きていたの……っ!?
突如として現れ、しかも未知の強大なチカラを宿した敵を、リーゼリットが不快気に見下ろす。
「わたしのお気に入りの変異種を破壊されたから、容赦しないよ……っ！」
『容赦……？　そんなものが俺に必要だと思わねーけどな』
真っ直ぐリーゼリットのもとを目指すカナタのもとへ、操られた空士が立ち塞がる。カナタは魔砲剣を霧散させ、瞬光の如き速さで肉薄し、拳をつくって胴体へめり込ませた。
速いっ!?　とリーゼリットが驚いた刹那、殴られた空士が、がは……っ！　と胃酸を吐き、チカラなく降下していく。
その空士の胴体からは、黒い粒子のようなものが漏れ出していた。
まさかっ!?　素手で、呪詛を破壊しているのっ!?　ああも容易く……っ!?
リーゼリットの推論を裏付けるかのように、カナタは武器を持たず、操られている空士たちと交戦している。カナタと接近戦を試みた空士が一人、また一人と、黒い卵型のブローチを破壊され、地上へ降下している。そのブローチが服の下に隠れている空士も、容赦なく墜とされた。
どういう仕組みか知らないが、カナタは呪詛の気配が摑めるらしい。
本来ならば、百人以上の空士を相手に、徒手空拳で戦うのは愚行の極みでしかないはずだ。だが、カナタ・エイジは、呪力でもなく《崩力》でもなく、なにかしら強大なチカラを宿す彼だけは、この世界で唯一、愚行を賢明とし、不適切を適切と置き換える実力の持ち主であった。
『どうしたリーゼリット？　俺はまだ実力の半分も出してないぜ』
操られた空士たちを相手に、苦もなく、いや、それどころか当然のように戦ってのけたカナタを相手に、地上にいるミソラたちがざわめきだした。
『ずいぶんと厄介なチカラね』
全力のカナタから猛攻を受けた場合を考慮し、リーゼリットの表情が硬くなる。カナタが魔砲剣を握り、殺す気で挑んでくれば、リーゼリットを倒し、ミーナを解放することも容易いだろう。だが、
『つっても、まあ安心してくれ。お前と殺り合うつもりは、俺にはねーよ。だってお前の相手は、ミソラたちだからな』
カナタは、リーゼリットと戦わない旨を伝えてきた。しかも、それどころか、疲れ果てたミソラたちに相手をさせるという。
「なにを考えているの？」
『この戦いの参加者たちを絞らせてもらおうと思ってな。俺と戦う権利があるのは、とっくの昔に勝負に負けて、強制転移できなかったこいつらだよ。だから、お前らと戦うのはミソラたちの役割だ』
地上でまだロクに動けぬミソラたちを見やり、リーゼリットが眉をつり上げる。
「わたしを倒す？　たかがベットになるしか能のない存在たちのくせに……？　――馬鹿にするのも大概にしてほしいわっ！　黒髪のお兄ちゃんも、素手なんて侮り過ぎよ……っ！」
《崩力》の使い手としての誇りを、その鼻っ柱を、粉々にへし折られたリーゼリットは、操られた空士たちに指示する。
「みんなで連携して、黒髪のお兄ちゃんを仕留めなさい。射砲撃系は黒髪のお兄ちゃんを常に牽制、近接系は射砲撃系を護りつつ、相手の攻撃をいなしなさい。絶え間なく攻撃をしかけて、黒髪のお兄ちゃんを疲弊させるの……

っ！」

指示を聞いた空士たちが、射砲撃系と近接系に分かれ、カナタを物量攻めにする。雨あられと降る射砲撃を躱しながら、カナタは徒手空拳で接近戦を挑む。

むろん、高速飛行と徒手空拳での戦闘はすぐに限界を迎えた。幾つかの射砲撃がカナタを掠め、姿勢を崩したところで斬撃が放たれ、カナタの前髪が斬り落とされる。敵の圧力に負けたカナタは、中央制御棟上空から巨大潮上空へと、戦域を動かされていた。

まだ手心を加えているの？　どういうつもりか知らないけど、甘く見すぎよ……っ！

いまが好機と、リーゼリットが命令を下す。

「あなたたちを侮っているうちに、致命傷を浴びせなさい……っ！」

違うっ！　あいつは決して相手を甘く見たりはしない……っ！

第九人工空島。中央制御棟付近。

地上から見ていたミソラは、カナタの意図が手に取るように分かった。

そもそもリーゼリットの立場なら、あいつやあたしを倒すことに固執しなければ、いつだって勝負がついていた。ミソラは思う。リーゼリットは、人質を取るだけでよかった。それだけであたしたちは動きを封じられ、完全に手玉に取られていた。

だが、ミソラたちへの復讐心に駆られるリーゼリットは、そのことに気づいていない。そしてカナタは、そのことに気づいていたからこそ、道化を演じているのだ。

絶対に勝ってはいけない戦いを、ぎりぎりのレベルで。もうちょっと粘れば、自分を倒せるのではないか、と相手に思わせるために。

『さてと、ミソラ』

交戦中のカナタから通信が入る。

『お前にこの状況を勝ち抜ける策があるか？　いまは俺が操られた空士たちを引きつけてるけど、向こうにはミーナに加えて、《崩力》を使えるリーゼリットと肉ダルマがいる。通常戦力じゃ《崩力》の使い手には敵わないってい

うのに、それが二体だ』

『……ごめん。《崩力》の使い手も、操られたミーナさんも脅威なのはわかってるけど、まだ策はない。でも――』

本来なら撤退が正しい選択だ。カナタの協力を得れば、それも不可能でない。

だが、断固とした意志でミソラが言う。

『それでも、あたしはミーナさんを絶対救いたい。そのために、リーゼリットを必ず倒す。《崩力》の使い手とか、自分たちより強いとかは関係なく、絶対にあたしが倒して、ミーナさんを救いだす……っ！』

それがE601小隊隊長の選択だ。この窮地で我儘を言うミソラに対し、空戦中のカナタはあらかじめミソラの選択を見越していたかのように告げる。

『いい心がけだな。なら、ヒントをやるよ。なあミソラ、お前ならリーゼリットの呪詛で簡単に操られるか？』

『絶対に嫌っ！　死んでもお断りよ……っ！』

『ミーナも一緒だよ。騎士として、そんな自分は赦さないだろうな。あいつは責任感に溢れている。俺の身に何かあったときは、ミソラたちのことを頼むってお願いしていたくらいにな。だから、お前がミーナの立場だったら、どうするか考えてみろよ』

『あたしがミーナさんの立場だったら……』

絶対にリーゼリットに抗う。呪詛に意思を奪われようとも、身が捻じきれようとも、絶対に思い通りにはさせない。つまり、ミーナさんは自分で呪詛を――

ごくりと音を立てて生唾を飲み込み、ミソラが言う。

『わかったと思う。あんたが言いたいこと』

『そっか。なら、あとはお前に任せる』

そう言って、カナタから通信が続く。

『にしても、やけにものわかりがいいな。俺のいないうちに、随分ミーナと仲良くなったみたいじゃんか』

『まあね。あんたが戦線離脱していた時に、仲良くなったのよ』

操られた空士たちと交戦しながら、カナタが口の端をつり上げた。

『それとさ、理由はどうあれ、お前らを巻き込んだ俺が言えた義理じゃないけどさ、ここ数日見ないうちに、お前らはきっと大変な目に遭ったと思う。でも、途中脱落することなく、いまこの瞬間まで戦い抜いて来れた。だから

さ――俺が知らない間に、どれだけ成長したか見せつけてみろよっ！　これはお前たちの戦いだ……っ！』

その者の声を聞くだけで、ミソラたちの体の奥底から、熱く、昂る衝動が湧き上がってくる。その者のエールを聞くと、全力以上のチカラを発揮してみたくなる。

それが、カナタ・エイジという教官の価値。そして――

『みんな聞いて、今戦しているリーゼリットたちに最後の空戦をしかけるわ……っ！』

こんな窮地にまで足を運んでくれた教官の策が、空振りに終わるわけがない。奮起したミソラたちは、お互いに貌を見合せ、深く頷く。

絶対にこいつの期待に応えてやる……っ！

『リコとユーリさんは、このままあたしと一緒に戦闘開始。レクティとブレアはノエルさんを後送したあとに加勢してちょうだい』

『紅チビ、わたしは地上で充分に休ませてもらった。まだ戦えるわ……っ！』

『その傷で満足に飛行できるわけありません。《ファルシオン》の空士なら、見極めはできるはずです』

ぎっとノエルが睨みつけてきたが反論はない。レクティとブレアに後送させたのは、ノエルをリーゼリットの呪詛から護るためと、彼女たち二人を休ませるためだ。

レクティとブレアが限界に近いことは、青ざめた貌を見れば一目瞭然だ。

尋常ではない汗。上がった息。唇は酸素欠乏症で青みがかっている。

常に動き回る前衛の消耗は、中衛後衛よりも激しい。ユーリの負担が膨大になるが、そこは特務である彼女に賭けるしかない。

『ミソラ。わたしたちは連戦の疲れで、全員魔力が尽きかけている。相手の出方を窺ったあと、一気に攻め落とすぞ』

『うん。もちろんよ……っ！』

ミソラたちが上昇すると、今戦していたリーゼリットがこちらを振り向いた。傍らにはミーナと《アマイモン》が控えている。

「ふふっ、あなたたちがわたしに勝てると思ってるの？」

ミソラの眼を見やり、返事は不要であることをリーゼリットは悟り、

「ミーナ。あなたはミソラからわたしを護るために、全力を尽くしなさい。傷一つつけさせたらダメよ」

『はい、リーゼリット様』

「いい返事ね。さて、ミソラ。状況が変わったから、わたしも相手をしてあげる。黒髪のお兄ちゃんは脅威だから、そっちに専念したいの」

『甘く見ないでっ！　あんたは絶対にあたしがぶっ飛ばすわ……っ！』

かくして、この日最後の空戦の幕が開けた。

第九人工空島。中央制御棟上空。

『ミソラ。キミはリーゼリットとミーナを引き付けろ。わたしとユーリで、先に《アマイモン》を仕留め、ミーナの呪詛を破壊しやすい状況を整える』

『わかったわ……っ！』

どうやらリコは、先に《アマイモン》を倒して、敵の数を減らす方針らしい。そのために、意図的に戦力的に優勢な空域と劣勢な空域を作り、勝負をかけるようだ。

ならば、ミソラの役目は敵の注意を引いて、粘り強く戦うこと。

ミーナさんを助ける為にも、仲間たちが加勢に来るまでの時間を稼がないと……っ！　ミソラが魔槍剣の柄をぎゅっと握りしめる。

『ミーナさん、こっちです……っ！』

宙を舞うミーナの至近へ、ミソラが発砲。ミーナの注意を引きながら、リーゼリットの視界を飛び交ってやる。

あいつが来てるのに、取ずかしい戦いなんかするもんか……っ！

ミソラの中の滾る想いが、疲れ切った体を動かす。

「ミソラ、あなたはもう虫の息なんだから早く墜ちなさい……っ！」

『さっきまではそうだったけど、いまはどうかしらね……っ！』

リーゼリットが放ってきた呪力弾を迎撃しながら、ミソラが告げた。

予想外に勢いがあるミソラの動きに、リーゼリットが意外そうに眉をつり上げる。

一方でリコたちは、執拗に《アマイモン》へ攻撃をかけていた。牽制と狙撃の隙の無い連携に、《アマイモン》の注意が、リコたちへ釘付けになる。

「ミソラの相手は、わたしとミーナで釣りが出るわ。《アマイモン》は、黒い髪のお姉ちゃんたちを潰してきて」

《アマイモン》の注意を引き付けたリコたちは、僅かずつ戦域をずらしていく。《アマイモン》を倒す策など浮かびもしないが、そこはリコの閃きにかけるほかない。

『リコ、副隊長としての働きに期待してるわよ……っ！』

『ふっ、とっとと実績を挙げて、E601小隊の隊長に就任しないとな』

『そんな簡単に隊長の座は譲れないわよ……っ！』

反論しながら、ミソラはミーナに向かって二発発砲。ミーナの周囲の空を掠めるや否や、ミーナは巨大な魔戦斧を構え、ミソラに肉薄してきた。

狙い通りっ！　あとは、このままミーナさんを引っ掻き回せば……っ！　昨日から、拘束されていたミーナの疲労も、かなりのものだ。以前戦った通り、魔力切れを狙えば勝算が……と考えるミソラ。しかし、そんな彼女の読みは、本当に呆気なく裏切られた。

なぜなら、反魂の錯乱で操られるミーナは、自分の肉体に電気変換した魔力を付与。彼女は軽い放電現象とともに、ミソラの速度を凌駕する動きを見せ、こちらの眼と鼻の先へ迫って見せたのだ。

『ど、どうして電気を纏うだけで、こんなに速くなるのよ……っ!?』

「ふふっ、ミソラって本当にお馬鹿なんだね」

不意にミソラの背後に、リーゼリットが現れた。

「自分の肉体に電気を流すことによって、神経伝達を速めて、人間の限界を超えた反射神経と初速で動いてるんだよ」

リーゼリットを振り払おうと、ミソラが乱雑な空戦軌道を描く。加速力に定評があるミソラの軌道にも、リーゼリットは苦もなく追尾し、呪力弾を放ってくる。

「肉体に限界を超えた負荷がかかるから、そう何度も使える技じゃないけど、これでミソラが手に入るなら壊れてもいいし」

『そんな酷いことを……っ！』

激しい空戦軌道を描きながら、憤怒したミソラが強引にリーゼリットへ魔砲剣を向ける。その瞬間、リーゼリットが八重歯をちらりと覗かせた。

「動きが単調になったわよ、ミソラ」

『くっ、リーゼリット……っ!?』

苦し紛れにミソラが発砲。しかし、リーゼリットは悠々と躱しながら、接近。こちらへ掌を向け、呪力弾を連射してきた。このままじゃ追い詰めるどころか、あたしが墜ちる……っ!?　たまらず障壁を展開し、ミソラが後退する。そこへ、

「甘いよミソラ。……やりなさいミーナっ！」

最悪のタイミングで、忍び寄ったミーナの、巨大な魔戦斧が迫る。

しまったっ？　障壁破壊……っ!?

ミーナの強烈な斧撃が、ミソラを魔術障壁ごと叩き壊そうとする。

咄嗟に最大限の魔力を注ぎ込み障壁を強化するが、完全に勢いで押し負けた。障壁を崩壊させながら、ミソラは地上方向へほぼ垂直に叩き落とされ、背中から地面に突っ込む。

『げほっ、げほっ……』

肺から空気が押し出され、激しく咳き込む。それでもすぐさま起き上がり、ミソラは青白い電撃を纏うミーナを見やった。もう一撃浴びたら、たぶん終わりね。

それでも、ミソラはすぐに動く。倒すべき相手は、ミーナではない。激しい空戦機動に混ぜた幻想加速でミーナを撒き、ミソラはリーゼリットを射程に捉える。

『悪いわねリーゼリットっ！　この距離なら、《崩力》の障壁だって少しは衝撃を受けるでしょ……っ！』

リーゼリットのやっていることが赦せない、と言わんばかりに、ミソラは三百発撃を叩き込んだ。リーゼリットは《崩力》を扱えるからか、砲撃に気づきながらも、避ける素振りをみせようとしない。

調子に乗るなっ！　と、ミソラが追加で収束魔砲を放とうとしたとき、

『え……っ!?』

驚愕の声とともに、引き金にかかる指を止めた。ミソラの視線の先には、超人的な反応速度で、リーゼリットのもとへ急ぎ駆けつけた、ミーナの姿があったからだ。

ミーナはミソラの射線上に立ち塞がると、ミソラの砲撃を巨大な魔戦斧で迎撃し始める。一発目、二発目を巨大な魔戦斧で両断するも、砲撃の反動に押し負け、続く三発目を切断する暇がなかったようだ。ミソラの砲撃はミーナを直撃した。

『ミ、ミーナさん……っ!?』

黒いドレスが盛大に弾け飛び、お腹の上にある黒い卵型のブローチが露出させながら、傷ついたミーナが姿勢を崩す。彼女は激痛に堪えながら、すぐに魔戦斧を構えようとするが、ダメージが深いせいか、ミソラに挑みかかる素振りはない。

う、うそっ!? あたし、なんてことを……っ!? 下手をしたら、殺めていたところだ。

「ひっどーーいっ！ ミーナが可哀想だよ、ミソラ」

顔面蒼白になったミソラを、リーゼリットが嘲笑う。

もしかしてっ!? リーゼリットを攻撃すると、ミーナさんが護るように命令してあるのっ!? これじゃリーゼリットを撃てない……っ!?

下唇を噛み、ミソラが眼を皿にして、突破口を探す。

「なんだか一瞬勢いづいたみたいだけど、そっちが撃てないからって、ミーナに遠慮はさせないよ……っ！」

操り人形と化したミーナが振るう魔戦斧を回避する最中、ミソラは空気中を水滴が舞いているのに気づく。その水滴のもとを辿ると、そこには虚ろな瞳を潤ませるミーナの姿があった。

ミーナさん、もしかして心が……っ!? ミーナの言葉は聞こえないが、ミソラにはその辛さが痛いほどわかる。呪詛にほぼ支配されているこの騎士は、汚辱を必死に堪えているのだ。騎士の誇りは、その心は、まだ微かに生きている。

『ミソラっ!? ……させるかっ!?』

ミソラの危機に気づいたリコが、《アマイモン》と交戦中にもかかわらず、スコープ越しにミーナを捉えて引き金を絞る。華麗に放たれた狙撃。しかし、青白い電気を纏うミーナは、膝を大きく曲げて、後ろに倒れるようにして軽やかに躱してみせる。

『まだだ……っ！』

リコは、ミーナの回避に即座に反応。回避軌道を予測し、修正を加えた魔力射撃を素早く二度叩き込む。近場を

掠めるような、粘り強い射撃に業を煮やし、ミーナが大きく飛び退いたとたん、その空域を一発の魔力弾が駆け抜けた。

ミーナが飛び退くことは、想定の範囲内だったのだろう。リコが叩き込んだ最後の射撃が、無防備なミーナの腹部へと突き刺さった。これなら……っ！ とミソラが息を呑む。

だが、ここで予想外のことが起こる。あろうことか、黒い卵型のブローチは、自分の身を護るためだけの、小型の障壁を展開してみせたのだ。確実な軌道にあったリコの魔力弾は、その障壁に干渉され、あっけなく霧散してしまった。大きさの割には、強力な障壁のようだ。

『ち……っ！』

その結果に、思わず舌打ちするリコ。彼女の狙撃では、黒い卵型のブローチの障壁を破壊できないらしい。

そんな最中、ミソラはある事実に気づいていた。

リコの最後の狙撃を、黒い卵型のブローチが障壁で防いでいた際、ミーナがお腹を微かにだが突き出そうとしていたのだ。まるで、リコの魔力弾で黒い卵型のブローチを破壊するかのように。それにミーナは、今回一度も魔術障壁を展開していない。防護服の刻印術式がなくても、ミーナの実力なら堅牢と名高き障壁を張れるはずなのだ。

先ほどの行動と言い、明らかにミーナの行動は妙だ。いまにして思えば、ミソラが二点砲撃を放った際、三発目の砲撃を、あの障壁破壊のミーナが斬り裂けないのもおかしい。いまのミーナのチカラなら、容易く破壊できるはずではないか。

そんなとき、ミソラは青白い電気を纏うミーナと眼が合った。こちらへ向かってくる虚ろな眼が、一瞬合図をするかのように瞬いてみせた。その瞬きは本当に些細なものだが、それにミソラは必死に訴えかける意思を感じた。

ミーナさん、あなたっていう人は……

くっ、届かなかったのか。

第九人工空島。中央制御棟上空。

ミーナと再び交戦するミソラを一瞥したリコは、視線を自らの戦域へと戻す。

ミソラの戦域は、人数の上では一対二で不利。もとより事態が優勢に推移するとは考えていない。対してリコの戦域は、リコとユーリの二人に対し、《アマイモン》が一体だ。人数の上では、局所的有利といえよう。すなわち、この戦域は早期勝利が望まれているのだ。だが、リコの貌には濃い焦りの色が浮かんでいた。

「ユーリ、わたしが援護する。一旦退がれ」

『まだ行けます……っ！』

〈トリシューラ〉を握るユーリは、《アマイモン》に槍撃を放つ。しかし、槍撃は巨大な刀腕とぶつかり合い、弾き飛ばされた。魔力超振動機構を以ってしても、《アマイモン》の巨大な刀腕は、両断できない。《崩力》と呪詛による強化の影響か、それとも宿した《崩力》を練うことで魔力超振動機構を無力化しているのか。理由は定かではないが、《アマイモン》は巨大な刀腕で、ユーリと渡り合っていた。

人数だけでなく、敵との相性の上でも、この戦域は望みがあるはずだった。

しかし、蓋を開けてみれば、勝利を収めることは厳しいと言わざるを得ない。

すでにリコに〝神憑き〟を発動するチカラは残されておらず、狙撃でダメージを与えたところで、致命傷には程遠く、たちまち高速再生される。しかも、ユーリの〈トリシューラ〉も決定打にならない。

「く……っ!?」

巨大な刀腕に押し負け、ユーリが弾き飛ばされる。そこへ《アマイモン》が突進。その巨体にユーリの体が体当たりされようとしたとき、

「ユーリ先輩に手を出すのは赦さぬ……っ！」

アイゼナッハ流魔双剣戦技――飛炎衝天撃

ノエルを後送してきたブレアが、側面から灼熱を纏う神速の突きを放った。

《アマイモン》は《崩力》で強化した障壁で防ぐ。ブレアの戦技は、障壁に僅かな亀裂を入れるだけに留まった。

「ぬぅ、通らぬか」

「ですけど、続けざまに何度も戦技をぶつければ……っ!?」

同じく来援したレクティが、飛炎衝天撃を放つ。しかし《崩力》の障壁に亀裂を広げたに過ぎず、標的が無傷で

あること変わりはない。

「か、硬すぎます……っ!?」

レクティが悔しそうに下唇を噛む。ノエルの螺旋龍風破のような戦技があれば、とアイゼナッハの戦技の打撃力不足を痛感しているのだろう。

「レクティさん、ブレアさん、一度仕切り直しです。三人で連携して倒します。協力してください」

レクティとブレアに問合いを取らせたあと、ユーリは《アマイモン》と対峙する。三人で徹底的攻撃して、敵の障壁を破壊するつもりらしい。

「ここはわたしたちでなんとかします。リコさんは、ミソラさんを援護してください……っ！」

ユーリの通信を受け、しかし、リコは動こうとしない。心を鎮めて、冷静に戦力を分析し、打開策を模索する。ユーリの提案は却下だ。わたしがミソラを援護したところで、リーゼリットは倒せない。では、この場でわたしが残り、四人がかりなら――いや、それでも《アマイモン》を倒せる見込みは低い。《アマイモン》を倒すには、理想を言えば反撃を赦さず、《崩力》で強化した障壁を展開させず、こちらが一方的に戦技を叩き込むことだ。

だが、果たしてそんなことが可能なのか？　と、リコの額に脂汗が浮かぶ。

そんなとき、巨大湖上空で戦うカナタから通信。

「おいおい、相手の裏を掻くことは戦いの基本だろ。まさかそのまま正面切って、その肉ダルマと戦うなんて言わないよな？」

『誰に向かってものを言っている？　わたしの名前はリコ・フラメルだぞ』

一瞬弱気になっていたリコは、その声を聞き、はっと考えを改め、この状況を打開できる情報を求めて戦場を見渡す。水蒸気爆発を起こした中央制御棟上空ではいまミソラたちが戦い、巨大湖上空ではカナタが戦っている。これらは一見何の変哲もない事実だが、ふとした拍子に、リコの脳裏を稲妻が奔り抜けた。

「いや、全員でミソラを援護する。このまま《アマイモン》の注意を引いて、敵を合流させるぞ」

「リコさん、なにを考えてっ!?　そんなことをしたら、せっかく孤立した《アマイモン》が敵と合流してしまいますよ……っ!?」

ユーリの言を受け、戦闘中のカナタが無線に入ってくる。

「いいや、それが正解なんだ。ミソラは体力があるから、一人でも頑張れる」

「一人でも頑張れる？　カナタ先輩、いったいなんの話を――」
『なあ、そうだろリコ？』
ユーリの言を遮り、カナタが問いかけると、リコはすぐさま仲間に指示を出す。
『ああ、キミの思った通りだ。……それとユーリ、レクティとブレアも落ち着いて聞いてくれ、もうひと踏ん張りで《アマイモン》は墜とせる。戦闘状態を維持しつつ、わたしたちはミソラと合流だ。あと、わたしの指示は聞き逃すなよ』

リコたちが合流して来たっ!?　なにか考えがあるの……っ!?
第九人工空島。中央制御棟上空。
空戦の最中、視界に入った仲間たちの姿に気づき、ミソラの注意力が削がれる。
その隙を、リーゼリットは見逃さない。
「甘いわ。ミーナ……っ！」
『畏まりましたリーゼリット様』
チカラ強く振りかざされた魔戦斧が、ミソラを両断しようとした。
これ以上は防ぎきれないっ！　墜ちる……っ!?
『く……っ!?』
一瞬の隙を突かれたミソラに凶刃が迫った瞬間――
『ミソラさん……っ!?』
《アマイモン》と交戦中だったレクティが急接近。少しでも身と心を鎮められたレクティは、勢いよくミソラの腕を取り、強引に加速をかけてくれた。
『だ、大丈夫ですかミソラさん……っ!?』
『助かったわレクティ』
間一髪で助けられたミソラが礼を述べる。
『そのぅ……連戦の疲れで集中力が落ちているんです。普段と同じように動けると思わないほうがいいです』

『ありがとうレクティ』
どうやらこの激戦の最中に、ミソラのことを気にかけてくれていたらしい。
『ミソラ、レクティ。敵に近づくなよ、援護する』
『えっ!?　ダ、ダメよリコ……っ!?　いま撃っちゃ――』
ミーナが壁役になることを伝え忘れていたミソラが叫ぶ。だが、リコはすでに引き金を絞っていた。リーゼリットへ三発の魔力弾が鋭く抉り込むように放たれ、ミーナのすぐ近くを通り抜け、リーゼリットの障壁に弾かれる。
ミソラの危惧に反する結果だ。
ミーナさんが身を挺して、リーゼリットを阻いに行かなかった……っ!?　気づかなかったのではない。ミーナは一瞥し気づいていたが、かまわずミソラを追撃して来た。
そんなとき、ミソラの脳裏を不意にある言葉が掠る。

――ミーナ。あなたはミソラからわたしを護るために、全力を尽くしなさい。傷一つつけさせたらダメよ

つまり、あたしからの攻撃じゃなかったから、反応しなかったっていうこと……っ!?
なら、そのシステムを逆手に取れば――
ミソラの中で、ミーナを解放する為の策が浮かぶ。
この策は一度きりで、危険も大きいが、ミソラは上手く行くと確信していた。誇り高いあのミーナさんなら、必ずあたしの意図を汲んでくれると信じて……
『雑魚が何人集まったところで、わたしたちには勝てないわ。やりなさい、《アマイモン》、ミーナ……っ！』
追りくる脅威を見やり、ミソラが問う。
『リコ、何か考えはないの？』
『あるから近づいてきた。耳を貸せ』
戦闘を前衛三人組に任せ、ミソラはリコと肩を並べる。
『わたしたちは逃げるから、キミは居残りで――』
『わかった。それとリコ、あたしはミーナさんに――』

「ま、まさかっ!?　そんなことをするのかっ!?　下手をしたら、ミーナが死ぬぞ……っ!?」
ミソラの説明を聞き、珍しくリコが素っ頓狂な声をあげた。
「大丈夫っ！　小隊長であるあたしの判断、信じてちょうだい……っ！」
リコはミソラを凝視するも、やがて……
「ふっ、やむを得ないか。他に名案が浮かばない。この際、お馬鹿な小隊長独自の視点に賭けるのも悪くないのかもな」
「絶対に上手くやってみせるわよ。それと、あんたも新米副隊長のくせには、なかなかやるじゃないの」
疲れ切ったミソラがにっと笑うと、リコがふっと笑みを零した。小隊長と副隊長がお互いの情報を共有し、策を導き出し、認め合った瞬間。そこにあったのは、一人では導き出せなかった――E601小隊を救うための答えだった。
『みんな、聞いてちょうだい。予定は狂ったけど、リーゼリットたちを倒す算段がついたわっ！　ここで一気に勝負を決めるわよ……っ！』

ミソラたちは抵抗できないし、問題は黒髪のお兄ちゃんのほうね。
第九人工空島。中央制御棟上空。
ミソラたちと戦闘を《アマイモン》とミーナに任せ、リーゼリットは巨大湖上空で戦うカナタを見据えていた。
あのチカラは正体不明だけど、《崩力》と同等かそれ以上ね。
いまだにカナタは徒手空拳で、百人以上の空士たちと戦っている。彼は激しい動きで、空士たちを翻弄し、傷つけずに倒そうとしているようだが、代わりに自分が傷を負っている。
相手を殺さずに無力化するのは、骨が折れ、相当神経をすり減らす作業だ。だからこそ、徒手空拳という手心を加えている間に、致命傷を浴びせる隙が生まれるはず。
リーゼリットは思う。最悪、このまま黒髪のお兄ちゃんが疲弊すればそれでいい、と。
弱らせさえすれば、倒す方法はいくらでもある。前回のように呪力で強引に干渉し、狂乱させ、自滅に追い込む方法。リーゼリット自身が戦う方法。状況によっては、正体を隠したユミエールたちに応援を求める方法もあり、

成果を上げればゼスの評価も上がる。
黒髪のお兄ちゃんは動きが鈍ってきて、素手での一撃だけじゃ、わたしの呪詛を壊せなくなってきてる。これなら、もうすぐ墜とせるかも……
それがカナタの誘い手であることに、リーゼリットは気づかなかった。
さて、とリーゼリットは息も絶え絶えに戦うミソラたちへ視線を戻し、
「ふふっ。いい加減諦めたら？　最初に降伏するお姉ちゃんは、ご褒美に一番強いわたしのペットにしてあげる」
降伏勧告をするが、誰もリーゼリットに恭順を誓う者はいなかったはずだったが、リコが澄まし貌で言い放つ。
『わかった』
「えっ!?　わかったって――」
『わたしたちは諦めて逃げるから、ミソラを好きに料理するといい。降伏はしてやらないが、それが相場というものだろう』
それだけ言い残すと、リコがレクティ、ユーリ、ブレアとともに戦線を離脱する。
突然のことにリーゼリットは呆けながらも、はっと我に返り、
「《アマイモン》、ミーナはすぐ攻勢に出なさいっ！　ミソラを生きて捕らえることさえできれば、手足の一本ぐらい折ってもかまわないわ……っ！」

第九人工空島。巨大湖上空。
ちっ!?　丁寧に無力化するには、厄介な連携だな……っ!?
多数の射砲撃系空士による無数の射撃を、《絶力》で底上げした速力で強引に振り切ろうとし、立ちはだかる近接系の空士たちの斬撃には身を翻し、徒手空拳で応じる。
ちょうどカナタを中心に球形陣が敷かれており、内円を近接系の空士たちが、外円を射砲撃系の空士たちが固めている構図である。
カナタが拳を振るおうとすると、近接系の空士たちは退いて行く。追撃したいところだが、それは外円に近付くことを意味する。射砲撃が厳しくなるため、迂闊に近づけない。

前夜祭の晩の《アスモデウス》たちと同じく、連携は見事なものだ。

殺さずの戦いを挑むカナタの視界の向こうに、教え子たちの姿が入った。激戦の疲労が貌に色濃く表れ、誰もが疲れ切った貌をしている。このままでは危ういと判断し、戦闘機動を継続しながら、カナタは球形陣の向こう側へ問いかける。

『ユーリ、お前さっきから肉ダルマと戦い続けてかなり疲労してるだろ。ここでさらに対人戦闘をして大丈夫なのか？』

『まさか。この程度どうってことありません、わたしはカナタ先輩と同じ特務ですから』

覇気を取り戻し、魔槍を握りしめたユーリが言い放つ。

『せっかくの後背を突いた形です。敵陣の一角を掻きまわしてみせます。行きます……っ！』

魔槍戦技――翼翔槍

ユーリたちの接近に気づき、侵攻を拒もうとした射砲撃系の空士へ、ユーリが戦技を放った。的確に敵の武器へと狙いを絞り、魔槍で吹き飛ばす。続いて射砲撃系の空士たちが、ユーリを集中攻撃しようとするも、ユーリは逆に加速。敵陣の懐へと飛び込み、敵の一角に乱れが生じさせた。

特務の矜持って奴だな、とカナタが感心するのも束の間、

『いまですっ！　レクティさん、ブレアさん……っ！』

『行きます……っ！』

『うぬ……っ！』

絶妙なタイミングで、リコを率いた、レクティとブレアが外円に吶喊。混乱する射砲撃系の空士たちに、魔双剣を振るう。二閃十殺の斬撃は、的確に黒い卵型のブローチを破壊。数名の空士が瞬く間に地に墜ち去った。

『レクティ、ブレアは大丈夫か？　魔双剣は手数が多い分、疲労も大きいだろう』

『そのぅ……だ、大丈夫ですカナタさん……っ!?』

『うぬ。主の御心労に比べれば、この程度どうということはありません……っ！』

レクティとブレアはお互いに貌を見合うと、ふっと笑みを零した。カナタに労われたことが、余程うれしかったのだろう。未だに疲労は色濃く残っているはずだが、背中に羽が生えたかのように各段に動きが軽くなった。普段から厳しいアイゼナッハの鍛錬を受けてきただけはあるな、とカナタが得心していると、

『レクティさん、ブレアさん。内円を構築する空士たちがこちらに向かって来ます。一戦交えますよ』

『は、はいっ！　覚悟はできてます……っ！』

神妙しようと立ち塞がる空士たちを前にリコを率いて先へと続く。

『手加減するでないぞレクティ。私たちの実力では、手を抜けばやられる』

ユーリたち前衛三人組は敵の包囲をこじ開け、壁となり、細く不安定ながら、空に道を作ってみせた。その道を、リコが飛翔し、カナタのもとへ向かってくる。

『カナタ先輩、リコさんをお願いします……っ！』

大群相手に引けを取らぬ教え子たちを見やり、カナタが口元を弛ませる。

ちょっと見ないうちに大分逞しくなったな。ユーリもレクティもブレアも、もう体力も魔力も限界を迎えているはずなのに、踏ん張りを利かせてる。

極限状況で、彼女たちの心の強さが如実に表れていた。

リコとの合流直前に、カナタの気が弛むとでも思ったのだろうか。急降下した空士二人がカナタを背後から襲おうとする。だが、気配を読んでいた彼は左肩から斬り落とすような斬撃を、身を捻って躱すと同時に、右手で裏拳を叩き込む。遅れてもう一人の空士が魔剣で斬りかかってくるが、すぐにカナタの回し蹴りを浴び、墜ちて行った。

『何の用だ？』

『キミの手を貸してほしい。この湖水を――』

『盛大に弾けっていうんだろ』

『ふっ、声にせずに伝わるとは。さすがは女神なわたしの教官を務めるだけはあるな』

この状況でもリコは相変わらずだな、とカナタは感心しながら、虚空から魔槍剣を展開し、両手で柄を握り込んだ。

『にしても、お前は副隊長として相当成長したみたいだな』

『どうしてそう思うんだ？』

『本当はもう限界なのを我慢してるんだろ？　髪なんかぼさぼさだし、なんだか水苦がついてるぞ。貌色も一日で

悪いってわかるよ』

リコの貌色は、明らかに魔力切れの初期症状のそれだ。もとからスタミナ不足のリコだ、労えば曇痴のひとつでも出てくるだろう、とカナタは考えていたが、

『ふっ、実を言うと、限界などとうに通り越している』

案の定リコは文句を言うかのように思えたが、

『だが、キミの声を聞くと不思議と元気が出るんだ。まだ頑張れる気がする』

『へっ、お世辞を言っても何もでないぜ』

それを聞いたカナタは静かに頷き、魔砲剣を展開し、戦技を放つ。

魔砲剣戦技——砲千華

シリンダーが五分の一回転する毎に、巨大な、白い、エネルギー弾が放たれる。それらは湖中で五発同時に炸裂し、湖水の全てを爆ぜ散らした。人工空島中を循環する大量の水が、想像もつかないような巨大な水柱となり天高く聳え立つ。

それはカナタたちの戦闘空域まで辿り着いた。湖水のしぶきを含む周囲の空気は上空で一気に冷却され、雲霧となり視界を著しく悪化させる。

天災の如きそのチカラに、リコが一瞬我を忘れるのが見て取れた。

『さてと、全員で急降下するぞ。つっても、俺は敵の注意を引きすぎてるから、簡単に逃げられるとは思ってねーけどな』

にやりと不敵な笑みを浮かべ、カナタは暗に敵の注意を引き付けると伝えた。

『ああ、ではキミに頭張ってもらおう。みんな、よく聞け。わたしたちは当初の予定通り逃げるぞ』

リコが軽く頷くのを見たあと、カナタは巨大な水柱の中へと姿を消した。

第九人工空島。中央制御棟上空。

「ひょっとして、本当にカナタ・エイジと一緒に逃げたの？」

くぐもった爆発音で振りかえったリーゼリットの視界には、空高くにまで弾け飛んだ湖水が、一瞬でリコたちを覆い隠す光景が映った。

逃がすまいと慌ててリーゼリットが眼を凝らすと、瞬く間に急降下して、密林へ逃げ込もうとするカナタの姿に気づいた。

リコたちの姿が見当たらなかったが、湖水の柱のせいで死角になったのだろうと見当をつける。

「密林に逃げ込んだ黒髪のお兄ちゃんたちを追い駆けなさい。ミソラの仲間たちは、もうすぐ魔力切れになるはずよ。それと湖面上空にも何体か残して。敵が湖水の中に潜んでいるかもしれないから」

リコに再度奇襲されることを想定し、リーゼリットは警戒を欠かさない。

それから孤軍奮闘するミソラを見やり、

「ふふっ、ミソラはもう魔力切れみたいね。動けても、せいぜい一撃が限度っていうところじゃないかしら」

『く……っ!?』

完全に疲れ切って、肩で息をするミソラには減らず口を叩く余裕すらない。

「終わりよっ！　腕の一本でも斬り落としなさい《アマイモン》……っ！」

ミソラへ向かって、巨大な鈍色の怪物が迫る。

《アマイモン》の巨大な刀腕が豪快に振り下された刹那、リーゼリットの表情は冴えない。いや、むしろそれどころか、あり得ない、と驚愕に包まれた貌をしていた。

「どうしてあなたたちがここにっ!?　逃げたはずじゃ……っ!?」

リーゼリットの視界に映っていたのは、右肘から先を吹き飛ばされた《アマイモン》と、撃墜を覚悟するミソラ。

そして——密林へ逃げたはずのリコたちの姿だった。

『不幸にもミソラは小隊長だからな、副隊長のわたしが見捨てるわけにはいかないんだ』

《アマイモン》に障壁を展開する暇を与えず、衝力懲射を放ったリコが言い放った。彼女たちの直下には、地下へと繋がる大穴がある。ミソラが水蒸気爆発を引き起こすために、収束魔砲で生み出した大穴だ。

まさか湖水の爆発を隠れ蓑して、湖中からさらに地下貯水槽を通ってきたの……っ!?　人工空島の構造に疎いリ

ーゼリットには、思いも寄らぬ手だ。

『相手は手負いだっ！　攻城剣撃陣で仕掛けるぞ……っ！』

指示を出したリコを先頭に、ミソラが空けた大穴から姿を現したレクティ、ブレア、ユーリが、縦一直線の形で、《アマイモン》へ襲い掛かる。地下水路を移動中に、全員が戦技の発動に必要な魔力を蓄えていたのだろう、それぞれが握る武器が魔力光で輝いている。

『喰らえ……っ！』

魔統戦技――衝力掃射

スナイパーライフル型の魔銃から放たれた、青白く巨大な魔力弾が、《アマイモン》を捉える。躱しきれないと判断した《アマイモン》は足を止め、障壁を展開し防ぐ。

『レクティ、次を頼む』

『は、はいっ!?　ま、任せてください……っ!?』

《アマイモン》の脇を掠めるように飛び去ったリコに続き、二番手を駆るレクティが地を這う燕のような構えを取る。

『行きます……っ！』

アイゼナッハ流魔双剣戦技――飛炎衝天撃

黄金色の輝きとともに、灼熱を纏う神速の突きが放たれる。片腕を失った《アマイモン》は《崩力》で強化した障壁を展開。これを防ぎ切るが、障壁に僅かな亀裂が入った。

『ブ、ブレアさん、お願いします』

『うぬ。次は私の番だ』

レクティが素早く飛び退くと、休む暇を与えずに、三番手を駆るブレアが閃撃を放つ。

アイゼナッハ流魔双剣戦技――飛炎衝天撃

こちらは白い輝きを帯びた、灼熱を纏う神速の突き。《アマイモン》の障壁に、亀裂を深々と広げるも、破壊には至らない。だが、

『ユーリ先輩……っ！』

『任せてください』

最後に四番手を駆るユーリが、さらに戦技を浴びせる。

魔槍戦技――翼翔槍

渦巻く疾風を纏った槍撃は、《アマイモン》の障壁を直撃。積み重なる戦技に亀裂が入っていた障壁を粉砕してみせた……！

《アマイモン》は残っている刀腕で、ユーリの戦技を防ごうとする。だが、翼翔槍の勢いに押し負け、刀腕は軽々と弾かれた。ボディーが完全にがら空きだ。

『終わりです……っ！』

ユーリの魔槍が動く。疾風突き、棒打ち、烈槍返し、乱突き――。流麗な連撃は、借りものの《崩力》を宿す《アマイモン》の胴体を深々と切り刻もうとする。一瞬の間に《アマイモン》の胴体が穿たれ、胸部に隠れた黒い卵型のブローチが露出し、粉砕。その巨体はまるで命を失ったかのように急激に老いを迎え、灰となり消え去った。

《アマイモン》を仕留めたのは、単縦陣で敵の一点に連続して戦技を浴びせ、分厚い装甲を剝ぎ取り、致命傷を与える戦術。

――攻城剣撃陣。

本来ならば、装甲の厚い大型魔甲蟲を倒すための戦術を、魔甲蟲としては小型種に分類される《アマイモン》相手に実践したのだ。

『《アマイモン》……っ!?』

一瞬でペットを失ったリーゼリットが叫んだ。

『ミソラさん、あとは頼みます』
先程の連撃で魔力を使い果たしたユーリたちが降下していく。
『ありがとうユーリさん。あとは任せてください』

役目を果たした仲間たちを一瞥したあと、ミソラはリーゼリットと対峙する。
『黒髪のお兄ちゃんが来るまでは虫の息だったのに、あのお姉ちゃんたちのどこにあんなチカラが……っ!?』
『あんたにはわからないでしょうね。E601小隊は、あいつの存在があって、初めて完成するのよ』
『ミソラのくせにわけわかんないことを言わないでっ!? ゼス様から頂いた《アスモデウス》はもうないっていうのに……赦さないっ! 赦さない赦さない赦さないーーーっ!』
子供が癇癪を起したみたいに怒鳴るリーゼリットは、地団太でも踏みそうな勢いだった。
『終わりよリーゼリット。これからあんたを叩き落としてやるわ』
『わたしを舐めないで……っ!?』
怒り狂ったリーゼリットは、両手に宿した黒い燐光を自らに纏わせる。その直後、リーゼリットのチカラが、彼女の体内で爆発的に膨れ上がった。
『な、なにをしたの……っ!?』
『反魂の錯乱を自分に使って、本来ならかかるべき脳の制限を外してるのよ。わたしが全力を出せば、この人工空島ごとあなたたちを倒せるんだから』
もう手段を選ばないということだろう。しかし、
『させないわ、覚悟しなさいリーゼリット……っ!』
充填中のリーゼリットに、ミソラが渾身の三点砲撃で仕掛ける。立て続けに放たれる、白銀色の砲撃。だが、
『ミーナ……っ!』
リーゼリットの一声に応じ、ミーナが咄嗟に盾となった。ミソラの砲撃二発は真っ二つに斬られ、敢えなく霧散。しかし、ミソラの砲撃には勢いがあり、最後の三発目の砲撃はミーナの斧撃を押しこみ、半ば分断されながらも再びミーナへと直撃した。

なぜか、あの障壁破壊のミーナの斧撃をだ。
激しい爆煙がミーナを包みこむ。きっと彼女は今、激痛に苛まれていることだろう。
『残念だったわねミソラ。あなたの攻撃はミーナを傷つけただけよ』
再びミーナが犠牲となるが、ミソラは揺るがぬ双眸でその人物を見据え続ける。まるで何かの結果を確信しているかのように、砲撃で黒いドレスがほぼ吹き飛び、額から軽く血を流し、体中ぼろぼろに傷ついて半裸になったミーナを。
『ミーナさん……っ!』
『終わりよミソラ。ミーナ、あなたはそのままミソラを墜としにかかりなさいっ! あなたもろとも、ミソラを木っ端微塵に吹き飛ばしてあげる……っ!』
眼前にいるのは、チカラの尽きかけたミソラだけ。獲物を追い詰めたこの状況に、リーゼリットは格別な高揚感を覚えているらしい。高揚は閃きを生み、ミソラたちをさらに追い込もうとする。
『ううん、そうじゃない。ミーナを人質にして脅せばいいんだ。そうすれば、ミソラたちも黒髪のお兄ちゃんも、降参するしかなくなるし』
極天に達した黒い光――極光を両手に充填するリーゼリットが叫ぶように口にした。
これまで必死に気づかせまいとした最悪の策を口にされ、ミソラが固唾を呑みこむ。
『命令変更よミーナ。あなたはわたしの傍まで来て、人質になりなさい……っ!』
しかし、ミーナは動かない。
『どうしたのっ! 聞こえてないのミーナっ! わたしの傍まで来て、人質に――』
なりなさい、と言いかけ、リーゼリットがすぐに口を噤んだ。なぜならば、明確な敵意がチカラとなり、轟っ!とリーゼリットへ叩きつけられたからだ。咄嗟に呪術障壁で防がなければ、致命傷を負っていたことだろう。
護衛するリーゼリットの瞳には、巨大な魔戦斧を叩きつけたミーナの姿が映っていた。
『どういうつもりミーナ? なんでペットのくせに、わたしに逆らえるの?』
『あなたのペットなんて、お断りだからよ』
ミーナは、怒りで瞳を爛々と滾らせ、不愉快な視線で睨みつけてくる。彼女の腹部にあった、黒い卵型のブローチが消えている。

『どうして？　ミーナの盾は障壁で防御するように仕組んでおいたのに？』

感極まったミソラが叫ぶ。

『ミーナさんっ！　やっぱり……っ！』

やはり、ミーナは自らブローチを破壊するため、瞬きを送ってきていたのだ。ミソラなら、きっと自分の意図を、想いを汲み、呪詛の支配を免れるための一石を投じてくれると信じて。そして可能性は紡がれ、ミーナは痛烈な砲撃を、電気を纏う体で浴びる代償に、解放という対価を得たのだ。

「まさかっ!?　呪詛を障壁ごと破壊するためだけに、敢えてミソラの砲撃を浴びたっていうのっ!?　当たりどころが悪かったら死んでるのに……っ!?」

リーゼリットは、このときになってミソラの狙いを悟る。しかし、彼女はすぐに落ち着きを取り戻し、

「さすがミソラ、本当にお馬鹿なことを考えるわね。でも、いいわ。ならもう一度反魂の錯乱で、ミーナをわたしのペットにするだけよ」

《崩刀》で強化した呪術障壁を破られないという前提で言い放った。だが――

『そう何度も……っ！』

叫びながら、ミーナが体中から放電を始めた。そして、とうに限界を迎えているにもかかわらずミーナは、

『ミソラさんたちが必死になって戦ってるのに、わたしが何度も足を引っ張っていいわけないじゃないの……っ！』

全力で魔戦斧を振り下した……！

狙めないでちょうだい……っ！

ミソラたちと戦闘する最中に覚えたのは、人生最大の屈辱だった。

せめてもの幸いは、彼女の強靭な意志が僅かに呪詛に抗え、虚ろな瞳の瞬きなどで、ミソラに意図を汲んでもらえたことか。

全身からの激痛でロクに動かせぬ体を、ミーナは自分の筋肉に強引に電気を流し、強制的に動かす。ここで倒れることは、彼女にとって赦されない行為であり、一生の恥に他ならない。

障壁破壊と呼ばれる斧撃を、リーゼリットへ叩き込みながら、ミーナは愚う。

カナタ・エイジは言っていた。

――もし俺になんかあったら、ミソラたちのことを頼みたい

なのに、わたしはミソラさんを庇うどころか……足を引っ張ってしまった。しかも、あのカナタ・エイジに目撃されてしまった。リーゼリットの傀儡になって、ミソラさんたちと対峙する様を。

ミーナが必死に魔戦斧を振るう。

ミソラさんは託してくれた。わたしに挽回する機会を。ここで、リーゼリットの呪術障壁を破りさえすれば、勝機が生まれる。そうすれば、全員でこの窮地を脱せる。

たとえ腕が千切れたってかまわない。たとえ足が千切れたってかまわない。

だから、チカラが欲しい。リーゼリットを倒すためのチカラが。

魔戦斧を握る手から、血が滴って来る。リーゼリットの呪術障壁が異常に硬く、手の皮が剥け落ちたためだ。それでも、彼女は魔戦斧を振るう。

カナタ・エイジとの約束を少しでも護るために。《雷光一閃》に恥じぬ斧撃を、騎士に恥じぬ斧撃を、必死にリーゼリットに叩き込む。

「あはははは。ただの攻撃で、この障壁が破れるわけないじゃないの」

なおも魔戦斧を振るうミーナを見ながら、

「無駄な抵抗ね。またすぐにペットにしてあげるわ」

鼻で笑うリーゼリットに、ミーナはなおも斧撃を叩き込む。この子にはわからないだろう、騎士の重みが、意中の相手との約束の重みが、後輩たちが託してくれた想いの重みが。

たとえこの身が砕け散っても、この子だけは絶対に倒す、と誓って、ミーナは命を燃やして斧撃を叩き込む。すると、ピキっ！　とリーゼリットの障壁が音を立てた。

リーゼリットが見やると、自らの障壁に明らかな亀裂が入っていた。

「えっ!?　《崩刀》の障壁なのに……っ!?」

慌てて障壁を補強するリーゼリットに、かまわずミーナは魔戦斧を振るう。

障壁破壊の斧撃を、幾度となく叩き込む。斧撃とともに、しぶいた血液がリーゼリットの障壁に付着した。
掌から滲み出る血液のせいで、魔戦斧の柄が滑って握り辛い。それでもミーナは、魔戦斧を振るった。振るい続けた。
「ミーナ、正気なの？　これ以上戦斧を振るうと、もう戦えなくなるわよ」
己の優勢を信じて疑わぬ、リーゼリットが問いかけた。
「だから、どうしたっていうの……っ！」
愚問、とミーナは内心で一蹴する。両腕を犠牲にする覚悟など、とうにできている。
むしろその程度の覚悟すらない、自暴自棄の行動と思われていたならば、屈辱でしかない。
『わたしはね、カナタ・エイジからミソラさんたちのことを託されたのよ……っ！』
そんな彼女たちに、操られたとはいえ刃を振るってしまった。ミソラさんたちは、《アスモデウス》の群れを殲滅してみせたのに……。謝罪の念を込め、ミーナは魔戦斧を振るう。
『あなたは誰かに本気で恋をしたことはある？　誰かを本気で好きになる気持ちはわかる？　――いいえ、まだ子供のあなたにはわからないでしょうね、人を愛するって想いが……っ!?』
「な、なにを言って……っ!?」
『カナタ・エイジが眼の前にいて、ずっと醜態を晒していたわたしの恥辱が、あなたには数万分の一も伝わらないでしょう……っ！』
救援に来た際、カナタはこう言っていた。

――あいつは責任感に溢れている。俺の身になにかあったときは、ミソラたちのことを頼むってお願いしていたくらいにな

だというのに、わたしはなんて無様な……っ！　怒りの念を込め、ミーナは魔戦斧を激しく振り立てる。
その鬼気迫る迫力は、優勢なはずのリーゼリットを怯ませた。
『でもね。そんなわたしでもできることがあるわ。なんだと思う？　――それは、ここであなたに一矢報いることよ。大事な後輩たちに道を示すことよ。《ミストガン》の空士が、決して特務小隊だけではないって……っ！』

そう言って、ミーナが斧撃を嵐のように放ち続ける。
今から半年以上前。
カナタ・エイジが《ミストガン》の裏切り者になったとき。
あの当時は、誰もが彼の言動を理解できなかった。
でも、いまなら理解できる。
なぜ彼が《ミストガン》を敵に回す言動をしたのかを。
だからこそ、ミーナはいま証明しなければならない。
カナタ・エイジが己の名誉を捨てても、空士としての義務を果たしたように、ミーナもここで大怪我を負って空士としての生涯が閉ざされようとも、果たすべきなのだ、彼女の騎士としての矜持――高貴なる者の義務を。
『それこそが、わたしが倒れずに戦斧を振るう理由。そしてあなたにはない、騎士として、空士として、人間としての誇りの重さよ……っ！』
体内で電気変換し、帯電してあった全てのチカラを、最後の一撃に捧げ、彼女は身の丈に不釣り合いな巨大な魔戦斧――《雷帝の嵐》を振り下す。

魔戦斧戦技――雷神粉砕破

ミーナの全てをかけた一撃は、青白く巨大な雷刃となって、リーゼリットへ降り注いだ。それはリーゼリットが《崩力》で強化した障壁を貫き、粉砕し、崩壊させた。
先程までリーゼリットの呪詛で、自身の限界を超えたチカラを発揮していたミーナには、まだ感覚が残っていたのだ。自分の限界を超えた、新しい次元の感覚が。
ねえ、カナタ・エイジ。見てくれた？　これがわたしの生き様よ……っ！
心の中で唱え、己の全てを使い果たしたミーナは、そのまま気絶し落下した。

あれが《雷光一閃》……っ！　その二つ名に恥じぬ、否。その二つ名すら霞んでしまうほどの、鮮烈な空士の生

き様を見せつけられ、ミソラはすぐに言葉が出なかった。

『ミーナさん……っ!?』

はっと我に返ったミソラが、ミーナの身を案じる。すると地上で、ユーリたちがミーナの落下点へ動く様子が見てとれた。ミーナの件は、彼女たちがなんとかしてくれるだろう。

そんなことより、問題なのは――

『ミソラ……っ！』

『わかってる……っ！』

地上からリコの一声に応じ、ミソラはリーゼリットに突っ込んだ。リーゼリットが新しい呪術障壁を展開する前に一撃を叩き込むのだ、ミーナの想いを無駄にしないために。

『いつまでも調子に乗っていたのが、あんたの敗因よ。障壁を立て直す暇なんて与えないわ……っ！』

「いやっ！　こないでミソラ……っ！」

接近するミソラに、リーゼリットが両手に充填した巨大な呪力砲撃を放つ。両手から放たれた黒い乱気流のような呪力砲撃は、ミソラを包み込み、大空を斬り裂いたかのように見えた。しかし、それは幻影。ミソラは突如として、リーゼリットの左側面へ現れる。

そして――

『これで終わりよ……っ！』

長かった戦いの終焉を告げる一撃が、ミソラから放たれた。

エピローグ

第一人工空島。アリエスの離宮。客室。

「あれ？　わたし、生きてる？」

ベッドの上で、リーゼリット・フェアチャイルドが目を覚ました。狭い室内には、彼女と死闘を繰り広げたミソラたちと、カナタとその肩に乗る――エミリー・ウィットベルンの姿があった。

「まあねん。これも、お姉さんの人望のお陰よん」

「……どうしてこんなことを？」

リーゼリットが怪訝そうな貌をする。当然のことながら、敵が自分を殺さないどころか、介抱する状況に理解が追いつかないらしい。それはミソラたちも同じであった。三日間にも及ぶ激戦の疲労に苛まれ、つい先程まで仲間たちと一緒に死んだように眠っていたのだ。

むろん、第九人工空島では眠る前に色々とあった。

カナタからは「よくやったな」と誉められたし、正体不明の妖精サイズの少女からは、リーゼリットに止めを刺さなかったことを感謝された。

カナタは負傷したミーナが眼を覚ましてすぐに、幾つか話をしていたようだった。話の内容は聞こえなかったが、やがてミソラが呼ばれ、ミーナが集めたオーブ二個と、ミーナの小隊に与えられたオーブを託された。これを持って、次のステージに行くのは、E601小隊が相応しいとのことだった。

その後、第一人工空島にあるアリエスの離宮に移動し、ミソラたちは爆睡。眼を覚ましてすぐ、カナタがいるこの客室に集まったが、カナタからはまだ詳しい説明をされていない。みんなが揃ってから説明するとのことで、誰かが来るのを待っているようだ。

「っていうか、リーゼリットは襲ってこないの？　こいつに《崩力》を使われたら、それこそ大変なんじゃ……」

ミソラが怪訝そうに口にすると、

「その点に関しては問題ございません」

客室のドアが開き、丁寧に結わえられた紫髪の少女――クリスティーナ・バルクホルンが姿を現した。

「リーゼリットさんの体には、抵抗しないように、拘束制御術式を打ち込んであります」
「クリスティーナ・バルクホルンもいたの？　裏切り者ばかり集まってるみたいね」
そうつぶやいたリーゼリットが、クリスの背後に控える、白いワンピースを纏い、西洋人形のような美貌を持つ少女――エリス・ヴィーゲルトの姿に気づいた。
「エ、エリス様っ!?　な、なんでここに……っ!?」
「……」
リーゼリットに問われるが、エリスは悔しそうに俯くだけだった。
クリスが、レクティとブレアになにやら書類を手渡す。
そろそろ説明が始まるのか？　と、ミソラはベッドに腰掛けるカナタを見やるが、彼に何かを説明する素振りはない。そのとき、カナタを見るミソラの眼が、恋する乙女の如く、切なく淡い輝きを発しているのに、リコが気づいた。
「ふっ、ミソラ。この男に告るならいまのうちだぞ？」
「こ、ここ、告るっていったい、な、ななな、何の話よ……っ!?」
あからさまにどもり、鼻の頭から耳の先まで一瞬で待っ赤に染まる。
「ちょっ!?　ミ、ミソラさんっ!?　そこまでカナタ先輩のことを……っ!?」
「えっ!?　いや、そ、そういうのじゃないですよユーリさんっ!?　ただあいつを見てて、なんだか胸がどきどきするというか……」
「そ、それは完全に、そ、その、す、好きってことじゃないですか……っ!?」
ここ数日のうちに、明らかに成長したミソラのせいで、ユーリの胸中に不安が募る。
そんなユーリの傍らでは、レクティとブレアが、クリスから手渡された、空戦武踏祭の報告書に眼を通していた。
「ふむ、負傷者は大勢なれど、死者が出なかったのが不幸中の幸いであるな」
「そうですね。ミーナさんもそのぅ……命に別状はないみたいですし」
リーゼリットの呪詛に操られた空士たちは、消耗が激しいらしく、《ベベル》病院で療養しているらしい。救助された人間の名簿には、ミーナとノエルの名前もあった。
「命に別状がないのは当然よ。わたしはあの人たちをみんな、ベットにするつもりだったんだし」

悪びれることなくリーゼリットが言った。と、いつまで経っても事情を説明してくれないカナタに、しびれを切らしたミソラが尋ねる。
「ねえ、誰かを待ってるのはわかるけど、いい加減もう教えなさいよ。いったいリーゼリットって何者なのよ？」
「ま、それもそうだな。べつに義理があるってわけじゃねーし」
カナタは飄々とした表情で答える。
「リーゼリットはさ、人型魔甲蟲、ですか」
「むぅ。人型魔甲蟲って言うらしいよ」
ようやくカナタが説明する気になったらしい。
聞き慣れない単語を耳にした仲間たちが、次々と尋ねる。
「じゃあ、キミの強力なチカラはなんなんだ？」
「ああ、あれのことか。なんつーか、呪力と《崩刀》の代わりみたいなものかな。なんか人類的には大事なチカラらしいぜ」
「えっ!?　ならカナタ先輩の呪力がなくなったっていうことですか……っ!?」
「そのぅ……人類的には大事なチカラって、人類の希望っていう意味じゃ……」
言葉足らずなカナタの台詞の意味を理解し、ミソラたちが情報の重要性を認識する。そして、いよいよ踏み込んだ話に入ろうとしたところで、
「どうやら驚いているみたいだね」
客間の入口に、蒼色の瞳に金髪の美少年の姿があった。前夜祭で共闘したことがある、リバー・エンディケウスという人物だ。浮遊都市連合の評議会議長であるハルトマン・エンディケウスの息子である。彼の傍らには、やたら豪奢な法衣を纏った、つぶらな瞳をした金髪の幼女の姿があった。
その幼女を見やり、なんだかやけに偉そうな子供ね、とミソラは憑う。リーゼリットに痛いめに遭わされた身としては、たとえエンディケウス議長の孫であっても、嫌悪を抱かずにはいられない。
金髪の幼女が、カナタを見答める。
「機密事項をべらべらと、ずいぶんと軽い口ですね」
「こいつらに隠しごとは必要ねーんだよ」

「こいつら、ですか」

やたら奥深みのある眼光を、金髪の幼女が向けてくる。

「あなたが事情に巻き込む価値があるとは思えませんね。見たところ、全員あなたより年下でしょう。面構えも戦士というより、年相応に幼く平和ボケしているように見受けられますが」

「へっ、なかなか手厳しいじゃんか」

「一体誰よっ!? この豪奢な服を着た子供は……っ!?」

苦笑いしたカナタとは対照的に、むっとしたミソラは苛立ちを露わにする。

「なんだかやたら偉そうな態度だし、人様を平和ボケだのなんだのと、まさかリーゼリットみたいな悪子供じゃないでしょうね……っ!?」

その直後、周りの空気が、仲間たちの表情が一瞬で固まった。

えっ!? あたし、なんか間違ったこと言った……っ!? ミソラが怪訝そうに仲間たちの貌を見るが、誰も視線を合わせようとしない。

「ず、頭が高いよキミっ!? 控えて……っ!?」

「ふっ、頭の高さならわたしが一番だ」

リコが一歩前に出て、さっと後ろ髪を掻きあげる。

「覚えておくがいい、わたしの名前はリコ・フラメル。女神の生まれ変わり――」

「リ、リコさんっ!? お馬鹿なのは、ミソラさんだけでもう充分ですっ!? っていうか、リコさんはわかってやってますよね……っ!?」

「そ、そうであるぞっ!? 不敬罪はミソラだけで充分だ……っ!?」

血相を変えたユーリとブレアが慌ててリコの体を引っ張り、自制させる。

「(ぐすんぐすん)ミソラさん、せっかく一緒に死線を潜り抜けたのに、本当に(ぐすん)お馬鹿なんですね(ぐすんぐすん)」

レクティに至っては、今生の別れのように泣き出す始末。

なんでレクティが泣いちゃうの? ただの子供相手に……?

「ちょっと、たかが子供相手になにをそう下手に出るのよ?」

怪訝な貌をするミソラを他所に、金髪の幼女はカナタのもとへと歩を進め、表情一つ変えずに告げる。

「また会いましたね、叛逆者――カナタ・エイジ」

「ああ。また会ったな教皇陛下」

えっ!? 教皇陛下っ!? こいつが叛逆者って謳まれるのは気になるけど、教皇陛下って……? この段で、ようやくミソラは事情を理解する。

「ひょっとして、この子供……すごく偉いの?」

「だから、頭が高いと注意しただろう」

傍らに控えていたリバーが呆れたように言った。ちなみに彼は、教皇の意に反したカナタを見逃した罪で、一生パシリを命じられている。浮遊都市連合の最高責任者――アンネローゼ・サザーランド・ベベルが呆れたようにミソラを見やり、やさぐれた調子で言う。

「子供で悪かったですね。とりあえず、ミソラ・ホイットテールさんには不敬罪で死刑を言い渡します。助けてほしかったら、そこの叛逆者さんに人類に味方するように伝えてください。じゃないと拘束して、魔甲蟲陣営に売り渡します」

えっ!? 叛逆もマジなのっ!? っていうか、あたしが死刑……っ!? 事態を呑みこみ、一気に貌色が青ざめるミソラ。救いを求めるようにリコたちを見やるが、リコたちはやれやれと肩をすくめたり、首を横に振ったり、一向に助けようとする兆しがない。

そんな中、カナタは「ははは」とアンネローゼの言を一笑に付し、

「じゃあ、俺からも要望があるんだけどさ――」

教皇相手に、カナタはとんでもない要求をしてみせた。

教皇浮遊都市《ベベル》。ヴィーゲルト邸。リビングルーム。

「ふむ。残った四校で、決勝トーナメントを行うことになったのか」

ユミエールからの報告書に眼を通しながら、ゼスがつぶやいた。

空戦武踏祭のバトルロワイアルは、結果として運営員会の予想を超えた過酷なものとなり、一時は参加者たちの

生還が危ぶまれたが、犠牲者は出なかった。

しかも、当初の目的通りオーブを三個集めることに成功していた小隊が四つあった。《ベベル》、《コウライ》、《フアルシオン》ともうひとつ――

「まさかここが残るとは思わなかったよ。いや、これはじつに面白い」

あのカナタ・エイジの教え子たちがいる《ミストガン》の代表小隊が生き残っていたことに気づき、ゼスが不敵な笑みを浮かべる。

「どうなさいましたゼス様？」

「なに。人の身が起こす奇跡というものを目の当たりにしたまでさ。いやはや、感涙を覚えると言っても過言ではないだろうね」

カナタ・エイジ以外の《崩力》の使い手がいるという情報はない。

つまりE601小隊は、カナタが介入するまでの間、自力でリーゼリットと《アスモデウス》たちを退けたということになる。激々たるチカラしか持たない人間の奇跡は、ゼスにとって称賛に値したようだ。

「さて、では決勝トーナメントの件だが、わかっているねユミエール。キミたちのデビューとしては最高の舞台だ。全力を以って、この世界の人類を叩き潰して来るといい」

「はっ！　仰せのままに」

ユミエールが恭しく傅く。その直後、リビングルームにキルスティが姿を現した。

「ゼス様、さきほど教皇陛下の使者より手紙が届きました」

そう言って、ゼスへ一通の手紙を手渡す。封を切り、目を通していたゼスは「ほう」と感嘆する声を漏らした。

キルスティが尋ねる。

「いかがなされたのですか？」

「カナタ君が自らの処遇に関して、人類勢力と魔甲蟲勢力間で一度会談したいらしいよ。内容次第では、カナタ君は魔甲蟲勢力に味方して、捕らわれの身となったエリスとリーゼリットの救出に貢献してくれるらしい。エリスとリーゼリットはどうでもいいが、彼のチカラは捨て難いね」

「なっ!?　危険です、あの男は……っ!?」

「ああ。キルスティ、キミの言う通りだよ。キミに手傷を負わせるほどの存在だ」

ゼスは肯定した。カナタの戦闘力は驚異的だ。しかも、カナタはすでにキルスティと刃を交え、生き残っている。魔甲蟲勢力に与するどころか、会談と称して騙し討ちする可能性も考えられ、この会談の真意がどこにあるかゼスでさえ測りかねる。しかし、

「だからこそ、彼をこちらの陣営に招きたいじゃないか。それに彼は――とてもユニークだからね」

状況次第では、魔甲蟲の陣営に与するというその男を、ゼスは掌中に納めたくてたまらなかった。

あとがき

お世話になっております。諸星です。
お忙しい中拙著を手に取って頂き、ありがとうございます。
ようやく登場したミソラたちメインの「空戦」9巻、いかがでしたでしょうか？

じつは個人的に新年から大きな事件がありました。２０１６年ファンタジア文庫感謝会で、初めて乾杯の挨拶をさせていただいたのです！
普段から人前で喋らない方なので、スピーチとかぜんぜんダメなんです。めちゃくちゃ緊張しました。
それでもカンペは見ないぞ、としどろもどろの必死なスピーチになってしまったんですけど、出席者の方々に温かく見守って頂き、無事任務を完遂することができました。
挨拶を終えた後はいろんな方に「よかったですよ」と慰めていただきました……。
ファンタジア文庫編集部の皆様、続いて同期の作家さんたち、さらには先輩作家さん方。さらには司会をなさっていた山本希望さん、野水伊織さんからもフォローされるという始末。
中でも、

「子供の成長を見守る母親のような気持ちになりましたよ」

というお言葉は忘れません。
僕とほぼ同い年の方から言われたのですけど。
でも、慣れないことでも一生懸命するっていいことですよね。

乾杯の挨拶、すごく楽しかったです。普段は話せないような大御所作家さんともお話ができて、幸運でした。
それもこれも、ファンタジア文庫から本を出させて頂いているお蔭です。
これからも読者の皆さんに愉しんで頂けるよう、精進いたします！

最後に謝辞を。
担当編集さまへ。今回も大変ご迷惑をおかけして、申し訳ございません。今後とも何卒よろしくお願いいたします。
甘味みきひろさまへ。お仕事ご多忙の中、今回も綺麗なイラストを、ありがとうございます。
猫童ありすさまへ。「空戦」コミカライズ3巻、発売おめでとうございます。いつもコミカライズありがとうございます。
関係者の皆様へ。流通や販売、印刷など、いつもお世話になっております。ありがとうございます。
読者の皆様へ。皆様のお蔭で、ここまで来ることができました。ありがとうございます。これからも応援をよろしくお願いいたします。

次はいよいよ大台突入の10巻でお会いしましょうっ！　では……っ！

諸星悠
●もろぼしゆう

第24回後期ファンタジア大賞、全賞受賞作『空戦魔導士候補生の教官』でデビュー。現在進行形で、修羅場中。
戦場（いくさば）においては、常に気の休まることのない、そんなどこにでもいる漢のひとり。

空戦魔導士候補生の教官9

諸星 悠

平成28年3月19日 発行

(C)Yuu Morohoshi, Mikihiro Amamu 2016

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

富士見ファンタジア文庫『空戦魔導士候補生の教官9』
平成28年3月25日初版発行

発行者 三坂泰二
発 行 株式会社KADOKAWA
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
0570 002 301（カスタマーサポート・ナビダイヤル）
受付時間 9:00～17:00（土日 祝日 年末年始を除く）

http://www.kadokawa.co.jp/

口絵・本文イラスト／甘味みきひろ（アクアプラス）
カバーデザイン／ビィビィ

空戦魔導士候補生の教官

9

諸星 悠
イラスト・甘味みきひろ
（アクアプラス）

ファンタジア文庫

空戦魔導士候補生の教官 9

A.M.03:00
Blair
Eisenach
Zzz...My master...
I will serve you all my life as your wife...

P.M.04:30
Hmm. This new product isn't bad.
Maybe I should suggest our company to sell it too.